

関ノ入遺跡

—工業団地・住宅団地用地造成に伴う発掘調査概報—

平成16年12月

宮城県 河南町教育委員会

関ノ入遺跡

—工業団地・住宅団地用地造成に伴う発掘調査概報—

発刊の辞

この度、関ノ入遺跡の発掘調査報告書第13集を発刊することになりました。関ノ入遺跡は、須江丘陵の南部にあり、その一帯が工業団地及び住宅団地として開発されることに伴い、発掘調査が行われてきました。確認調査を含めて全ての発掘調査が終了したのは平成8年ですが、その間これまで概報等として昭和63年3月に第2集が発刊されて以来、関ノ入遺跡に関しては、第3集(H.元年)、第4集(H.2年)、第7集(H.5年)、第10集(H.12年)と発掘調査の結果を報告することができました。

しかしながら、関ノ入遺跡から発見された遺構や遺物の調査については、相当量残っており、できるだけ早く調査研究をまとめて報告するように努力してきましたが、その後、縄文遺跡であることが知られている前山地区遺跡群、須江山浄水場、更には三陸道建設に伴う発掘調査等があり、大幅に遅れてしまいました。

今回発刊する第13集では、主に平安時代初期の住居跡や出土した土器、更には、窯跡等についてまとめられています。また、当時使用されたであろう刀や包丁、すき、くわ等の製鉄跡(溶鉱炉)も出現しているので、当時の人々の生活についても、いろいろと想いを新たにすることができるのではないかと思います。

現在、関ノ入遺跡付近にある須江小学校や地域の人達は、古代人の生き方に想いをはせ、彼らと同じ作業工程で関ノ入遺跡から出土した須恵器の粘土と同じ物で土器作りをしたり、遺跡の見学を総合学習の一環として実施し、郷土学習へ発展させていることは大変喜ばしいことです。

また、発掘調査後、開発された関ノ入遺跡一帯は、750戸の住宅建設予定地に200戸を越す住宅が建てられ、工業団地も出現して大きく変わろうとしています。

関ノ入遺跡に関しては、今回まとめた第13集に統いて今後も、これまで発掘された土器等の調査研究が残されていますので、担当の中野裕平社会教育主事を中心にまとめ取り組み、できるだけ早い時期に報告できるよう努力したいと考えています。

土地開発と文化財保護の関係は、今後もいたるところで見られる現象ですが、現在及び未来の創造は「歴史から学ぶ」ことから始まると言われているように、この第13集の発刊が先人の業績から学び、文化財を私達共通の財産として、大切にしていく精神を高めることができるように祈念して発刊の辞といたします。

平成16年12月

河南町教育委員会

教育長 齋藤龍雄

例　　言

1. 本書は、河南町による閑ノ人工業団地用地造成工事、閑ノ入土地地区調整組合による閑ノ入住宅団地用地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された調査の中で、詳細分布調査報告書(第2集・第3集)、概報(第4集)に記載されたもの以外を中心に編集した概報である。

2. 発掘調査は、以下の要項で実施した。

[遺跡名] 閑ノ入遺跡(遺跡番号: 69041)

[所在地] 宮城県桃生郡河南町須江字閑ノ入・茄子川・代官・山崎地内

[調査面積] 約560,000m²(調査面積: 約240,000m²)

[調査期間] 昭和62年8月19日～昭和62年12月17日・昭和63年3月 日～平成元年1月31日・

平成元年3月9日～平成元年10月30日・平成2年4月2日～平成2年12月21日・

平成3年3月13日～平成3年10月22日・平成5年5月25日～平成6年2月1日・

平成6年4月19日～平成6年8月23日

[調査主体] 河南町教育委員会

[調査員] 河南町教育委員会社会教育課 主事 中野裕平(調査時)

同 主事 佐藤敏幸(平成元年4月1日～平成5年3月31日まで)

3. 調査指導 宮城県教育庁文化財保護課

4. 発掘調査・整理作業にあたり、以下の方々から指導・協力をいたいたいた(敬称略)。

宮城県教育庁文化財保護課: 白鳥良一、真山悟、佐藤則之、相原淳一、村田晃一 前東北歴史博物館: 進藤秋輝

東北歴史博物館: 加藤道男、阿部博志、手塚均 多賀城跡調査研究所: 小井川和夫、阿部恵

前河南町教育委員会: 浅野鐵雄 元仙台市立住吉台中学校校長: 平澤英二郎 弘前大学文学部教授: 藤沼邦彦

矢本町教育委員会: 佐藤敏幸 石巻市役所:(故)中村光一、岡道夫、芳賀英実 仙台市営墓地遺跡保存館: 田中剛和
仙台市若林区市民センター: 結城慎一 仙台育英学園高等学校: 渡辺泰伸 石巻市立女子高等学校: 茂木好光

石巻市教育委員会: 木暮亮 鳴瀬町奥松島縄文村歴史資料館: 皆原弘樹 鳴瀬町教育委員会: 赤澤靖章

福島県鹿島町教育委員会: 佐藤友之 岩出山町教育委員会: 加藤明弘 仙台市立五橋中学校: 回崎徹郎

石巻市立石巻中学校: 小野寺周哉 宮城県河南高等学校人文学科部: (故)遠藤卓一郎 植沼敏朗

5. 調査・整理参加者

瀬美悦子、瀬美晃一郎、阿部香織、阿部智行、阿部美栄子、市川敏子、伊藤恵治、伊藤とも子、伊藤ゆう子、内海誠、及川元子、勝又くに子、加藤きわ子、加藤次男、(故)亀山幸之丞、亀山信子、川田久美子、木村公美、木村輝之、

日下和寿、近藤武夫、近藤雪子、今野親大、今野はな子、佐々木智加、(故)佐藤公夫、佐藤定、佐藤次雄、佐藤正秀、

佐藤和子、渋谷清六、鈴木よみ子、(故)高橋吉雄、高橋正、高橋哲也、高橋美好、丹野幸子、津野田大輔、中塙栄子、

中塙喜重、成沢信行、橋浦正也、橋浦たき子、橋浦千代枝、(故)橋浦安雄、米谷京子、(故)三浦真太郎、三浦富子、

三浦正志、河南町教育委員会社会教育課職員

6. 報告書作成にあたっては、以下の者が作業を分担した。

[遺物実測] 佐藤敏幸、中野裕平、川田久美子

[遺物トレース] 丹野幸子、伊藤とも子、川田久美子

[構造トレース] 伊藤とも子、丹野幸子、川田久美子

[遺物拓影] 伊藤とも子、勝又くに子、丹野幸子、中塙栄子、米谷京子

7. 土層の色調表記については、「新版標準土色軸」10版(小山・竹原: 1990.6, 日本色研事業株式会社)に準拠し、土性区分は国際土壤学会法の基準を参考にした。

8. 本書の執筆及び編集は、河南町教育委員会社会教育課主事 中野裕平が担当した。

9. 調査によって得られた資料は、全て河南町教育委員会が保管している。

目 次

発刊の辞	
例 言	
I 遺跡の位置と環境	1
1 遺跡の位置と地理的環境	1
2 遺跡の歴史的環境	1
II 調査経過	7
1 調査に至る経過	7
2 調査の方法と経過	18
III 基本層序	19
IV 検出された遺構と出土遺物	19
1 住居跡 35号住居跡・50号住居跡・51号住居跡・52号住居跡	20
2 積穴遺構 9号積穴遺構	27
3 窯跡 10号窯跡・11号窯跡	28
4 挖立柱建物跡	51
5 粘土採掘坑跡 7号粘土採掘坑跡・11号粘土採掘坑跡・13号粘土採掘坑跡	51
6 土壌 155号土壌・158号土壌・163号土壌・181号土壌	53
7 製鉄遺構 1号製鉄遺構・2号製鉄遺構・3号製鉄遺構	55
8 木炭窯跡 21号窯跡・22号窯跡・23号窯跡	59
9 焼土遺構 101号焼上遺構	64
10 井戸跡 2号井戸跡	64
11 溝状遺構	65
12 塚跡 1号塚跡	65
13 遺物包含層	65
14 その他の出土遺物	65
V 察考とまとめ	65
引用・参考文献	69
写真図版	70
報告書抄録	82
河南町教育委員会文化財関係出版物	

I. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

関ノ入遺跡は、宮城県桃生郡河南町須江字関ノ入・茄子川・代官・山崎・しらさぎ台地内に所在し、JR石巻線佳景山(かけやま)駅の南方約3.5kmにある。遺跡の所在する河南町は面積69.33km²、人口17,974人(平成16年11月末日現在)の町で、宮城県の北東部に位置し、石巻市の北西、矢本町の北方に隣接する。旧北上川は町の北部で江合川と合流し、町の北部及び東部を区画しながら石巻湾に注いでいる。

町の東部には本遺跡の所在する標高60~90mの通称須江丘陵があり、小竹地区を挟んで南北に二分される。西には篠丘丘陵から続く標高70~173mの通称旭山丘陵があり、最高所173.8mの旭山を中心に旭山橢曲と大塩背斜からなる。旭山橢曲は後述の須江丘陵と同様の地層で、大塩背斜は砂岩・砂質シルト岩を主とした新第三紀の地層である。北には最高所173.9mの和渕山とこれに連なる丘陵がある。町の中央は低坦地で、江戸時代には水源池として広沢沼が造られたが、大正10年から昭和3年まで千拓され水田地帯となっている。

本遺跡は、須江丘陵南部の頂部平坦面とそれにつづく斜面に立地しており、頂部の標高は50~60mである。丘陵南部の半分ほどを占める面積を有し、その範囲はまだ広がる様相を示している。現況は宅地、工業用地、杉や雑木の山林で、外に僅かの畠地などがある。

その地層は、砂岩・黒色粘板岩・縞状頁岩・花崗岩質岩の礫からなる新第三紀中新世：追戸層(佳景山礫岩部層)が基盤をなし、砂岩とシルト岩の互層と細粒凝灰岩、礫岩を主体とし、中程に僅かに褐灰~灰黄褐色の粘土質シルト岩を挟む鮮新世：表沢層、層の下部は粘土岩を挟んだ砂質シルト岩と砂岩の互層を主体として、層の上部では淡灰~灰色を呈した陸成的な粘土質シルト岩が発達した鮮新世：俵庭層、さらにその上には部分的に厚さ1m前後の発達した斜層理などの段丘堆積が見受けられる(滝沢・神戸ほか：1984.3)。

2. 遺跡の歴史的環境

町内には、関ノ入遺跡の所在する須江丘陵やその西に位置する旭山丘陵などの丘陵部を中心に、多数の遺跡が分布している。これらの遺跡について、時代別にふれてみたい。

縄文時代の遺跡は24箇所確認されている。この中で、型式名のわかる土器を出土しているのは12遺跡である。時期の古い遺跡から追っていくと、以下のようになる。

桑柄貝塚は、カキを主体とした鹹水産貝塚であり、前期(上川名II式、大木1式)の遺物を包含する(藤沼・小井川ほか：1989.3)。関ノ入遺跡では、前期(大木2式)、中期(大木7a~8b式)、後期の遺物が出土した(中野：1988.3、中野・佐藤：1990.3、佐藤：1993.3)。

朝日貝塚は、ヤマトシジミを主体とした気水産貝塚であり、中期(大木7b、8a、8b式)の遺物を包含する(藤沼・小井川ほか：前掲)。小崎遺跡からは、中期(大木8、9式)、後期、晚期の遺物が採集されている。須江糠塚遺跡からは、中期(大木9式)の遺物が出土した(高橋・阿部：1987.3)。

宝ヶ峯遺跡は、後期の土器型式「宝ヶ峯式」の標式遺跡として、学史的に有名である(伊東信雄：1957.3、松本彦七郎：1919.5、1919.9、志間・桑月：1991.11)。中期、後期(南境式、宝ヶ峯式、金剛寺式)、晚期(大洞B、B C、C I式)の土器や、土偶、スタンプ状土製品、石器、石製品、骨角器など多数の遺物が出

土した。また、遺跡の一部には、オオタニシなどからなる淡水産の貝塚がある(藤沼・小井川ほか:前掲)。

前山D遺跡からは、中期(大木8式)、後期(南境式、宝ヶ峯式、金剛寺式)、晩期(大洞C1式)の上器が出土した。他に土偶、土製品、石器、石製品が出土した。特に、石核、使用痕跡のない石器、石器製作時に派生するチップの出土が顕著である。チップは3000点を超え、数箇所の集中地点がある。ツールが少ないものも特徴である。また、多数のたたき石、未製品の石錐などもある。宝ヶ峯遺跡の南東約250mに位置し、年代的にも重複することから、同遺跡との関連が考えられる遺跡である。

代官山遺跡からは、後期(南境式)の遺物が出土した(佐藤:1993.3)。俵庭遺跡、大沢A遺跡からも後期(南境式)の遺物が採集されている。前山C遺跡、太田沢遺跡からは、後期(南境式)、晩期(大洞B,C式)の遺物が出土した。両遺跡とも宝ヶ峯遺跡に近接しており、その関連が考えられる遺跡である。

外に前山A遺跡・B遺跡、箱清水寺脇遺跡等があり、その多くは、旭山丘陵の麓部で平坦地に接する縁辺や沢をやや入ったところに広がる平坦部や緩斜面に立地する。また、宝ヶ峯遺跡を囲むように、放射状に位置している。しかし、その性格は、貝塚や発掘調査の実施された少数の遺跡を除いては不明である。

弥生時代の遺跡は2箇所確認されている。本鹿夷遺跡では、旧北上川の河床から中期(大泉式)の遺物が採集されている。俵庭遺跡からは、土器は採集されていないが、アメリカ式石鎌が採集されている。

古墳時代の遺跡は8箇所確認されている。須江糠塚遺跡では、前期(塙釜式期第II B段階)の竪穴住居跡が7軒検出された。いずれも方形を基調としており、丘陵尾根上の平坦面に立地している(高橋・阿部:前掲)。

関ノ入遺跡では、前期(塙釜式期第II B～第III段階)の竪穴住居跡2軒と後期(住社式期～栗廬式期)の竪穴住居跡1軒が検出された。前期の竪穴住居跡はいずれも一辺が約3m前後の方形を基調とした小型住居で、丘陵尾根上の平坦面に単独で立地する(佐藤:前掲、中野・市川:2000.3、中野:本書)。

前山A遺跡からも、前期(塙釜式期第II B～第III段階)の竪穴住居跡が1軒検出された。一辺が約6.5m前後の方形を基調とした大型住居で、丘陵尾根上の平坦面に立地している。

新田A遺跡でも前期(塙釜式期第II B段階)の土器が採集されている。鶯の巣遺跡からは、前期(塙釜式終末段階)から中期(南小泉式)にかけての土師器が採集されている。後期の遺跡としては、代官山横穴墓群がある。外に、時期は不明であるが、高森山遺跡、群田遺跡がある。

奈良・平安時代の遺跡は28箇所確認され、その大部分は丘陵上にある。須江丘陵全城には、須恵器生産に関連した遺構が分布している。昭和61年度に調査した須江糠塚遺跡では、奈良時代後半から平安時代初期の竪穴住居跡9軒、9世紀後半から10世紀前半にかけての窯跡6基を検出した(高橋・阿部:前掲)。

昭和62年度から平成9年度まで継続的に調査した関ノ入遺跡では、奈良時代から平安時代前半までの竪穴住居跡50軒(国分寺下層式期18軒、表形ノ入式期24軒、不明8軒)、9世紀初頭から10世紀前半の須恵器を生産した窯跡23基、9世紀代を主体とする粘土採掘坑跡49基、水築坑と推定される土壙8基、10世紀半ば頃と推定される製鉄遺構3基等が検出された(中野・佐藤:前掲、佐藤:前掲、中野:本書)。粘土採掘坑跡の多くは、俵庭層や表沢層から検出された。これらの遺構に伴い、多数の土師器、須恵器が出土した。

須江瓦山窯跡には、奈良・平安時代の瓦や須恵器を生産した窯跡群がある。瓦の一部は、『続日本紀』に記されている社鹿帽あるいは社鹿郡家と推定される矢本町赤井遺跡に供給されている(三宅・進藤・茂木:1987.3、佐藤:1995.3、1999.3)。平成3年度の調査では土壙29基、焼土遺構1基が検出された。土壙の

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	須江糠塚遺跡 (糠塚館跡)	集落跡 墓跡, 城館	縄文(中), 古墳(前), 奈良, 平安, 中世	26	黒沢 A 遺跡	包含地	縄文, 古代
2	須江瓦山窯跡	窯跡	奈良, 平安	27	黒沢 B 遺跡	包含地	縄文, 古代
3	池袋圓遺跡	包含地	古代	28	箱清水 A 遺跡	包含地	縄文(後), 古代
4	広瀬沼遺跡	包含地		29	箱清水 B 遺跡	包含地	縄文, 古代
5	宝ヶ峯遺跡 貝塚	包含地 貝塚	縄文(中~晚), 奈良, 平安	30	箱清水寺脇遺跡	包含地	縄文
6	朝日貝塚	貝塚	縄文(中)	31	小友遺跡	包含地	古代
7	本鹿又貝塚	包含地	弥生	32	高森山遺跡	包含地	古墳, 古代
8	桑柄貝塚	貝塚	縄文(前)	33	大沢 A 遺跡	包含地	縄文(後), 古代
9	塩野田城跡 (塩煮田館跡)	城館	中世	34	大沢 B 遺跡	包含地	縄文
10	宿屋敷跡	城館	中世	35	大沢 C 遺跡	包含地	縄文, 古代
11	斐杏館跡 (斐山館跡)	城館	中世	36	夷田館跡	城館	近世
12	武田館跡 (武田屋敷跡)	城館	中世, 近世	37	代官山遺跡	集落跡 墓跡	縄文(後), 奈良, 平安
13	柏木館跡	城館		38	桑柄遺跡	包含地	古代
14	小崎館跡	城館	近世	39	新田 A 遺跡	包含地	古墳, 古代
15	草田館跡 (草田遺跡)	城館 包含地	縄文, 中世	40	新田 B 遺跡	包含地	古代
16	喜多村館跡 (高地谷館跡)	城館	中世	41	代官山横穴墓群	横穴墓	古墳, 古代
17	青木館跡 (林光館跡)	城館	中世	42	群田遺跡	集落跡	縄文, 古墳, 奈良, 平安, 江戸
18	新城館跡 (勝立館跡)	城館	中世	43	奈良山遺跡	墓跡	古代, 江戸
19	駒場館跡	城館	中世	44	御塩藏場跡	蔵跡	近世
20	俵庭遺跡	包含地	縄文(中・後), 弥生, 古代	45	細田遺跡	墓跡 包含地	縄文, 奈良, 平安
21	長者館跡 (長者平遺跡)	城館 包含地	縄文, 古代, 中世	46	鷺の巣遺跡	包含地	古墳
22	間ノ入遺跡	集落跡 墓跡	縄文(前~後), 古墳(前・後), 奈良, 平安, 中世	47	前山 B 遺跡	包含地	縄文, 古代
23	小崎遺跡	包含地	縄文(中~晚), 奈良, 平安	48	前山 C 遺跡	集落跡	縄文(後・晚), 奈良, 平安
24	太田沢遺跡	集落跡	縄文(晚), 古代	49	前山 D 遺跡	集落跡	縄文(中~晚), 奈良, 平安
25	前山 A 遺跡	集落跡	縄文, 古墳(前), 奈良, 平安				

第1表 遺跡地名表



第1図 河南町の遺跡

中には、粘土採掘坑跡と推定されるもの11基、須恵器窯を横位に埋設したもの1基があった。

代官山遺跡では、8世紀後半と9世紀後半の窯跡が1基ずつと、8世紀末から9世紀初頭にかけての堅穴住居跡1軒が検出された(佐藤:前掲)。

長者館跡(長者平遺跡)では、一辺60m前後の方形区画を土堤状造構と溝状造構がめぐっている。溝状造構は逆台形状の断面形を呈し、上端幅約5~6m、下端幅約1m、最大深約1.8mの大規模な区画溝で、堆積土からは10世紀前半に降下した十和田a火山灰を検出した。近接した代官山遺跡より「佛」とヘラ書きされた土師器坏、関ノ入遺跡からは仦具を模倣したと考えられる土師器多口瓶・鉄鉢形の須恵器鉢が出土したことから、古代寺院と関連した遺構の存在が想定される(佐藤:前掲、中野・市川:2000.3)。

細田遺跡からは、9世紀代の堅穴住居跡3軒などが検出された。この中に、ロクロビット・精製粘土を伴うものがあり、工房跡と推定される。また、別地点の道路法面と、平成10・11年度の調査によって探石工事現場内(現状保存箇所)の斜面に9世紀代の窯跡とそれに伴うと推定される須恵器が発見された。また、平成13年度の調査区の西側斜面からは、9世紀代の須恵器・土師器、窯体の一部が採集されている。

以上、須江丘陵上に存在するこの時期の遺跡群は、いずれも須恵器や瓦の生産に係わっており、須江窯跡群として扱う必要がある(佐藤:前掲)。

旭山丘陵に移り、群田遺跡では、8世紀末から9世紀前半ころの堅穴住居跡1軒とそれに後続する9世紀代の堅穴住居跡2軒、堅穴造構7基、多量の骨片が入った須恵器窯を立位に埋設した土壙1基等が検出された(中野:1993.3)。太田沢遺跡では9世紀前半代の堅穴住居跡1軒などを検出した。また、前山C遺跡・D遺跡からは表杉ノ入式の土師器が出土した。外に小崎遺跡、大沢C遺跡、俵庭遺跡等がある。

中世以降、須江や旭山の丘陵上など14箇所に葛西氏、長江氏関連と推定される城館が築造されている。長者館跡(長者平遺跡)は金堀吉次の仮屋敷跡(藩政期には小島嘉右エ門の除屋敷跡とも言われる)と伝承される。糠塚城跡(須江糠塚遺跡)は古代の中山櫛跡に擬定されたこともあり(清水東四郎:1924.12、鈴木省三:1924.12)、「仙台領内古城書上」には、東西20間、南北16間の規模で、館主は葛西氏家臣須藤勘解由左衛門と記されている(「仙台叢書」:1971)。小規模な平山城で、空堀が一部残存する。塩野田城跡は東西21間、南北27間の規模で、城主は葛西氏家臣須藤勘解由左衛門(一説には矢代斎三郎)と伝承される(「安永風土記」)。小規模な平山城で、空堀や土堤状造構が一部残存する。また、その直下には徳治3年(1307)の板碑がある。夷田館跡は葛西氏家臣夷田氏の居館と伝承される(「風土記御用書上」)小規模な平山城である。小崎館跡では、皇宋通寶、寛永通寶が採集されている。多くの城館跡は小規模な平山城で、年代、館主とも不明である。

また、鹿又・須江両地区を中心に、町内には現在111基(鹿又59基、須江39基、北村9基、和瀬3基、広瀬1基)の板碑が存在する。最古の紀年銘は弘安元年(1278)、最新は文明10年(1478)のものである(佐藤雄一:1986.11、1997.8)。残念ながら多くの板碑は原位置ではない。その中には特徴的な板碑もある。関ノ入遺跡出土の板碑の大部分は、木炭窯の焚口等を強化するために10基以上の板碑を折って燃焼部側壁等に貼り付けた状況で出土した。嘉元3年(1305)、至徳4年(北朝:1387)の紀年銘が判読できる(中野:1994.6、中野:本書)。

鹿又地区には2mを超す大型板碑が3基、1.5~2mの板碑が6基確認されており、五輪塔の正面に刻まれる「キャ・カ・ラ・バ・ア」を左右対称に刻んで五輪塔を形取った「梵字五輪塔板碑」等がある。また、北村字高寺にある高福寺からは5基の板碑が発見されたが、全て江戸時代元禄期前後の墓碑に転用されている。

その中には、天蓋と蓮台を有する阿弥陀三尊板碑や「梵字五輪塔板碑」がある。発見地点の西側背後に小規模な平山城で空堀を有する新城館跡があること、阿弥陀三尊板碑の願文に「鎌倉權五郎五代後葉」の文字が刻んであること、石巻市湊の多福院所在の板碑に「高福」と刻まれており高福寺が中世に存在したと推定されること、江戸時代以前に新城館跡の東側から群田遺跡の西脇を通過して小野木郷（鳴瀬町）に至る道があったとされることなどから深谷保の領主であった長江氏に関連した中世の世界が想定される。外に、『吾妻鏡』仁治2年（1241）5月10日条に記されている「追入（後入）」からも鎌倉時代末期の板碑が2基発見されている。以上、町内に現存する板碑は、ほぼ全て井内石と呼ばれる粘板岩製である。

江戸時代以降、旧北上川や江合川の改修・治水工事が行われ、舟運が盛んになる。平成2年度と11年度に調査した御塩蔵場跡では、基壇状遺構（上面：約400m²）と礎石、焼面遺構を検出した。御塩蔵は、桃生・牡鹿・本吉・気仙の海道四郡及び宇多・亘理両郡から運送された塩を納庫した仙台藩の塩の保管施設である（「風土記御用書上」）（佐藤・庄司：1991.3、中野：2000.11）。群田遺跡からは、主に18・19世紀代の陶器・磁器などが出土して井戸跡や建物を区画する溝があること、「風土記御用書上」に「一、郡田屋敷 武軒」とあることから屋敷跡と考えられる整地面1箇所、墓坑1基を検出した（中野：前掲）。外に、小野一広測一練塚一和渕一氣仙沼を結ぶ気仙道や石巻一広渕一箱清水一前谷地一涌谷を結ぶ涌谷街道、この2つの街道に伴う4箇所の一里塚跡、涌谷街道上の桃生・遠田郡境に設けられた鳥谷坂番所跡、瓦や陶器を生産したと考えられる奈良山遺跡や須江瓦山窯跡、仙台藩の財政再建策の一環として深谷地方の新田開発に係る用水確保のために寛文2年（1662）から5年（1665）にかけて築造された広渕沼（大溜池・大堤）、そこに名跡沼から取水するための錐入堰、松ヶ窪、長岩堰、新錐入堰の潜穴跡、広渕沼から須江村や赤井村に農業用水を引くための赤井堀、新江堀、鹿又村へ農業用水を引くための練塚潜穴跡、嘉右エ門堀などがある。

II. 調査経過

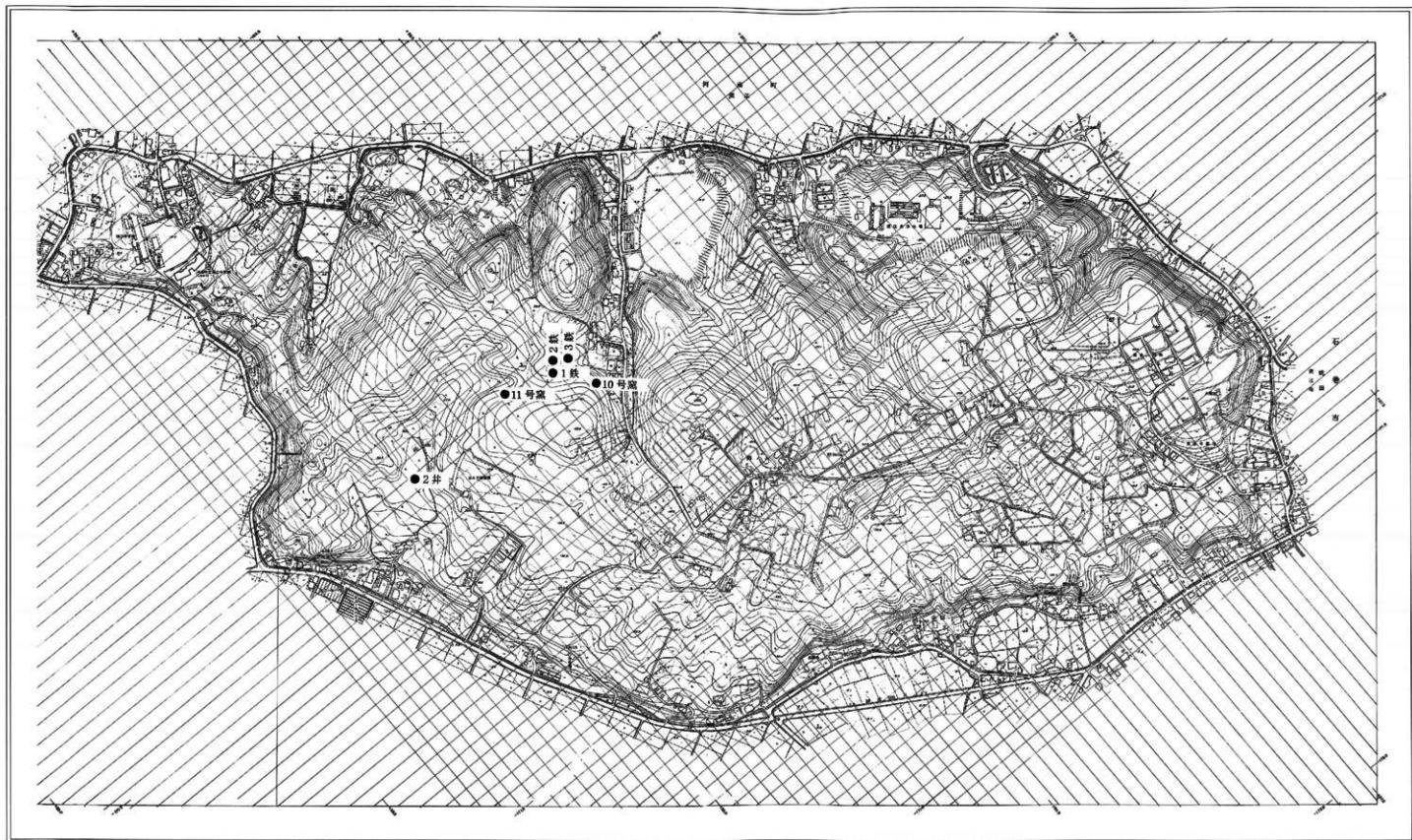
1. 調査に至る経過

関ノ入遺跡の所在する須江丘陵南部は、石巻市の近郊にあたるため、これまでに民間業者等による農用地等を転用しての小規模開発や丘陵部の土取りや埋め立てが行われてきた。また、石巻地方広域水道企業団による須江山浄水場の建設、周辺では三陸道に伴う石巻河南IC・石巻港ICが設置されるなど、石巻圏の都市計画による関連開発の影響が及ぶ地域でもある。

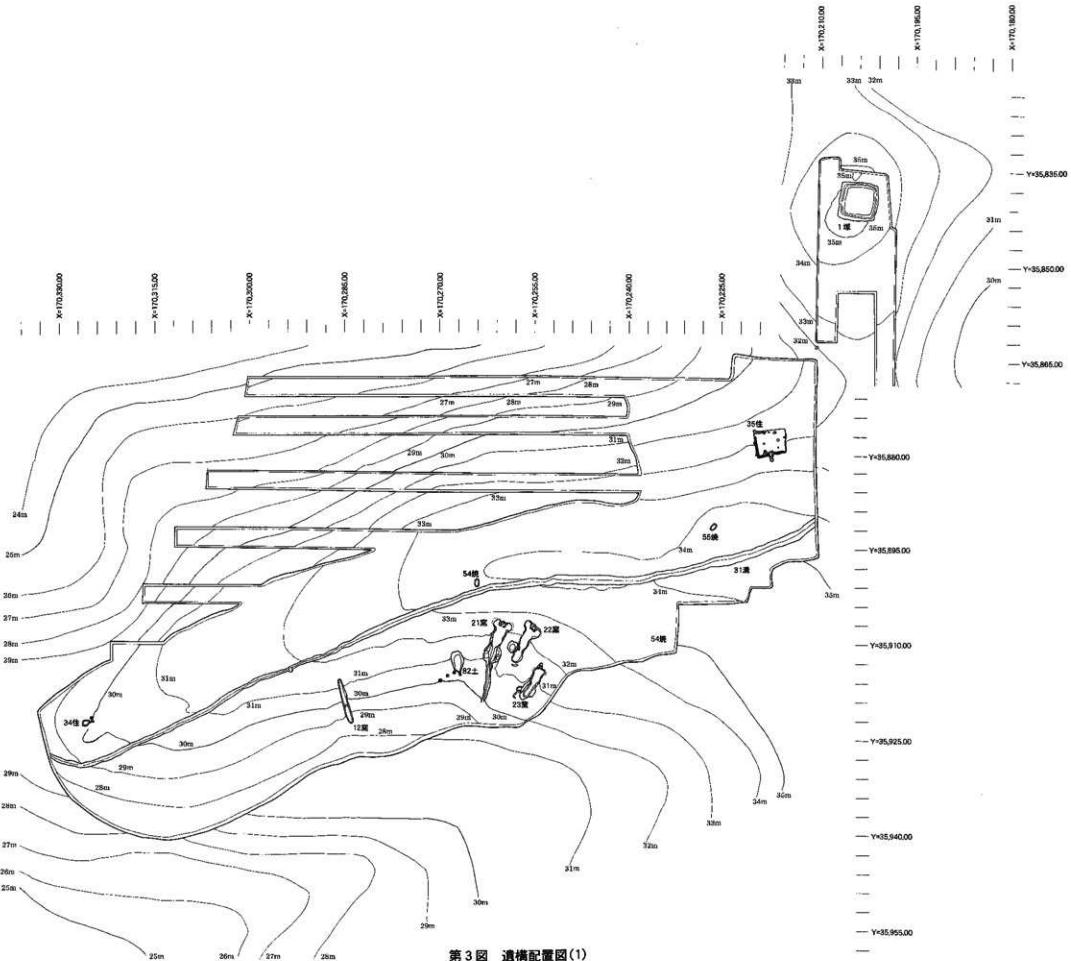
関ノ入地区開発計画は、宮城県桃生郡河南町須江字関ノ入・茄子川地内に河南町による工業団地、関ノ入・茄子川・代官・山崎地内（しらさぎ台は住宅団地造成後の平成9年に設けられた字名）に関ノ入土地区画整理組合による住宅団地の用地造成を行うものである。

昭和61年3月、河南町から開発計画の通知を受けた河南町教育委員会（以下「町教委」）は、その開発計画区域に周知の埋蔵文化財包蔵地である関ノ入遺跡、須江瓦山窯跡B、茄子川上遺跡が含まれることから、直ちに協議に入った。同年8月、県文化財保護課の指導と協力を得て、開発計画区域の踏査を行い、数地点で遺物を探集し、遺構を確認した。

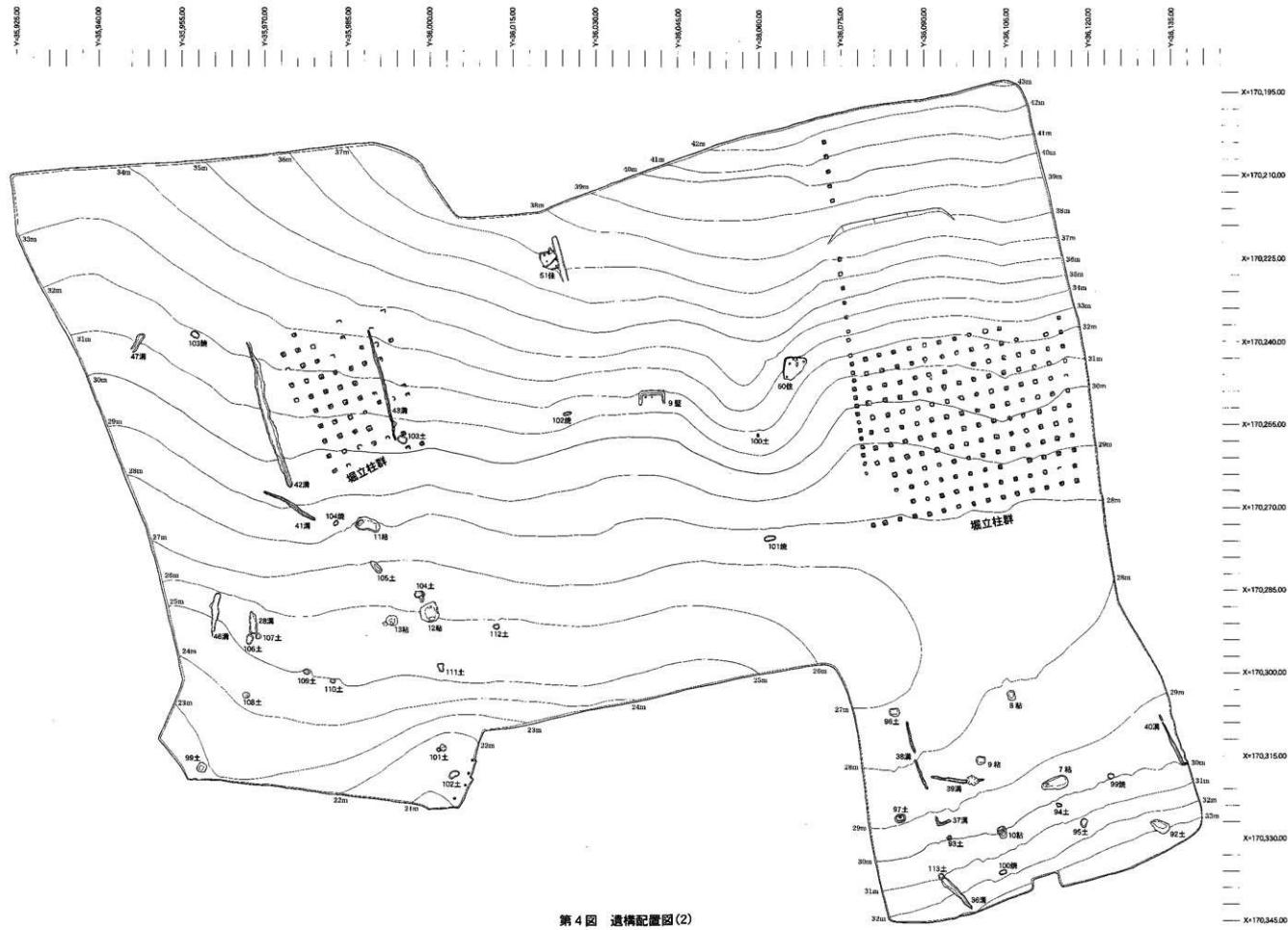
しかし、開発計画区域が約560,000m²と広範囲にわたること、遺跡の範囲や性格が把握されていないこと



第2図 関ノ入遺跡と周辺の地形



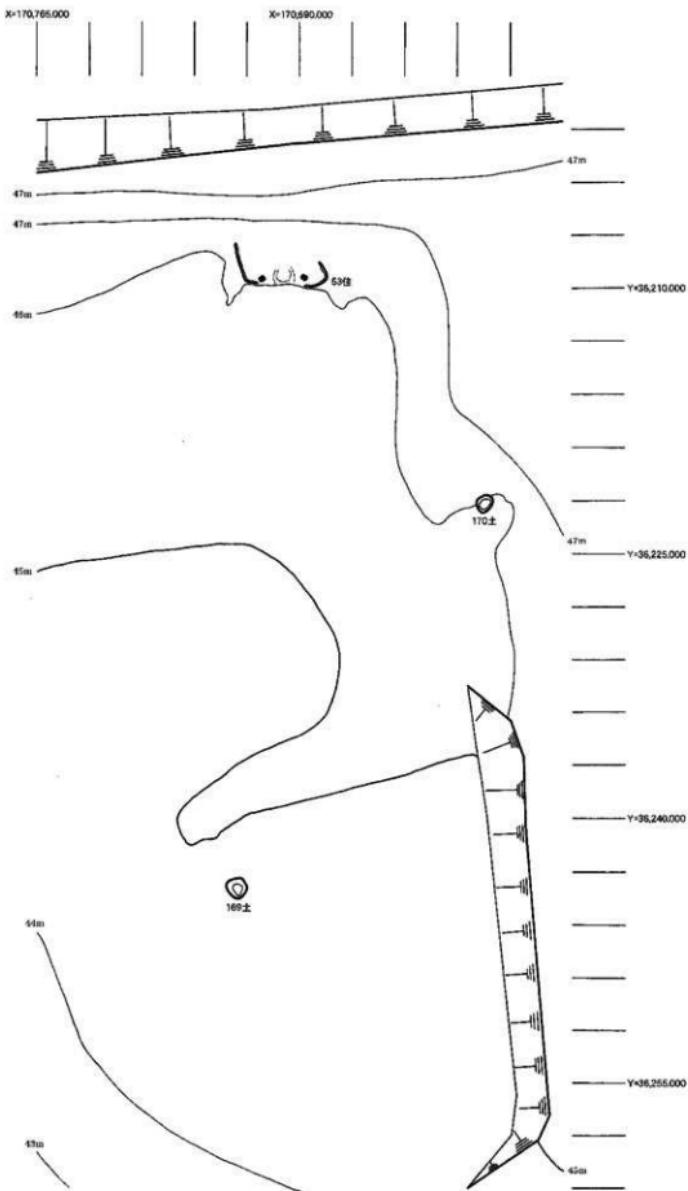
第3図 遺構配置図(1)



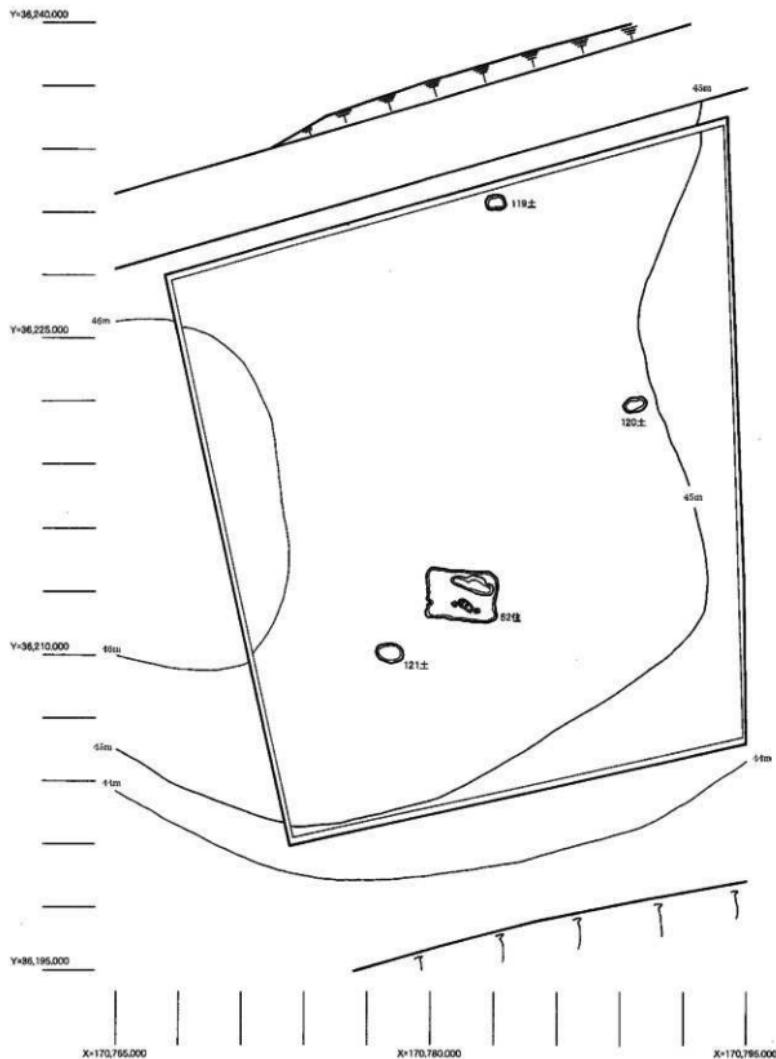
第4図 遺構配置図(2)



第5図 遺構配置図(3)



第6図 造構配置図(4)



第7図 遺構配置図(5)

から、これを把握し、遺跡の保護・保存を図るために調査に迫られた。そこで、町教委は昭和62・63年度の2年間、国庫補助金の交付を得て詳細分布調査を実施し、古代の窯跡群や集落跡などを確認した。

これに基づき、町教委は文化財の保護を目的として、町長部局や関ノ入土地区画整理組合と協議を重ねた。その結果、種々の状況から開発計画の変更は困難であると判断された。開発計画では工業団地の着工が優先されたため、まず工業団地側を、続いて住宅団地側の発掘調査が行われた。河南町は町単独事業、関ノ入土地区画整理組合は組合事業として、本遺跡の発掘調査を町教委に依頼した。

昭和63年7月、町教委は県文化財保護課の指導と協力を得て、記録保存を目的とする発掘調査を開始した。

2. 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、関ノ入地区開発計画による工業団地並びに住宅団地の造成計画予定地に、『宮城県遺跡地図』(宮城県教育委員会:1981.3, 1988.3)登載の周知の埋蔵文化財包蔵地である関ノ入遺跡が存在するため、遺跡の立地する丘陵頂部平坦面とそれに続く斜面を対象として実施したものである。

昭和62・63年度に実施した詳細分布調査では、周知の埋蔵文化財包蔵地関ノ入遺跡、須江瓦山窯跡B、岩手川上遺跡とその隣接地域を対象とした。地形に則して3~6m間隔にトレーニングを設定し、重機で表土除去した。また、年代を把握するため土器、石器等の遺物採集に努めた。これにより、開発計画区域内の遺構の分布や年代が把握され、9世紀代を主体とした遺構が全域に点在することが判った。そこで前記3遺跡を一括包蔵地領域として捉え、本地区を代表する字名のついている関ノ入遺跡として扱うこととした。また、調査対象区域全域の地層や基本層序の概要を把握することに務めた(中野:1988.3, 1989.3)。

昭和63年7月、事前調査を開始したが、調査対象面積が広く、遺構も点在・拡散する傾向にあったため、当初、調査区は詳細分布調査時と同様に、A区、B区、C区、D区、E区、①区、②区、③区、④区に区分した。また、グリッドの設定及び表記についても、分布調査時の原点を基点として3m単位で設定し、東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で表し、両者の組合せでグリッド名を記載した。

効果的に調査を進めるため重機で表土除去し、遺構を確認した。遺構の検出は、踏査段階で可能性の高い箇所は全面、分布調査により遺構を確認または可能性が高いと判断した箇所は、確認した(可能性の高い)地点とその周囲で遺構の広がりが想定される範囲を表土除去して行った。調査地点の末端部で遺構を確認した場合は、自然縁地等により現状保存される場合を除き、範囲を徐々に広げて調査した。調査はD区、C区(一部)、B区、C区(残り)、E区、A区(一部)、①区、②区、③区、A区(残り)、④区の順で進めた。

その結果、堅穴住居跡40軒、掘立柱建物跡20棟、堅穴遺構(※1)5基、須恵器焼成窯(※2)20基、木炭窯6基、粘土採掘坑跡26基、製鉄遺構3基、井戸跡3基、塚跡1基、焼土遺構104基、土壙(※3)178基、溝状遺構34条、遺物包含層1枚を検出した。このうち、堅穴住居跡8軒は本調査のまま、2軒は一部調査後、1軒は調査終了後に埋め戻して現状保存することにした。

※1 本書における堅穴遺構とは、作業場的な空間で、一般的な日常生活における居住空間以外のものを示す。これに対して、堅穴住居は一般的な日常生活の居住空間を意味し、食・住を満たしていると思われるものを示す。

※2 須恵器焼成窯の中には、実際には須恵器の焼成を行っていないが焼成を想定して造られた6号窯、底面の一部が残存するだけだが須恵器を焼成したと推定される13号窯がある。

※3 土壙の中には水窓坑と推定されるもの、粘土採掘坑と推定されるもの、土器熔融と推定されるものを含む。

検出した遺構の実測図は、基本的には1/20図で作成し、詳細に記すべきものについては1/10図、広範開にわたるものについては1/50図、1/100図を併用して作成した。

発掘調査は昭和63年7月4日から始め、一部調査の完了した平成元年6月3日に現地説明会を開いた。以後、平成2年11月18日に2回目の現地説明会、平成5年12月16日に報道発表を行った。平成4年度、7年度に発掘調査は中断したもの、平成8年12月12日の「町道関ノ入住宅団地線」の造成工事箇所における立会調査を最後に、写真、調査区の全景写真及び文章記録等の記録化を全て完了し、調査を終えた。なお、本報告書では、発掘調査時に用いた調査区による区分を取り扱い、遺構の種別ごとに記載した。

III. 基本層序

調査区の立地を大別すれば、丘陵頂部平坦面、緩斜面、急斜面に分けられる。これらの各面の層序には多少の違いはあるものの、基本的には同一の層準を示している。

【I層】褐(10YR 4/4)色・シルト。本遺跡の表土で、全域に分布する。粘性はなく、しまりに欠ける。層厚は、丘陵頂部平坦面では5~15cm、緩斜面では30~40cm、急斜面では10~30cmである。現況の大部分は山林であるが、畑地となっているところでは擾乱を受けている。少量の土師器・須恵器を含む。

【II層】にぶい黄褐(10YR 5/4~10YR 4/3)色・シルト。丘陵頂部平坦面や調査区域東側の南面する斜面を除く全域に分布する。I層よりも粘性があり、しまりに欠け、小礫を主体とする礫をまばらに含む。層厚は、緩斜面では25~35cm、急斜面では5~25cmである。少量の石器、縄文土器、土師器、須恵器、金属製品を含む。

【III層】暗褐(10YR 3/3~7.5YR 3/4)色・砂質シルト。調査区域のほぼ中央を二分して走る町道「茄子川・関ノ入線」より北西の東に面する斜面、1号窯跡灰原の周囲、11号窯跡から掘立柱建物跡群の周囲など、部分的に分布する。粘性が強く、かたくしまった土である。層厚は10~50cmである。少量の石器、縄文土器、土師器、須恵器を含む。

【IV層】黄褐(10YR 5/6)色~明褐(7.5YR 5/6)色、またはにぶい黄橙(10YR 6/4)色・シルト質粘土。全域に分布する。今回検出した遺構の大半は、本層上面で確認された。粘性が強く、しまった土である。

【V層】明赤褐(5YR 5/8)色・シルト質粘土。部分的に灰黄(2.5Y 7/2)色のシルト質粘土を斑状に含み、本層下部にはマンガン粒の沈着が確認される。主に町道「茄子川・関ノ入線」の東側で確認された。粘性が強く、しまった土である。

IV. 検出された遺構と出土遺物

関ノ入遺跡の発掘調査により、竪穴住居跡40軒、掘立柱建物跡20棟、竪穴遺構5基、窯跡26基(須恵器窯20基、木炭窯6基)、粘土採掘坑跡26基、製鉄遺構3基、井戸跡3基、塚跡1基、焼土遺構104基、土壙178基、溝状遺構34条、遺物包含層1枚を検出した。遺構に伴い、土器や石器、石製品、金属製品等の遺物が出土した。

1. 住居跡

竪穴住居跡は、丘陵上の平坦面、緩斜面等より40軒検出した。21軒の集中地区と3軒以内の点在箇所からなる。集中地区は、調査区域北東端の、土取りにより大きく削平を受けた場所の隣接箇所に位置する。この地区からは21軒の竪穴住居跡(8, 10~29号住居跡)が発見されたが、一部現状保存されることになった(16, 19~29号住居跡)ため、13軒のみを調査した。

区分	平面形	規模(m)	柱穴	周溝の状況	備考	特徴
連続台						
1号住居	正方形又は長方形	— × —	2個検出	北壁 有 未検出	火災焼失跡。貯蔵穴状ビット。壁柱穴。	表形ノス式用
2号住居	長方形	5.1 × 4.7	4個検出	北壁 有 有		表形ノス式用
3号住居	正方形	4.5 × 4.2	1個検出	東壁 有 未検出	貯蔵穴状ビット。床構。カマド石組(一部)。	表形ノス式用
4号住居	正方形又は長方形	6.7 × —	未検出	未検出		表形ノス式用
5号住居	正方形	5.6 × 5.4	1個検出	北壁 有 有	貯蔵穴状ビット。壁柱穴。カマドト周溝有。外縁溝。	表形ノス式用
6号住居	正方形	3.6 × 3.4	未検出	未検出	有 無	表形ノス式用
7号住居	正方形又は長方形	4.2 × —	2個検出	北東壁 有 未検出	床構。貯蔵穴状ビット。床構。	表形ノス式用
7号住居	正方形又は長方形	4.2 × —	2個検出	北東壁 有 未検出	貯蔵穴状ビット。床構。	表形ノス式用
8号住居	正方形又は長方形	3.0 × —	未検出	南壁 有 有	貯蔵穴状ビット。壁構部構築に倒壊部使用。	表形ノス式用
9号住居	正方形又は長方形	4.1 × —	1個検出	未検出	有 未検出。貯蔵穴状ビット。	表形ノス式用
10号住居	(新)正方形 (新)長方形	(約)4.6 × 4.2 (約)4.1 × 3.6	3個検出	東壁 有	未検出。床構。壁柱穴。外縁溝。	表形ノス式用
11号住居	正方形又は長方形	5.5 × —	未検出	東壁 有	未検出。10号住居上部を整地して構築。カマド支脚にて石。	表形ノス式用
12号住居	正方形又は長方形	2.9 × —	2個検出	北西壁 有	未検出。貯蔵穴状ビット。	四分下槽式用
13号住居	正方形又は長方形	— × —	未検出	未検出	有 未検出。貯蔵穴状ビット。	表形ノス式用
14号住居	正方形又は長方形	— × —	2個検出	未検出	有 未検出。	表形ノス式用
15号住居	正方形	4.8 × 4.7	6個検出	未検出	有 未検出。貯蔵穴状ビット。床構。壁柱穴。外縁溝。	表形ノス式用
16号住居	正方形又は長方形	6.8 × —	2個検出	北西壁 有	未検出。貯蔵穴状ビット。焼却保存。	四分下槽式用
16号住居	正方形又は長方形	6.0 × —	6個検出	北壁 有	未検出。貯蔵穴状ビット。床構。	四分下槽式用
18号住居	正方形又は長方形	5.6 × —	4個検出	未検出	有 未検出。火災焼失跡。壁柱穴。	表形ノス式用
19号住居	正方形又は長方形	— × —	未検出	北壁 有	未検出。現状保存。	四分下槽式用
20号住居	正方形又は長方形	— × —	—	—	— 現状保存。未調査。	—
21号住居	正方形又は長方形	— × —	—	—	— 現状保存。木造壁。	—
22号住居	正方形又は長方形	5.6 × —	1個検出	未検出	有 未検出。現状保存。	表形ノス式用
23号住居	正方形又は長方形	3.6 × —	未検出	北東壁 有	未検出。現状保存。	表形ノス式用
24号住居	正方形又は長方形	— × —	—	—	— 現状保存。未調査。	—
25号住居	正方形又は長方形	— × —	—	—	— 現状保存。未調査。	—
26号住居	正方形又は長方形	— × —	—	—	— 現状保存。未調査。	—
27号住居	正方形又は長方形	— × —	—	—	— 現状保存。未調査。	—
28号住居	正方形又は長方形	— × —	—	—	— 現状保存。未調査。	—
29号住居	正方形又は長方形	— × —	—	—	— 現状保存。未調査。	—
30号住居	正方形又は長方形	4.8 × —	2個検出	東壁 有	有 貯蔵穴状ビット。床構。壁柱穴。	表形ノス式用
31号住居	長方形	5.6 × 3.6	4個検出	南東壁 有	有 貯蔵穴状ビット。床構。壁柱穴。南西隅に礎石の施設。	表形ノス式用
32号住居	正方形又は長方形	— × —	1個検出	北東壁 有	未検出 貯蔵穴状ビット。壁柱穴。	表形ノス式用
33号住居	正方形又は長方形	— × —	2個検出	未検出	有 未検出	表形ノス式用
34号住居	正方形又は長方形	— × —	未検出	未検出	— 貯蔵穴状ビット。	表形ノス式用
35号住居	長方形	3.0 × 4.0	4個検出	北壁 有	未検出 火災焼失跡。貯蔵穴状ビット(2箇)。壁柱穴。外縁溝。	四分下槽式用
36号住居	正方形又は長方形	4.5 × —	2個検出	北壁 有	未検出 壁柱穴。カマド石組。	表形ノス式用
37号住居	正方形又は長方形	4.3 × —	3個検出	北壁 有	有 壁柱穴。カマド石組。	四分下槽式用
51号住居	正方形又は長方形	— × —	4個検出	北壁 有	有 床構。カマド石組(一部)。	四分下槽式用
52号住居	長方形	3.3 × 2.3	2個検出	未検出	有 未検出 貯蔵穴状ビット。北壁の西側に施設。	壁構式附B-Ⅲ
63号住居	正方形又は長方形	4.5 × —	2個検出	未検出	無 未検出 不明	

第2表 開入遺跡から検出された住居跡(『河南町文化財調査報告書』第7集・第10集掲載分を除く)

(1) 35号住居跡

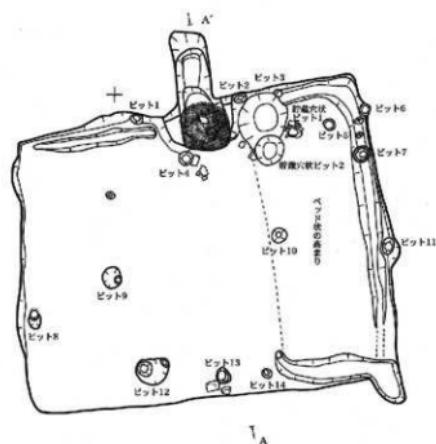
[確認面] ②区の基本層序IV層から確認された。

[重複・増改築] 認められない。

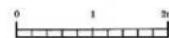
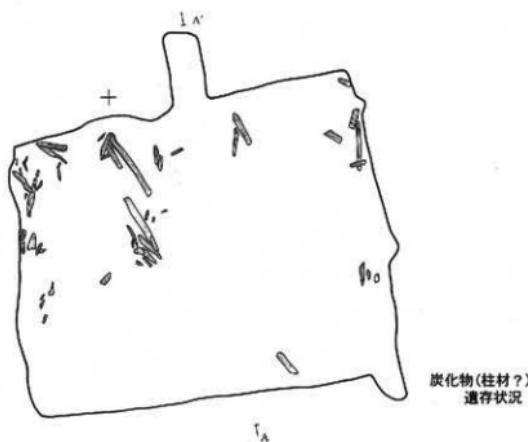
[規模・平面形] 北壁の全部と東壁、西壁の一部が検出された。残存する壁の幅はそれぞれ北壁4.52m、東壁4.10m、西壁3.62mである。平面形は東西4.8m前後、南北3.9m前後の長方形を呈する。

[竪穴層位] 6層に大別される。竪穴1~4層、周溝堆積土、貯蔵穴状ビット堆積土からなる。

1. 住居跡

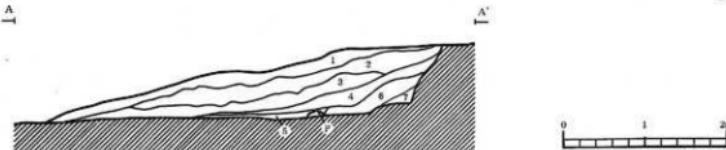


+



+

第8図 35号住居跡



第9図 35号住居跡断面図

No.	土色	土性	参考	堆積地層
1	褐色10YR 4/6	シルト		壁穴1層
2	褐色7.5Y R 4/4	シルト		壁穴2層
3	褐色10YR 2/3	シルト		
4	褐色7.5Y R 5/8	粘土		壁穴3層
5	褐色10Y R 2/3	シルト	多量の炭化物を含む複数層に含む。	
6	灰褐色赤褐色5 YR 4/4	シルト	少量の粘土を粒状・塊状に含む。	壁穴4層
7	褐色10Y R 3/3	粘土質シルト	多量の褐色10Y R 2/3シルト、粘土を粒状に含む。周溝	
8	褐色10Y R 3/2	粘土質シルト	多量の炭化物、少量の土を粒状に含む。	壁P1
9	褐色10Y R 3/4	粘土質シルト	少量の炭化物・粘土・块状土を粒状に含む。	壁P2

第3表 35号住居跡土層註記表

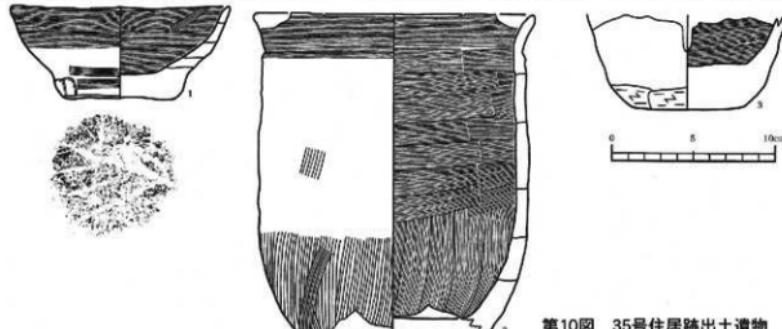
【壁】基本層序、層からなる。最も保存の良い北西隅では47cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

【床面】基本層序IV層を床面とする。凹凸はなく、貼床が施されている。東壁沿い側に南北約3.3m、東西約1.2mのベッド状の高まりが確認された。床面レベルは北側が高く、南側に向かうにつれて徐々に低くなる。全面に炭化材が検出されたことから、火災焼失住居と推定される。

【柱穴】14個のピットが検出された。ピットNo.5・9・10・12は主柱穴、ピットNo.1・2・3・6・7・8・11・13・14は壁柱穴である。ピットNo.4は柱穴ではない。ピットNo.9からは柱材が検出された。

【カマド】北壁のほぼ中央に位置し、燃焼部側壁及び底面の一部と煙道部が検出された。奥行き0.87m、幅0.60m、残存高25cmである。底面及び側壁・奥壁が強い火熱により赤変していた。煙道部は、奥壁から住居跡外部に向かって延びている。長さ0.76m、幅0.42mの規模で、底面レベルは先端に近づくにつれて高くなる。

【周溝】壁と同様に全部は検出されなかったものの壁沿いに一周するものと推定される。幅12~30cm、深さ3~11cmで、断面は「U」形である。底面レベルは北側が高く、南東隅に向かうにつれて徐々に低くなる。



第10図 35号住居跡出土遺物

No.	種別	部位	外観	内部	内面	口径・底径・器高(cm)	参考
1	土鍋類平	底面	ヨコナデナゲサエ	木葉瓶	ヨコナデナゲ	13.6・6.6・5.6	粘土胎體上げ・圓盤12
2	土鍋類	底面	ヨコナデハケ日	—	ヨコナデナゲ	17.0・—・—	
3	土鍋類裏	底面	マメツヘラ削り	ナゲ	—・6.0・—		

第4表 35号住居跡出土遺物

1. 住居跡

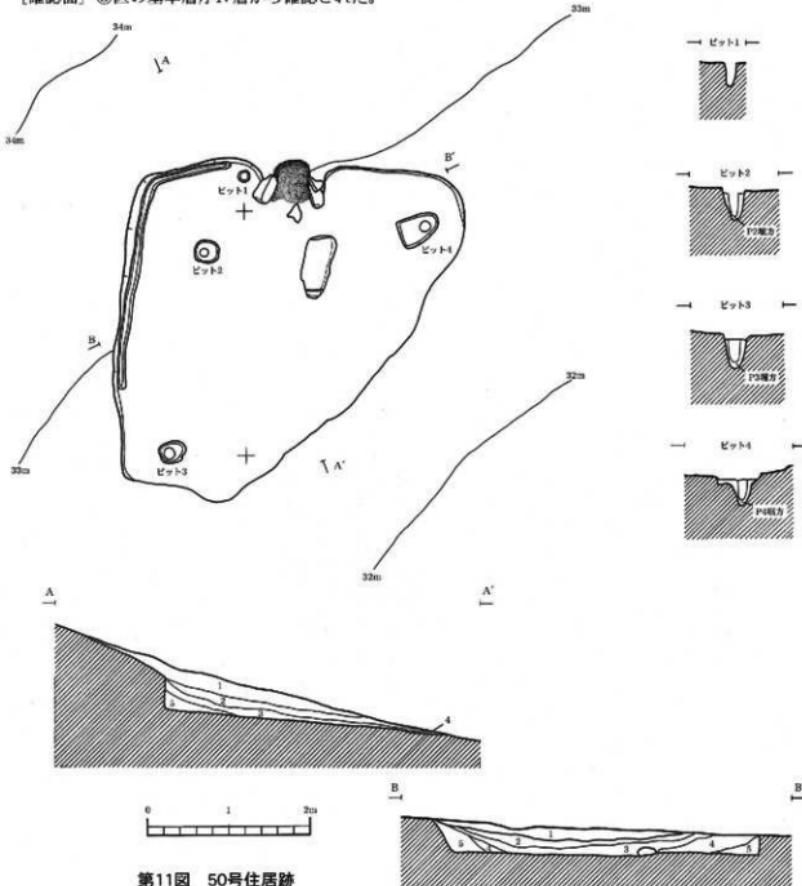
周溝の南東隅に接続して外延溝が検出された。幅26~40cm、深さ2~3cm、断面は「U」形である。住居への排水施設と推定される。

【貯蔵穴状ピット】2個検出された。貯蔵穴状ピット1は直径38cm、貯蔵穴状ピット2は直径67cmの円形を呈する。当初は貯蔵穴状ピット2を用いていたが、後に埋め戻して新たに貯蔵穴状ピット1を設けている。

【出土遺物】床面やカマド・周溝・貯蔵穴状ピットを中心に、土器の一括資料が出土した（第10図）。

(2) 50号住居跡

【確認面】③区の基本層序IV層から確認された。



第11図 50号住居跡

[重複・増改築]認められない。

[規模・平面形]北壁の全部と東壁と西壁の一部が検出された。残存する壁の幅は、それぞれ北壁3.81m、東壁0.45m、西壁3.76mである。平面形は、一辺3.8m前後の正方形または長方形と推定される。

[竪穴層位]4層に大別される。竪穴1～3層と周溝堆積土からなる。層No.2は多量の灰白色火山灰を含んでいる。

[壁]基本層序IV層からなる。最も保存の良い北壁では63cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

[床面]基本層序IV層を床面とする。凹凸はなく、部分的に貼床が施されている。床面レベルは北西隅が最も高く、南東側に向かうにつれて徐々に低くなる。南側と東側の床面の一部は、自然の削平によって損なわれている。

[柱穴]4個のピットが検出された。ピットNo.1は壁柱穴、ピットNo.2～4は主柱穴である。

[カマド]北壁のほぼ中央に位置し、燃焼部側壁及び底面の一部が検出された。燃焼部は奥行き0.57m、幅0.47m、残存高0.43mである。強い火熱によって、側壁・奥壁・底面が赤変していた。側壁の一部は石

No.	土色	土性	備考	堆積範囲
1	薄青10YR3/3	シルト	少量の炭化物・純土を粒状に含。	竪穴1層
2	薄10YR4/4	シルト	多量の灰白色火山灰を粒～塊状、少量の炭化物・地山土を粒状に含。	竪穴2層
3	薄10YR4/4	シルト	少量の炭化物・純土を粒状に含。	竪穴3層
4	薄7.5YR4/4	シルト	少量の炭化物・純土を粒状に含。	竪穴3層
5	薄7.5YR4/6	シルト	少量の炭化物・純土を粒状に含。	竪穴3層
6	黄青10YK6/6	粘土質シルト	少量の炭化物を粒状に含。	黄青

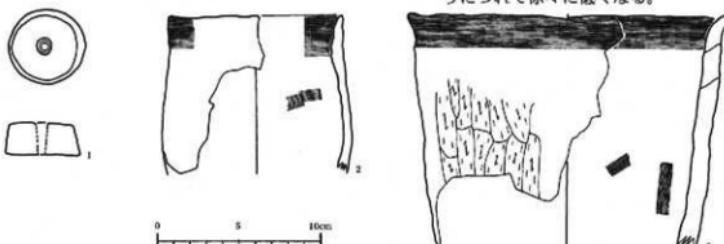
第5表 50号住居跡土層記録表

組によって形成されていた。また、カマドの側壁から南に40cmほど離れた床面にタールの付着した石があり、これも側壁の一部を形成していたものと推定される。

堆積土	上色	土性	備考
P1	薄10YR4/4	シルト	少量の黄青10YR5/6砂質シルト、炭化物を粒状に含。
P2	薄10YR4/4	シルト	少數の炭化物を粒状に含。
P2堆積 にかい(黄青)10YR4/3	砂質シルト	少量の炭化物を粒状に含。	
P3	薄10YR4/4	シルト	少量の炭化物を粒状に含。
P3堆積 にかい(黄青)10YR4/3	砂質シルト	少量の地山土を粒～塊状、少量の炭化物を粒状に含。	
P4	薄10YR4/4	シルト	少數の炭化物を粒状に含。
P4堆積 にかい(黄青)10YR4/3	シルト	少量の炭化物を粒状、地山土を粒～塊状に含。	

第6表 50号住居跡ピット土層記録表

[周溝]北壁と西壁の一部から検出された。他の壁からは検出されなかったため、部分的に設けられたものと推定される。幅8～12cm、深さ2～7cmで、断面は「U」形である。底面レベルは北側が高く、南側に向かうにつれて徐々に低くなる。



第12図 50号住居跡出土遺物

[貯蔵穴状ピット]検出されなかった。

[出土遺物]床面、カマド、周溝を中心に

土器の一括資料が出土した(第12図)。

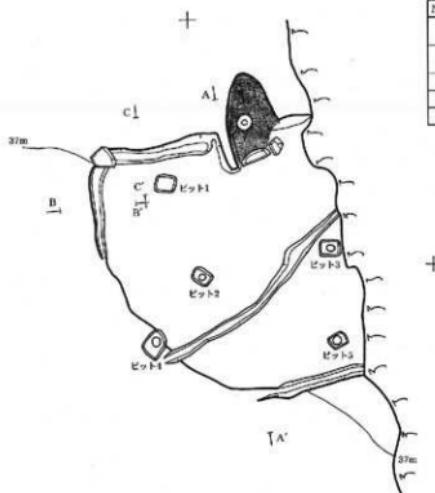
No.	種別	層位	外面	内部	口径・底径・深溝(cm)	備考
1	土鍋	5層	—	—	—	直径2-3
2	土鍋	底面	ナゲ	ナゲ	10.5 ···	直径2-2-1
3	土鍋	底面	ナゲ	ナゲ	19.4 ···	直径2-2-2

第7表 50号住居跡出土遺物観察表

(3) 51号住居跡

[確認面] ③区の基本層序IV層から確認された。

[重複・増改築] 東壁の全部と北壁・南壁・西壁の一部が削平を受けている。

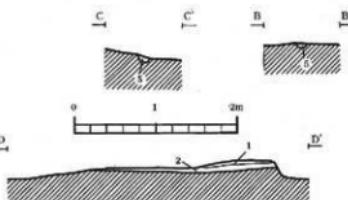


No.	土色	土性	備考	堆積範囲
1	暗褐色10YR3/3	シルト	多量の灰白色火山灰を含む塊状。少量の炭化物・焼土を粒状に含む。	堅穴1層
2	褐色10YR3/4	シルト	少量の炭化物・焼土を粒状・塊状に含む。	堅穴1層
3	褐色10YR4/4	シルト	少量の焼土を塊状に含む。しまり有り。	カマド構築土
4	褐色10YR5/6	シルト	少量の炭化物・焼土を粒状に含む。	*
5	褐色7.5YR4/4	シルト	少量の炭化物・焼土・砕山土を粒状に含む。	周溝

第8表 51号住居跡土層記録表

堆積土	土色	土性	備考
P1	褐色10YR4/4	シルト	少量の炭化物を粒状に含む。
P2	褐色10YR4/4	シルト	少量の炭化物を粒～塊状に含む。
P2堅穴	にがい黄褐色10YR4/3	シルト	少量の炭化物・焼山土を粒状に含む。
P3	褐色10YR4/4	シルト	少量の炭化物を粒～塊状に含む。
P3堅穴	にがい黄褐色10YR5/6	シルト	少量の炭化物・焼山土を粒状に含む。
P4	褐色10YR3/3	シルト	少量の炭化物を粒～塊状に含む。
P4堅穴	にがい黄褐色10YR4/3	シルト	少量の炭化物・焼山土を粒状に含む。
P5	褐色10YR4/4	シルト	少量の炭化物を粒～塊状に含む。
P5堅穴	にがい黄褐色10YR4/3	シルト	少量の炭化物・焼山土を粒～塊状に含む。

第9表 51号住居跡ピット土層記録表



第13図 51号住居跡

[規模・平面形] 北壁と南壁・西壁の一部が検出された。残存する壁の幅は、それぞれ北壁2.76m、南壁1.33m、西壁1.38mである。平面形は一辺3m前後の正方形または長方形と推定される。

[堅穴層位] 3層に大別される。堅穴1層、カマド構築土、周溝体積土からなる。層No.1は少量の灰白色火山灰を含んでいる。

[壁] 基本層序IV層からなる。最も保存の良い北壁では19cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

[床面] 基本層序、層を床面とする。凹凸はなく、部分的に貼床が施されている。床面レベルは北東側が高く、南西側に向かうにつれて徐々に低くなる。床面には北東側から南西側に向かって1条の床溝が検出された。幅9~22cm、深さ2~5cmで、断面は「U」形である。底面レベルは北東側が高く、南西側に向かうにつれて徐々に低くなる。南西側の床面の一部は、自然の削平によって損なわれている。

[柱穴] 5個のピットが検出された。ピットNo.1は柱穴ではない。ピット2~5は主柱穴である。

[カマド] 北壁のほぼ中央に位置し、燃焼部側壁及び底面の一部が検出された。側壁の一部は石組によつて形成されていた。燃焼部は奥行き1.08m、幅0.63m、残存高0.20mである。強い火熱によって、側壁・

奥壁・底面が赤変していた。

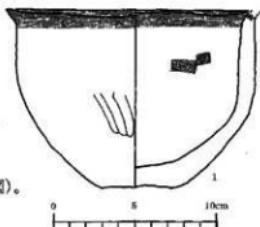
[周溝] 壁と同様に全部は検出されなかったものの壁沿いに一周するものと推定される。幅8~24cm、深さ3~5cmで、断面は「U」形である。底面レベルは北側が高く、南側に向かうにつれて徐々に低くなる。

[貯蔵穴状ピット] 検出されなかった。

[出土遺物] 床面、カマドを中心に、土器の一括資料が出土した(第14図)。

No.	種別	層位	外面	底部	内部	口径・底径・高さ(cm)	備考
1	土器部	カマド底面	ナデヘラミガキ	—	ナデヘラミナデ	—	4.3・1.0.9 留置3-2

第10表 51号住居跡出土遺物観察表



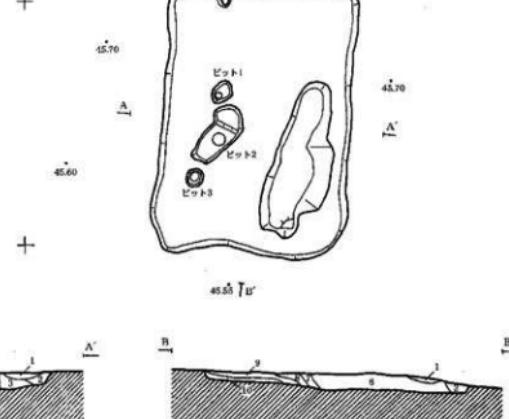
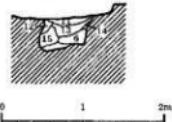
第14図 51号住居跡出土遺物

(4) 52号住居跡

[確認面] ④区の基本層序IV層から確認された。

[重複・増改築] 認められない。

[規模・平面形] 全ての壁が検出された。残存する壁の幅はそれぞれ北壁2.26m、東壁3.20m、南壁2.18m、西壁3.22mである。平面形は東西3.28m、南北2.32mの長方形である。— 貯蔵穴ピット



第15図 52号住居跡

[竪穴層位] 4層に大別される。竪穴1~3層、貯蔵穴ピット堆積土からなる。

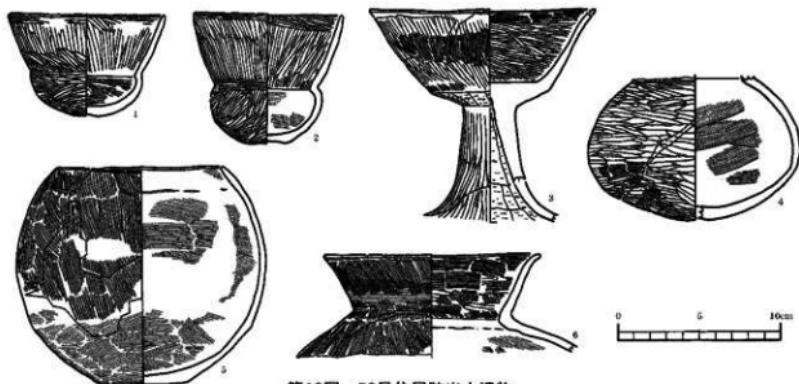
[壁] 基本層序IV層からなる。最も保存の良い北壁では16cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

[床面] 基本層序IV層を床面とする。凹凸はない。床面レベルは北側が高く、南側に向かうにつれて徐々に低くなる。北西側の床面の一部が強い火熱で赤変していた。

No.	土色	土性	備考	堆積範囲
1	褐10YR4/4	シルト	少量の炭化物・焦土を粒状に含む。	壁1層
2	褐7.5YR4/6	シルト	少量の炭化物・施土を粒状に含む。	壁2層
3	にぶ10YR4/5	砂質シルト	少量の炭化物を粒状に含む。	壁3層
4	褐7.5YR4/4	シルト	少量の炭化物・施土を粒状に含む。	壁4層
5	明黄褐10YR6/6	シルト質粘土	少量の施土を粒状に含む。	壁5層
6	明黄褐10YR6/6	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含む。	壁6層
7	明黄褐10YR6/6	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含む。	壁7層
8	にぶ10YR4/5	シルト	少量の炭化物を粒状に含む。	壁8層
9	にぶ10YR4/5	シルト	少量の炭化物・施土を粒状に含む。	壁9層
10	褐7.5YR3/3	シルト	少量の炭化物・施土を粒状に含む。	壁10層
11	褐10YR4/6	シルト	少量の炭化物・施土を粒状に含む。	貯蔵穴P
12	褐7.5YR4/6	粘土質シルト	少量の褐色10YR4/6シルトを粒状に含む。	貯蔵穴P
13	褐10YR4/6	シルト	少量の炭化物・施土を粒状に含む。	貯蔵穴P
14	褐10YR4/6	粘土質シルト	少量の褐色10YR4/6シルトを粒状に含む。	貯蔵穴P
15	にぶ10YR4/3	シルト	少量の炭化物・施土を粒状に含む。	貯蔵穴P
16	褐10YR4/4	シルト	少量の炭化物・施土を粒状に含む。	貯蔵穴P

第11表 52号住居跡土層記表

1. 住居跡
2. 壇穴遺構



第16図 52号住居跡出土遺物

【柱穴】3個のビットが検出された。全て柱穴である。

【カマド】検出されなかった。

【周溝】検出されなかった。

【貯蔵穴状ビット】1個検出さ

れた。長軸1.92m、短軸0.70mの楕円形を呈する。

【出土遺物】床面、貯蔵穴状ビットを中心に、上器の一括資料が出土した(第16図)。

2. 壇穴遺構

壇穴遺構は、③区などから5基検出された。いずれも遺物を伴わないまたは僅かしか出土せず、日常的な居住空間ではなく、何らかの作業空間として捉えられる。

(1) 9号壇穴遺構

【確認面】③区南向き斜面の基本層序IV層から確認された。

【重複・増改築】確認されなかった。

【規模・平面形】北壁の全部と東壁・西壁の一部を検出した。その他の部分については、自然の削平によって失われており、検出されなかった。残存する各壁の幅は、北壁4.67m、東壁2.24m、西壁2.63mである。一辺が4.5m前後の正方形または長方形であると推定される。

【壇穴層位】壇穴層位は3層に細分されるが、いずれも自然堆積層である。

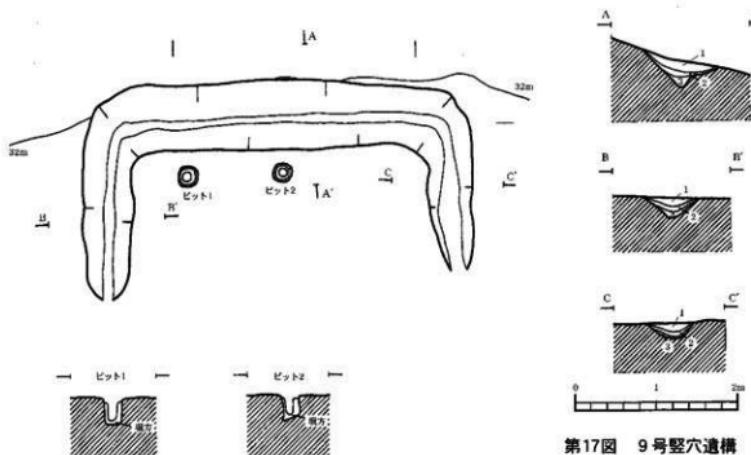
【壁】基本層序IV層からなる。最も保存の良い北壁下では36cmの高さで残存している。

【床面】基本層序IV層を床面とする。凹凸はない。床面レベルは北西隅が最も高く、南東側に向かうにつれて徐々に低くなる。全体的にやや硬い。南側については自然の削平によって失われている。

【柱穴】3個のビットが検出された。全て柱穴である。

No.	種別	部位	外面	内部	上層・底層・高さ(cm)	備考
1	土壌露切	貯P	ミガキ	ミガキ、マツツ	9.6・1.3・6.2	図版4-2-1
2	土壌露切	貯P	ミガキ	ミガキ、ヘラナダ	9.1・2.5・7.9	図版4-2-2
3	土壌露高坪	床面	ハケ目、ミガキ、剥り	ハケ目、ミガキ、剥り	13.8・—・—	図版4-2-3
4	土壌露裏	貯P	ミガキ、ハケ目	ミガキ、ヘラナダ	—・1.3・—	図版4-2-4
5	土壌露裏	貯P	ハケ目(一部マツナダ付属)	ナダ、ヘラナダ、ナダ	10.2・5.4・13.3	図版4-2-5
6	土壌露裏	貯P	ハケ目、ヨコナダ	—、ハケ目、ミガキ、ナダ、ヘラナダ	13.2・—・—	図版4-2-6

第12表 52号住居跡出土遺物観察表



第17図 9号竖穴式墓構

No.	土色	土性	備考	堆積範囲
1	褐色10YR4/4	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	周溝
2	褐色10YR4/6	シルト	多量の褐色10YR4/6シルトを含む。 少量の炭化物を粒状に含む。	*
3	褐色10YR5/6	シルト	少量の褐色10YR4/3シルト。 地山土を粒状に含む。深さ8~20cmを含む。	*

第13表 9号竖穴式墓構土層記録

堆積土	土色	土性	備考
P1	褐色10YR4/4	シルト	少量の炭化物を粒状に含む。
P1' 壁方	褐色10YR4/6	シルト	少量の炭化物を粒状に含む。 地山土を粒状に含む。
P2	褐色10YR4/4	シルト	少量の炭化物を粒状に含む。
P2' 壁方	褐色10YR4/6	シルト	多量の地山土を粒状に含む。少量の炭化物を粒状に含む。

第14表 9号竖穴式墓構ピット土層記録

【周溝】壁と同様に全部は検出されなかったが、壁沿いに一周するものと推定される。幅20~45cm、深さ19~23cmで、断面は「U」形である。底面レベルは北西隅が最も高く、南東側に向かうにつれて徐々に低くなる。

【出土遺物】遺物は、出土しなかった。

3. 黒跡

黒跡は、合計26基検出された。その内訳は、須恵器焼成の黒跡19基、未完成の須恵器焼成用と推測される黒跡1基、木炭黒跡6基である。ここでは須恵器焼成の黒跡(推測分を含む)を取り上げ、『河南町文化財調査報告書』第4集に記されている1~5号黒跡を除く15基の中から2基を紹介する。木炭黒跡については、「8. 木炭黒跡」として別項目で取り上げる。

(1) 10号黒跡

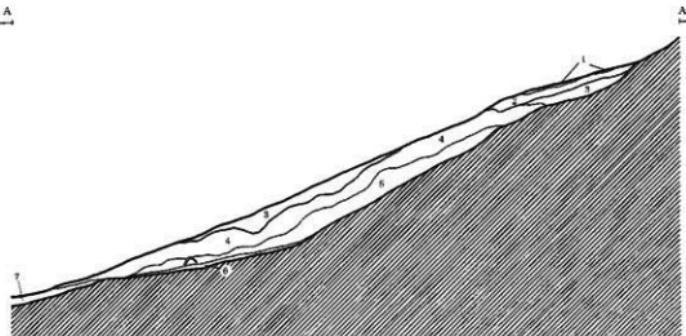
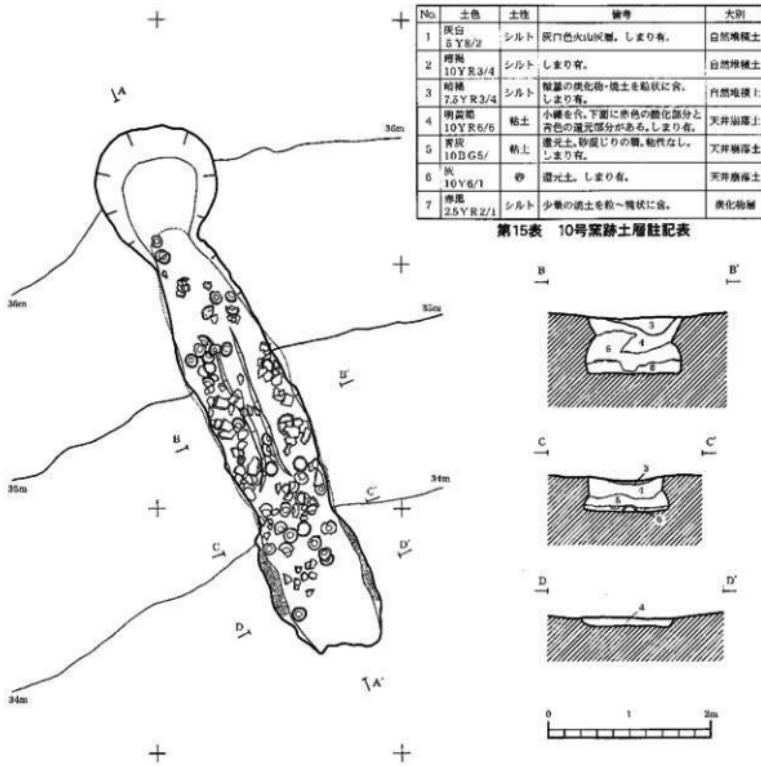
【確認面】A区北東斜面の基本層序IV層から確認された。

【形態】煙道部、焼成部、燃焼部からなる半地下式の窯窓である。

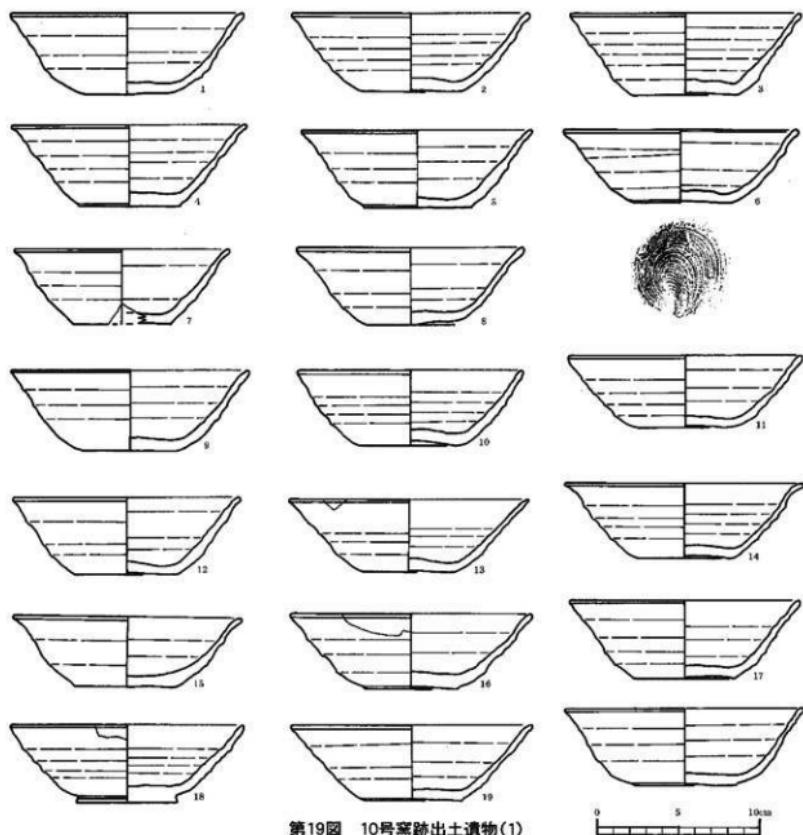
【煙道部】先端に位置し、平面形は歪んだ円形をしている。平坦な底面から急な角度で立ち上がる。

【焼成部】底面の平面形は煙道部に近づくにつれて緩やかな丸みをもって徐々に狭くなり、先端は丸くおさまり煙道部底面となる。底面は概ね平坦であるが、壁沿いの部分は丸みをもっている。側壁は急な角度で立ち上がり、30cmほど立ち上がったところから丸みをもって天井部に向かってせり出すような傾斜にな

3. 窯跡



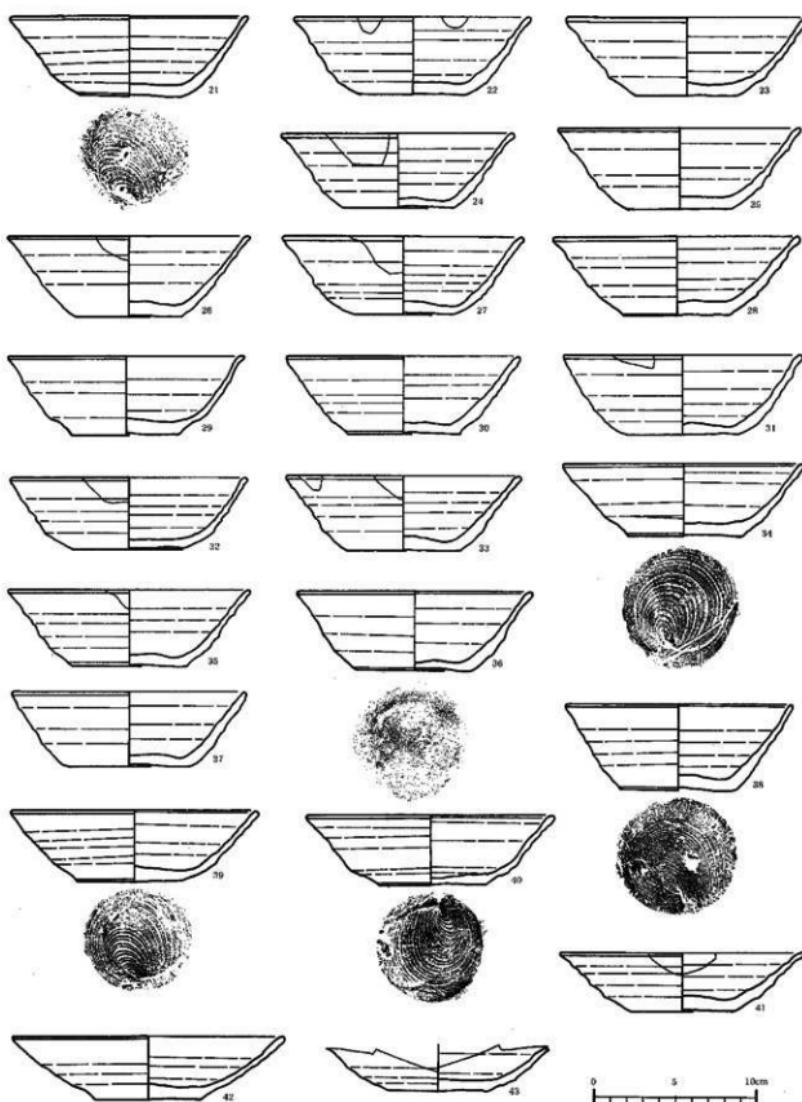
第18図 10号窯跡



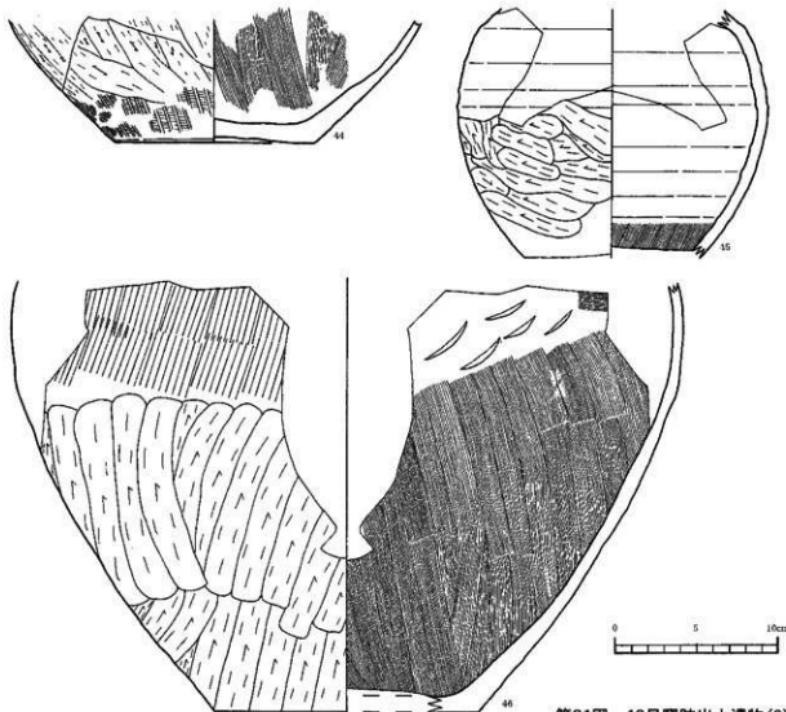
第19図 10号窯跡出土遺物(1)

No.	種別	部位	外面	内部	口径・底径・高さ(cm)	備考
1	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	14.3・6.5・5.0
2	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	14.2・6.2・4.8
3	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	14.0・6.5・5.0
4	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	14.1・6.2・5.0
5	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	14.0・6.6・4.7
6	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	14.4・6.0・4.4
7	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	13.1・6.0・4.0
8	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	13.7・5.5・4.7
9	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	14.4・6.0・4.9
10	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	13.6・6.0・4.6
11	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	14.1・5.7・4.4
12	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	13.7・6.3・4.7
13	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	14.5・5.7・4.4
14	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	14.2・5.8・4.6
15	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	13.7・6.4・4.3
16	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	14.5・5.6・4.6
17	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	14.9・6.1・4.8
18	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	14.0・6.2・4.8
19	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	14.5・6.0・4.6
20	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪糸切り	ロクロナデ	14.5・6.2・4.7

第16表 10号窯跡出土遺物観察表(1)



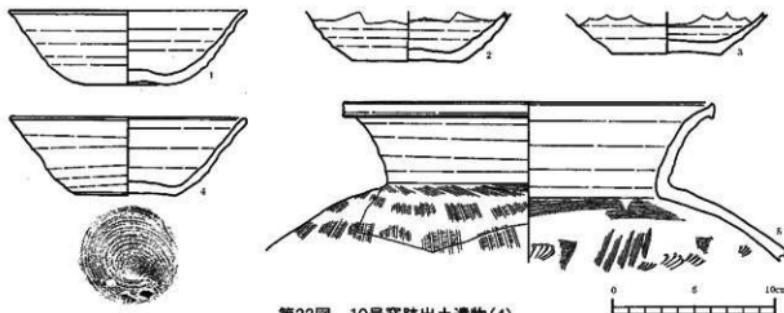
第20図 10号窯跡出土遺物(2)



第21図 10号墓跡出土遺物(3)

No.	種別	断面	外面	立派	内面	口径・直径・器高(cm)	備考
21	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	145・6.2・5.0	
22	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	144・6.2・4.8	
23	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	146・6.2・4.9	
24	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	40・6.8・4.6	
25	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	145・6.4・5.0	
26	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	149・6.5・5.0	
27	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	145・6.0・4.8	
28	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	143・6.5・4.8	
29	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	144・6.6・4.9	
30	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	142・6.8・4.8	
31	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	143・6.8・4.9	
32	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	143・7.0・4.4	
33	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	141・7.0・4.6	
34	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	148・7.0・4.5	
35	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	146・7.0・4.7	
36	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	144・7.1・4.9	
37	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	141・7.3・4.6	
38	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	149・7.2・3.2	
39	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	152・6.6・4.4	
40	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	153・6.6・4.4	
41	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	148・6.2・3.6	
42	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	165・6.5・3.9	
43	須恵器片	Y-1	ロクロナデ	回転角切り	ロクロナデ	—・6.0・—	
44	須恵器片	Y-1	—	削りタクタク無調整	ナデ	—・12.2・—	
45	須恵器蓋	Y-1	ロクロナデヘラ削り	—	ロクロナデ・ナデ	—・—・—	
46	須恵器蓋	Y-1	タクタク削り	ナデ	ロクロナデ	—・16.1・—	

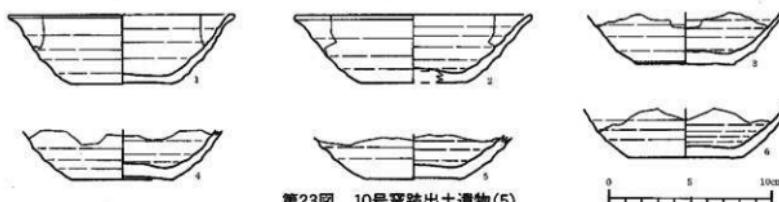
第17表 10号墓跡出土遺物観察表(2)



第22図 10号窯跡出土遺物(4)

No.	種別	層位	外面	底形	内面	口径・底径・高さ(cm)	備考
1	須恵器杯	Y-2	ロクロナデ	四軸角切り	ロクロナデ	14.2・5.4・4.6	
2	須恵器杯	Y-2	ロクロナデ	四軸角切り	ロクロナデ	14.5・6.1・4.8	
3	須恵器杯	Y-2	ロクロナデ	四軸角切り	ロクロナデ	—・6.2・—	
4	須恵器杯	Y-2	ロクロナデ	四軸角切り	ロクロナデ	—・6.8・—	
5	須恵器盤	Y-2	ロクロナデ,タタキ	—	ロクロナデ,ナデ,アテ模,ヘラナデ	22.0・—・—	

第18表 10号窯跡出土遺物観察表(3)



第23図 10号窯跡出土遺物(5)

No.	種別	層位	外面	底形	内面	口径・底径・高さ(cm)	備考
1	須恵器盤	Y-3	ロクロナデ	四軸角切り	ロクロナデ	13.9・6.0・4.2	
2	須恵器盤	Y-3	ロクロナデ	四軸角切り	ロクロナデ	14.6・6.4・4.2	
3	須恵器盤	Y-3	ロクロナデ	四軸角切り	ロクロナデ	—・5.8・—	
4	須恵器盤	Y-3	ロクロナデ	四軸角切り	ロクロナデ	—・6.0・—	
5	須恵器盤	Y-3	ロクロナデ	四軸角切り	ロクロナデ	—・6.2・—	
6	須恵器盤	Y-3	ロクロナデ	四軸角切り	ロクロナデ	—・7.0・—	

第19表 10号窯跡出土遺物観察表(3)

る。

【燃焼部】 烧成部から緩くくびれてわずかに狭くなるところから下方が燃焼部である。底面は概ね平坦で、側壁は急な角度で立ち上がり、緩やかな丸みをもって天井部に向かってせり出すような傾斜になる。4枚の底面が確認された。側壁・底面とも強い火熱を受けている。

【前庭部】 検出されなかった。

【その他の施設】 烧成部中央から斜面下方にのびる溝が検出された。長さ2.14m、幅22~35cmである。底面レベルは斜面下方に向かうにつれて徐々に低くなる。

【堆積土】 堆積土は3層に大別される。1層は自然堆積層(層No.1~3)、2層は天井及び側壁崩落土(層No.4~6)、3層は炭化物層(灰層・床面:層No.7)である。この中で、層No.1は上和田a火山灰と推測される灰白色火山灰層である。

【中軸線の方向】 S-63°-W

[残存規模] 全 体	長さ：6.7m 底面幅：1.25m 最大深：0.66m
煙道部	長さ：0.9m 底面幅：0.8～0.9m 残存高：0.27m
焼成部	長さ：4.1m 底面幅：0.7～1.25m 残存高：0.66m
燃焼部	長さ：1.7m 底面幅：1.01m 残存高：0.48m

[灰原] 窯跡の斜面下方に、黒褐色土の小塊が斑状に確認された。立木伐採に伴う搬出用通路として使用されていた部分であり、調査以前に削平を受けていた。わずかであるが、遺物が出土した。小規模な灰原の痕跡である可能性が考えられる。

[出土遺物] 3枚の底面と堆積土から土器の一括資料が出土した。

(2) 11号窯跡

[確認面] A区北西斜面の基本層序IV層から確認された。

[形態] 焼成部、燃焼部、前庭部が残存するからなる半地下式の窯跡である。

[焼成部] 底面の平面形は煙道部に近づくにつれて緩やかな丸みをもって徐々に狭くなり、先端は丸くおさまり煙道部底面となる。底面は概ね平坦であるが、壁沿いの部分は丸みをもっている。側壁は急な角度で立ち上がり、丸みをもって天井部に向かってせり出すような傾斜になる。

[燃焼部] 焼成部からくびれて狭くなるところから下方が燃焼部である。底面は概ね平坦で、側壁は急な角度で立ち上がる。側壁・底面とも強い火熱を受けている。北側の側壁及び底面の一部が攢乱により削平されていた。また、立木伐採に伴う搬出用通路として使用されていた部分であり、側壁の一部が調査以前に削平を受けていた。このため、側壁の残存状態は良くない。

[前庭部] 燃焼部の下方に位置する。これも立木伐採に伴う搬出用通路として使用されていた部分であり、調査以前に一部削平を受けていた。

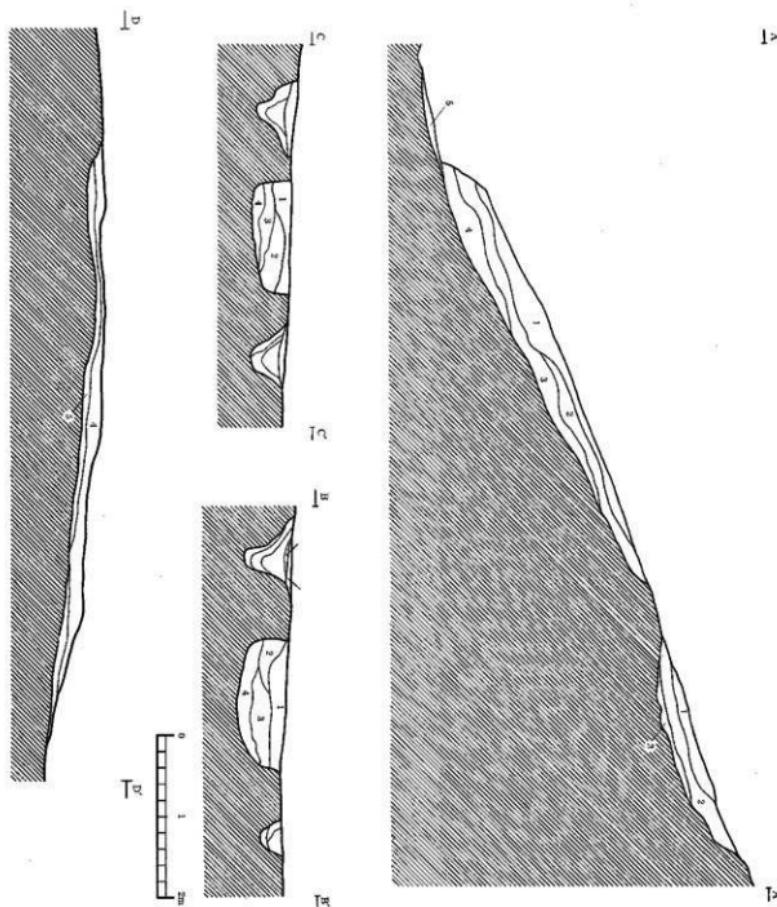
[堆積土] 堆積土は3層に大別される。1層は自然堆積土(層No.1)、2層は天井及び側壁崩落土(層No.2～5)、3層は灰層(床面：層No.6)である。

[中軸線の方向] S-54°-E

[残存規模] 全 体	長さ：6.6m 最大幅：1.6m 最大深：0.61m
焼成部	長さ：5.3m 底面幅：1.1～1.6m 残存高：0.61m
燃焼部	長さ：1.3m 底面幅：0.9m 残存高：0.57m

[灰原] 窯跡の斜面下方から検出された。堆積範囲は3号窯跡(約200m)に次ぐ広さで、約80m²である。4層に大別される。4層とも多量の遺物を包含していた。また、これも立木伐採に伴う搬出用通路として使用されていた部分であり、調査以前に一部削平を受けていた。

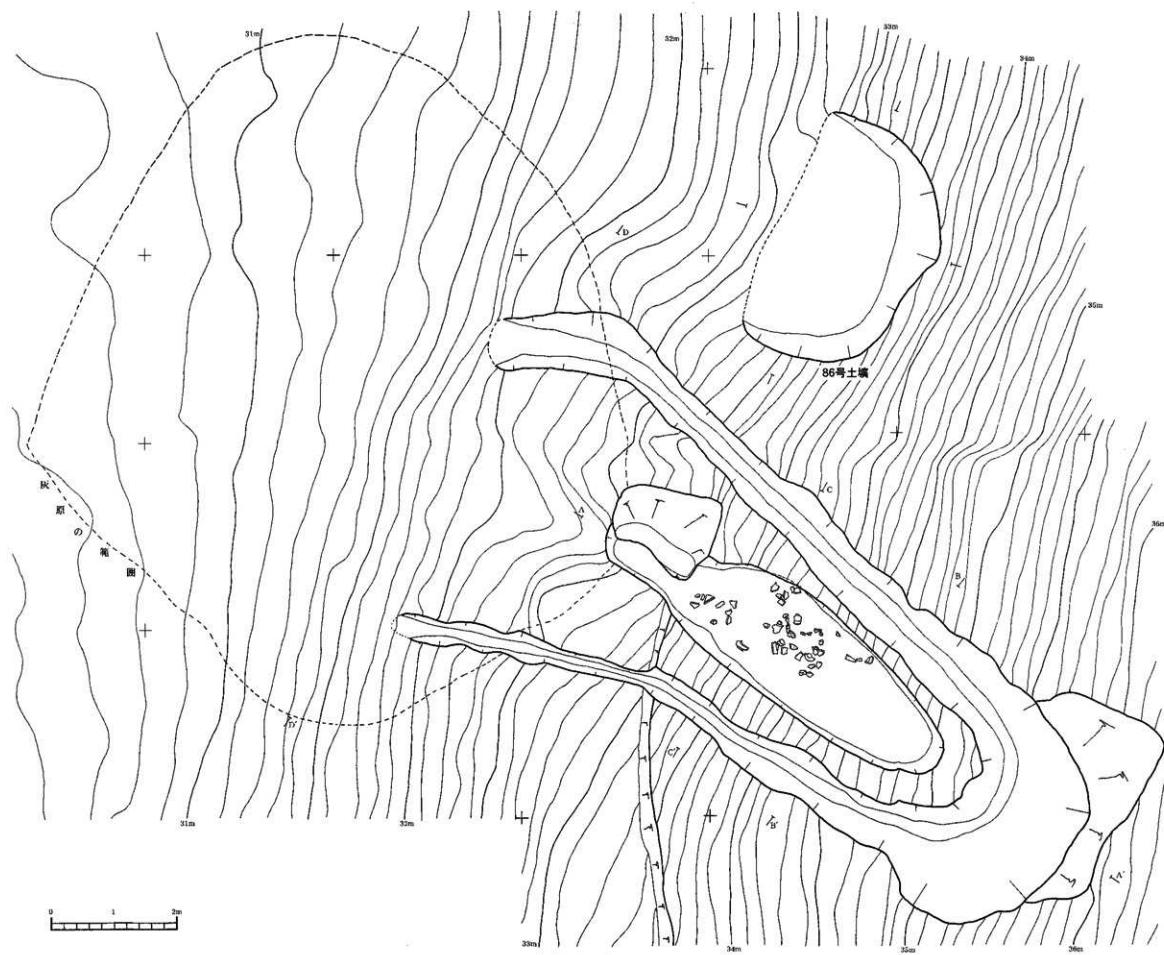
[周囲の状況] 11号窯跡を「匁」字状に取り囲むようにして、外周溝が確認された。幅0.22～1.94m、深さ10～60cmで、断面は「匁」形である。11号窯跡への雨水浸入を防ぐためのものと考えられる。立木伐採に伴う搬出用通路として使用されていた部分であり、燃焼部・前庭部と並行する箇所が調査以前に一部削平を受けていた。また、11号窯跡に隣接して86号土壙が検出された。この土壙から出土した遺物は、11号窯跡に後続する時期のものであるため、直接11号窯跡の操業とは関係ないものと思われる。



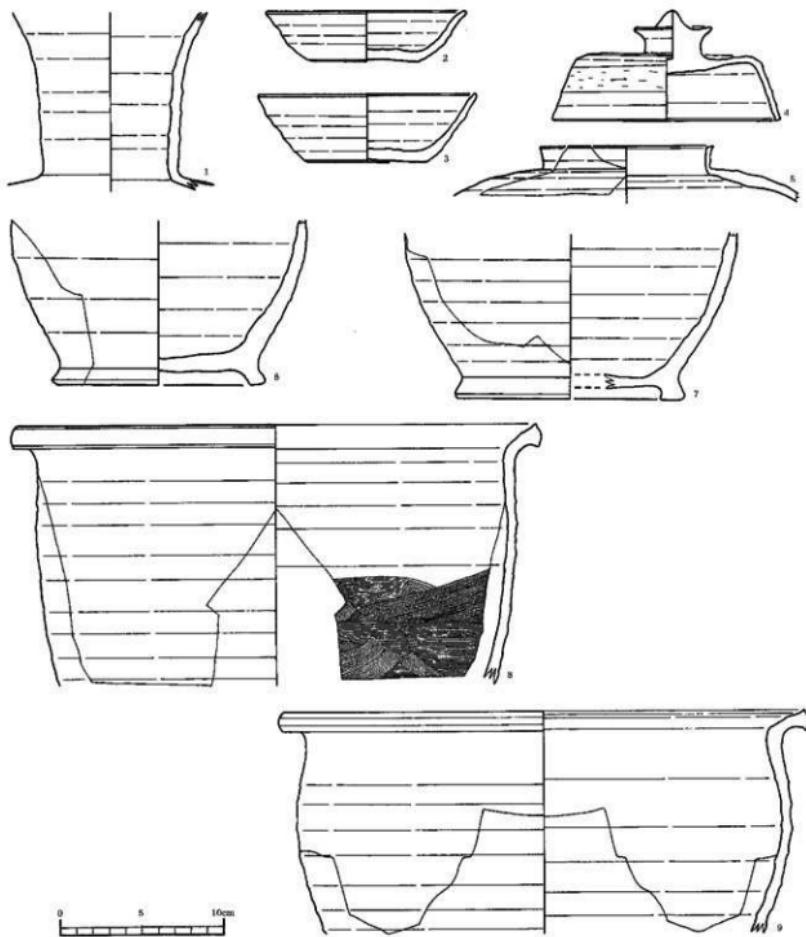
第24図 11号窓跡(1)

No.	土色	土性	参考	大別
1	にぶい赤褐色YR4/4	シルト	少量の施肥を離かい施状に含む。	自然堆積土
2	褐7.5YR6/6	粘土	三部に分かれる。上部：褐7.5YR6/6粘土。下部：呑赤褐色2.5YR5/8粘土。最下部：暗オリーブ灰2.5GY4/1粘土(還元土)。	天井崩落土
3	明赤褐色2.5YR5/8	粘土	漂泥土を離かい塊状に含む。	天井崩落土
4	褐7.5YR6/6	粘土	二部に分かれる。上部：褐7.5YR6/6粘土。下部：呑赤褐色2.5YR5/8粘土。	天井崩落土
5	暗オリーブ灰2.5GY4/1	粘土	還元土。	天井崩落土
6	暗赤褐色2.5YR3/1	シルト		炭質

第20表 11号窓跡土層記表



第25図 11号窓跡(2)

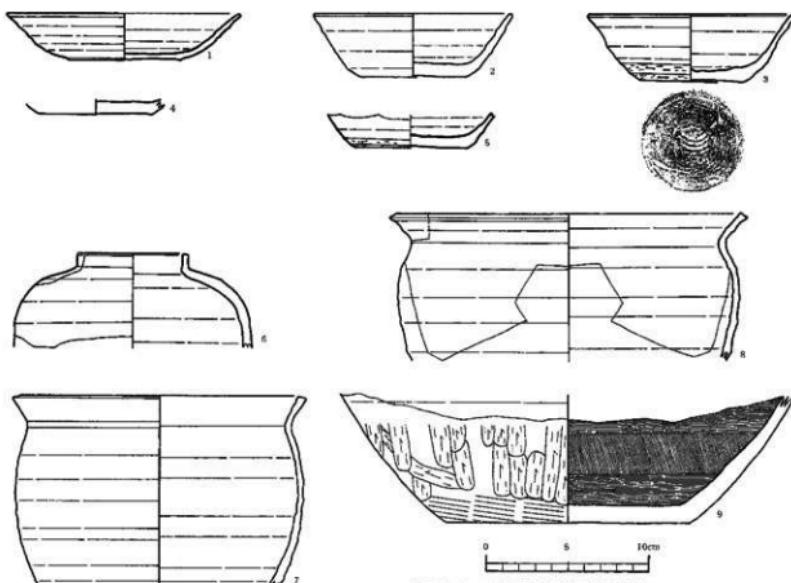


第26図 11号窯跡出土遺物

No.	種別	部位	外形	底形	内面	口径・底径・高さ(cm)	備考
1	須恵器食器	埴輪下	ロクロナデ	—	ロクロナデ	—・—・—	
2	須恵器	Y-1	リクレナデ	四輪系切り	ロクロナデ	12.4・6.6・3.1	
3	須恵器	Y-1	ロクロナデ	四輪系切り	ロクロナデ	13.4・7.4・4.2	
4	須恵器	Y-1	ロクロナデ・削り	—	ロクロナデ	14.0・(天)10.2・6.8	図版5-2-1
5	須恵器	Y-1	ロクロナデ	—	ロクロナデ	10.6・—・—	
6	須恵器	Y-1	ロクロナデ	五輪削り	ロクロナデ	—・12.3・—	
7	須恵器	Y-1	ロクロナデ	五輪削り	ロクロナデ	—・13.8・—	
8	須恵器	Y-1	ロクロナデ	—	ロクロナデ・ナデ	31.9・—・—	

第21表 11号窯跡出土遺物観察表

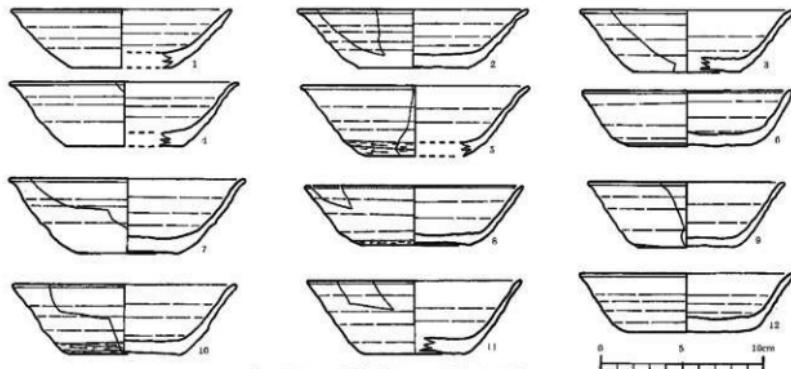
3. 窯跡



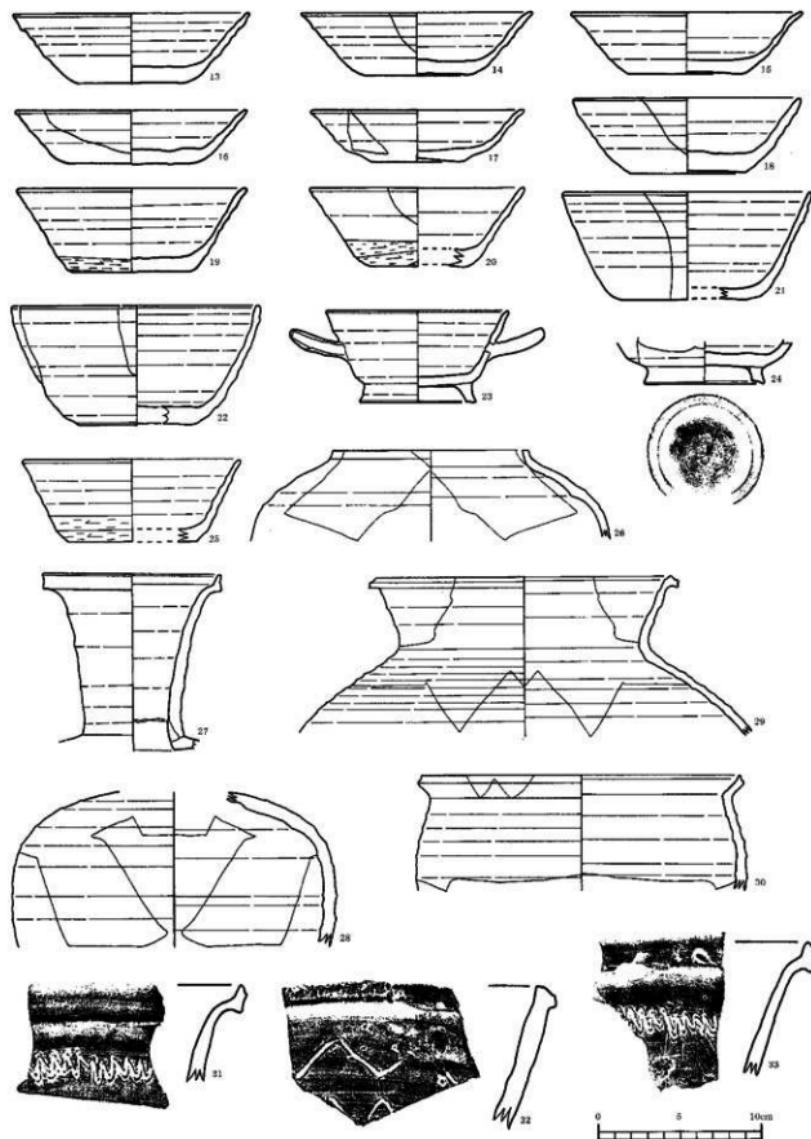
第27図 11号窯跡灰原表採遺物

No.	種別	層位	外形	底部	内面	口径・底径・高さ(cm)	備考
1	深窓船形	表土	□クロナデ	圓盤片切り	コクロナデ	14.1・6.8・2.9	
2	深窓鉢形	表土	□クロナデ	圓盤片切り	コクロナデ	12.0・6.4・3.9	
3	深窓鉢形	表技	□クロナデ	四輪ヘラ削り	コクロナデ	12.6・6.2・4.2	
4	深窓器	表土	□クロナデ	四輪ヘラ削り	コクナデ	—・6.8・—	
5	深窓船形?	表技	□クロナデ	四輪等切り	コクロナデ	—・6.9・—	
6	深窓器形	表土	□クロナデ	—	コクロナデ	6.8・—・—	
7	深窓器形	表土	□クロナデ	—	コクロナデ	17.0・—・—	
8	深窓器形	表技	□クロナデ	—	コクロナデ	21.1・—・—	
9	深窓器形	表土	□クロナデ・叩き・へら削り	ナデ	錐大口・ナデ	28.1・149・7.9	

第22表 11号窯跡灰原表採遺物観察表

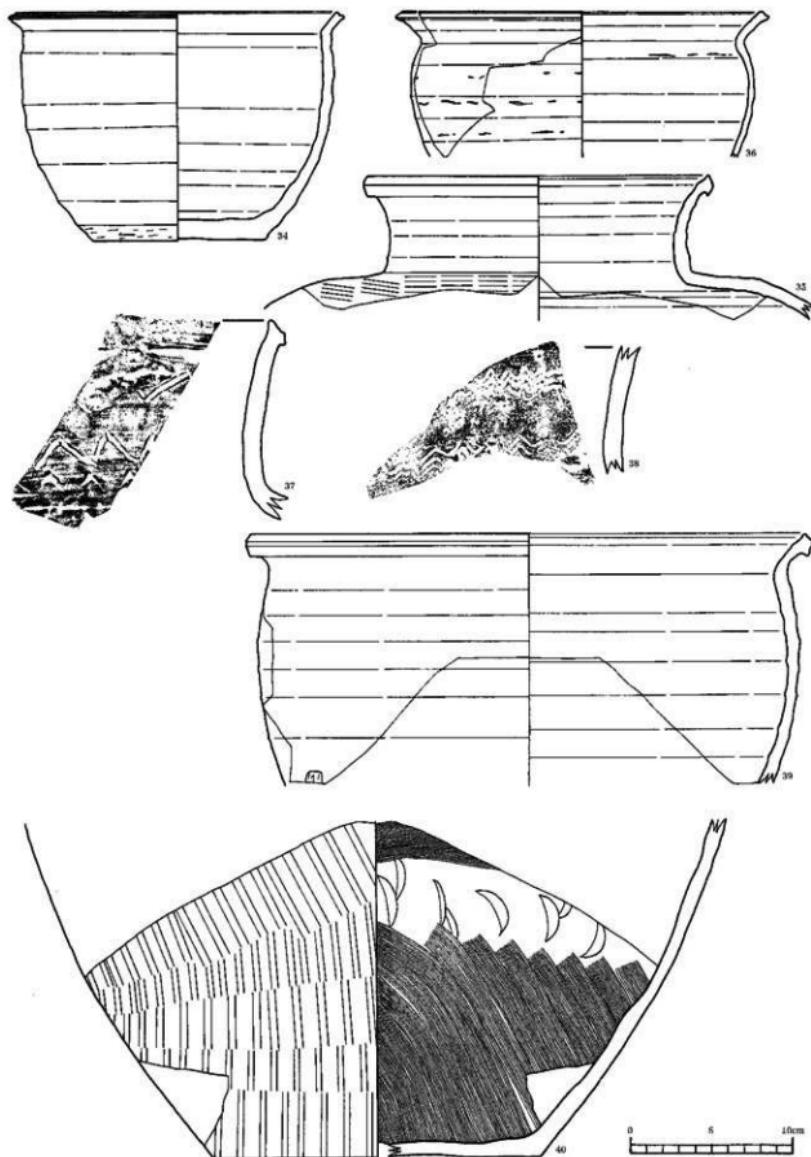


第28図 11号窯跡灰原1層出土遺物(1)

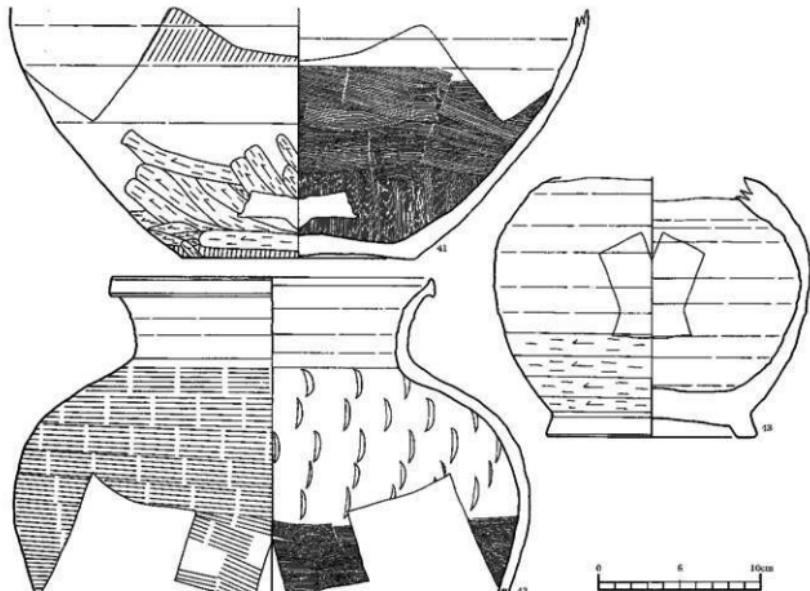


第29図 11号窯跡灰原1層出土遺物(2)

3. 窯跡



第30図 11号窯跡灰原 1層出土遺物(3)



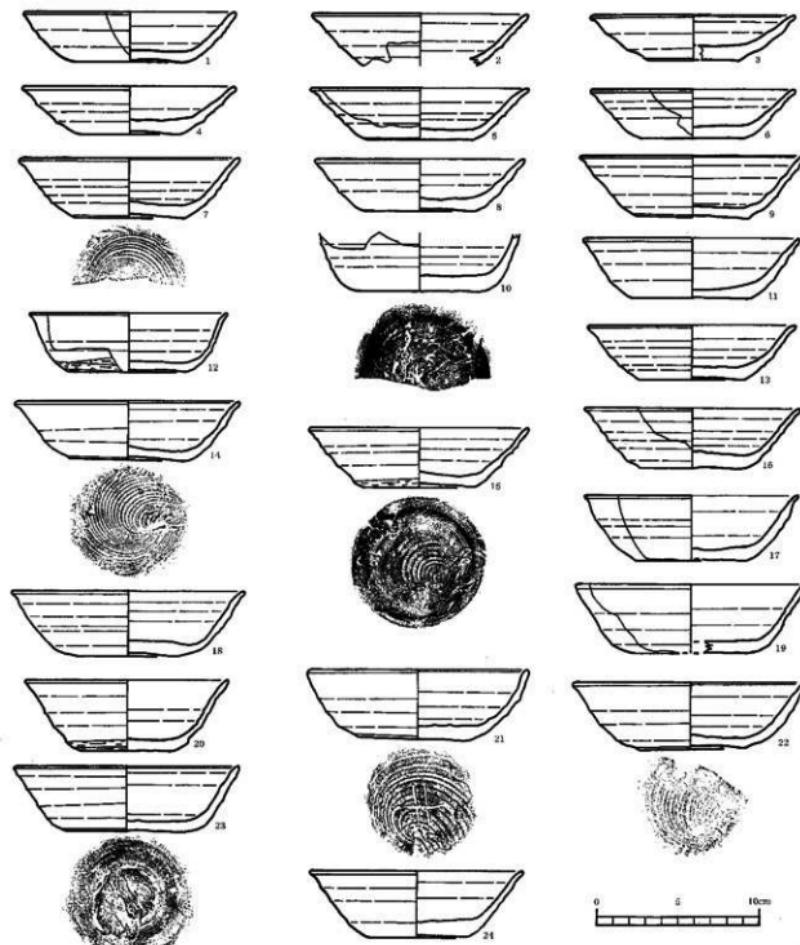
第31図 11号窯跡灰原1層出土遺物(4)

No.	種別	層位	外観	底部	内面	口径・底径・高さ(cm)	備考
1	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	回転条切り	ロクロナデ	13.2・6.2・3.6	
2	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	回転条切り	ロクロナデ	13.7・6.3・3.6	
3	漆器器形	灰原1層	リクロナデ	回転条切り	ロクロナデ	12.7・6.6・3.8	
4	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	回転条切り	ロクロナデ	13.7・7.1・3.9	
5	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	13.6・5.8・4.3	
6	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	12.8・7.5・3.4	
7	漆器器形	灰原1層	リクロナデ	回転条切り	ロクロナデ	14.1・6.2・4.1	
8	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	回転条切り	ロクロナデ	13.4・6.7・3.6	
9	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ・四輪削り	回転削り	ロクロナデ	14.7・5.8・4.0	
10	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ・回転削り	回転条切り・回転ヘラ削り	ロクロナデ	13.4・7.0・4.3	
11	漆器器形	灰原1層	リクロナデ	回転条切り	ロクロナデ	12.8・6.2・4.5	
12	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	回転ヘラ切り	リクロナデ	12.7・7.5・3.5	
13	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	回転条切り	ロクロナデ	14.1・6.6・4.3	
14	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	回転条切り	ロクロナデ	13.8・6.8・3.8	
15	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	回転条切り	リクロナデ	13.8・7.1・3.8	
16	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	13.8・8.0・3.3	
17	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	回転条切り	ロクロナデ	12.6・4.6・3.2	
18	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	回転条切り	ロクロナデ	13.2・7.0・4.6	
19	漆器器形	灰原1層	リクロナデ・削り	回転削り	リクロナデ	13.6・7.1・5.2	
20	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ・削り	回転ヘラ削り	ロクロナデ	12.8・6.0・4.8	
21	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	15.0・7.3・6.6	
22	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	回転ヘラ切り	ロクロナデ	15.4・7.0・7.3	
23	漆器器皿耳环	灰原1層	ロクロナデ・削り	回転条切り・ロクロナデ	ロクロナデ	11.2・7.3・5.7	耳部: ケズリ
24	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	回転削り	ロクロナデ	—・7.3・—	
25	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	回転ヘラ削り	ロクロナデ	13.2・7.8・5.1	
26	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	—	ロクロナデ	12.0・—・—	
27	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	—	ロクロナデ	11.0・—・—	
28	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	—	ロクロナデ	—・—・—	
29	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ	—	ロクロナデ	18.0・—・—	
30	漆器器形	灰原1層	リクロナデ・縦縫状痕	—	ロクロナデ	19.5・—・—	
31	漆器器形	灰原1層	ロクロナデ・縦縫状痕	—	ロクロナデ	—・—・—	
32	漆器器形	灰原1層	コクロナデ・深幅状痕	—	ロクロナデ	—・—・—	

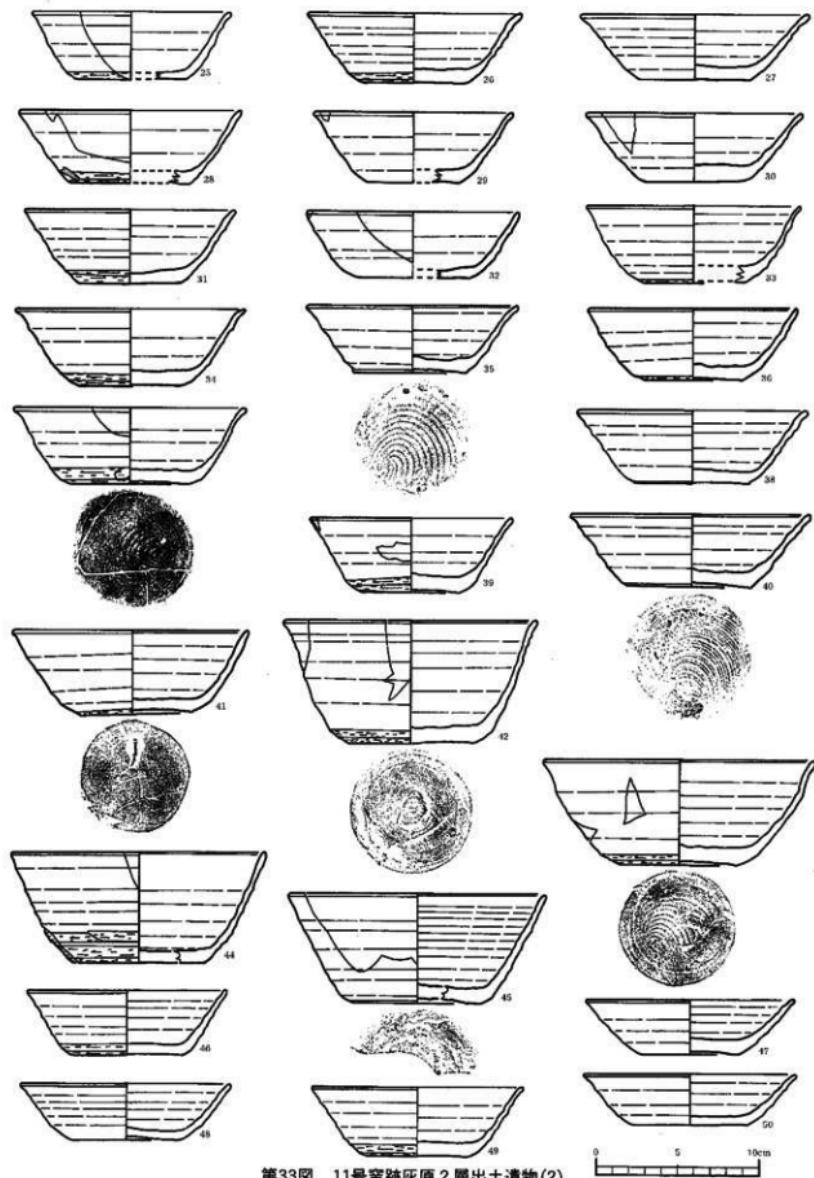
第23表 11号窯跡灰原1層出土遺物観察表(1)

No.	種別	層位	外観	内部	口径・底径・高さ(cm)	備考
33	漆器容器	灰原 1 層	ロクロナダ・彫部沈底	—	—	—
34	漆器容器	灰原 1 層	ロクロナダ・口縁部浅縞・四軸附	削り	ロクロナダ 20.6・10.2・14.2	—
35	漆器容器	灰原 1 層	ロクロナダ・タタキ	—	削え口・ロクロナダ 20.9	—
36	漆器容器	灰原 1 層	ロクロナダ	—	ロクロナダ 22.1	—
37	漆器容器	灰原 1 層	ロクロナダ・彫部沈底	—	ロクロナダ —	—
38	漆器容器	灰原 1 層	ナダ・彫部沈底	—	ナダ —	—
39	漆器容器	灰原 1 層	ロクロナダ・削り	—	ロクロナダ 33.8	—
40	漆器容器	灰原 1 層	タタキ	ナダ	ナダ 19.9	—
41	漆器容器	灰原 1 層	ロクロナダ・タタキ・へら削り	削り	ロクロナダ・鈎丸足・ナダ —	14.3
42	漆器容器	灰原 1 层	ロクロナダ・タタキ	—	ロクロナダ・削え口 19.5	—
43	漆器容器	灰原 1 層	ロクロナダ・凹輪へら削り	凹輪削り	ロクロナダ —	12.4

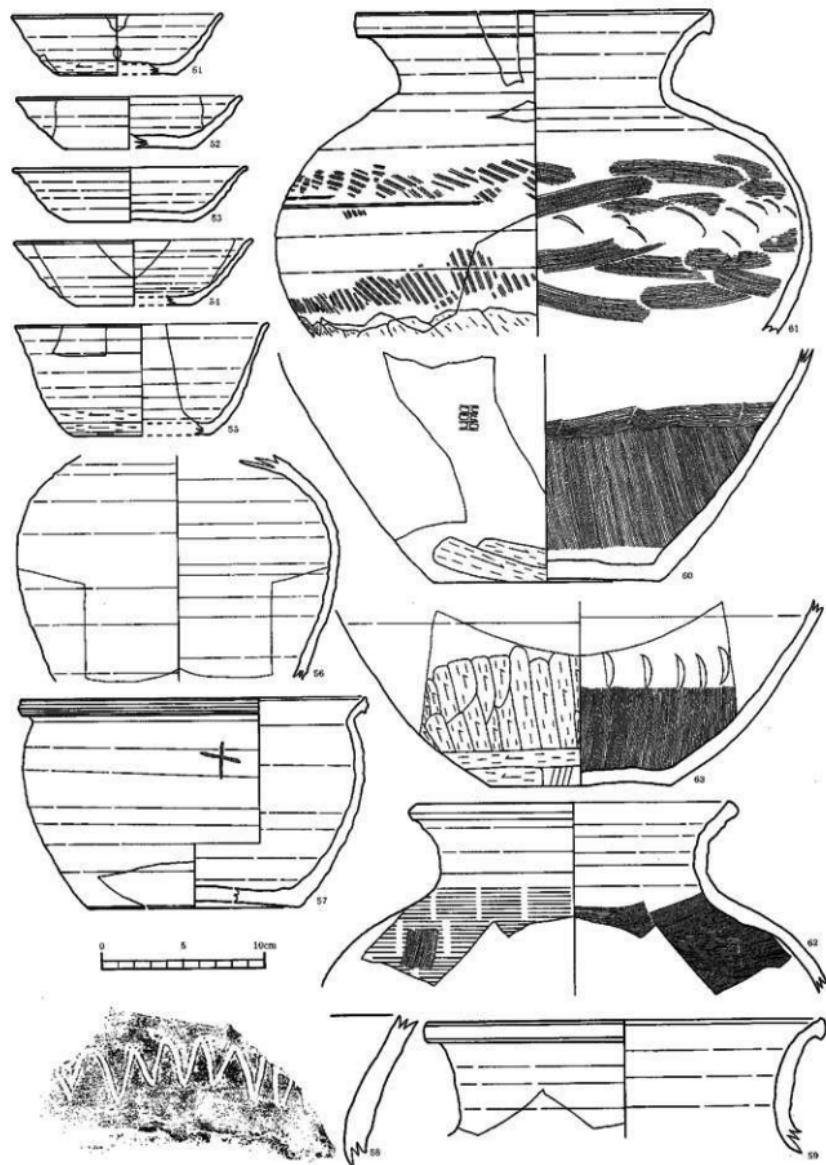
第24表 11号窯跡灰原 1層出土遺物観察表(2)



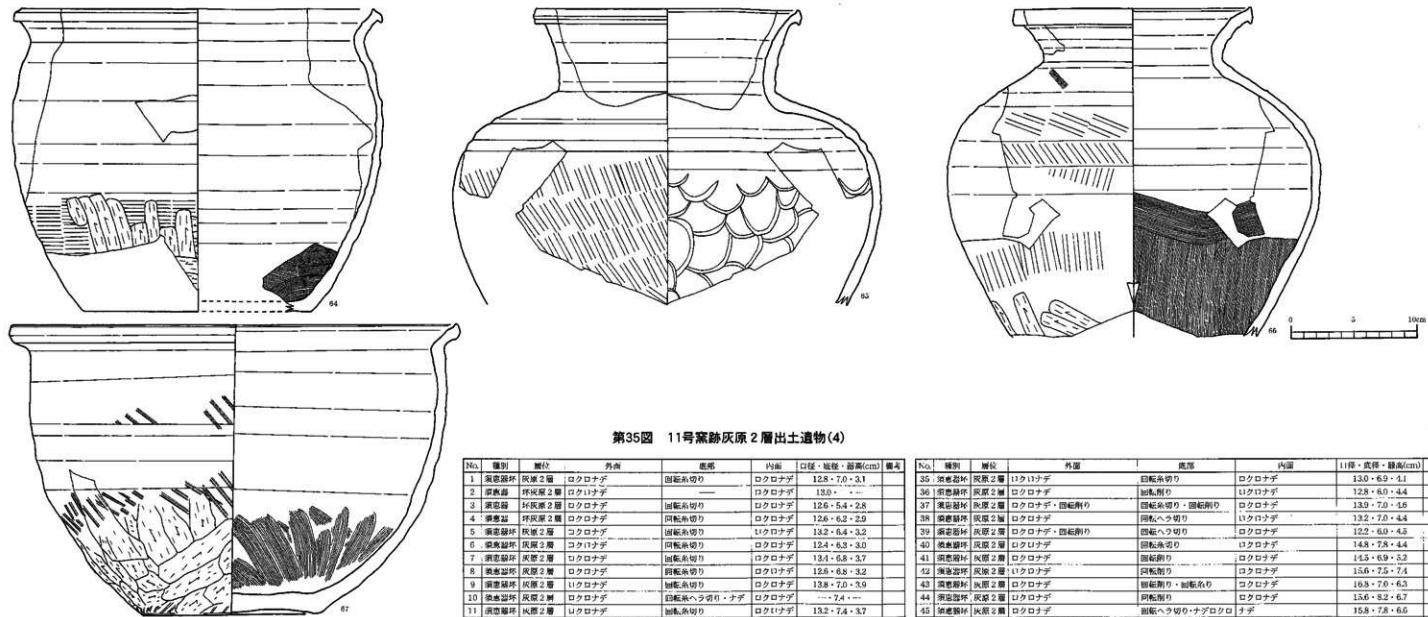
第32図 11号窯跡灰原 2層出土遺物(1)



第33図 11号窯跡灰原 2層出土遺物(2)



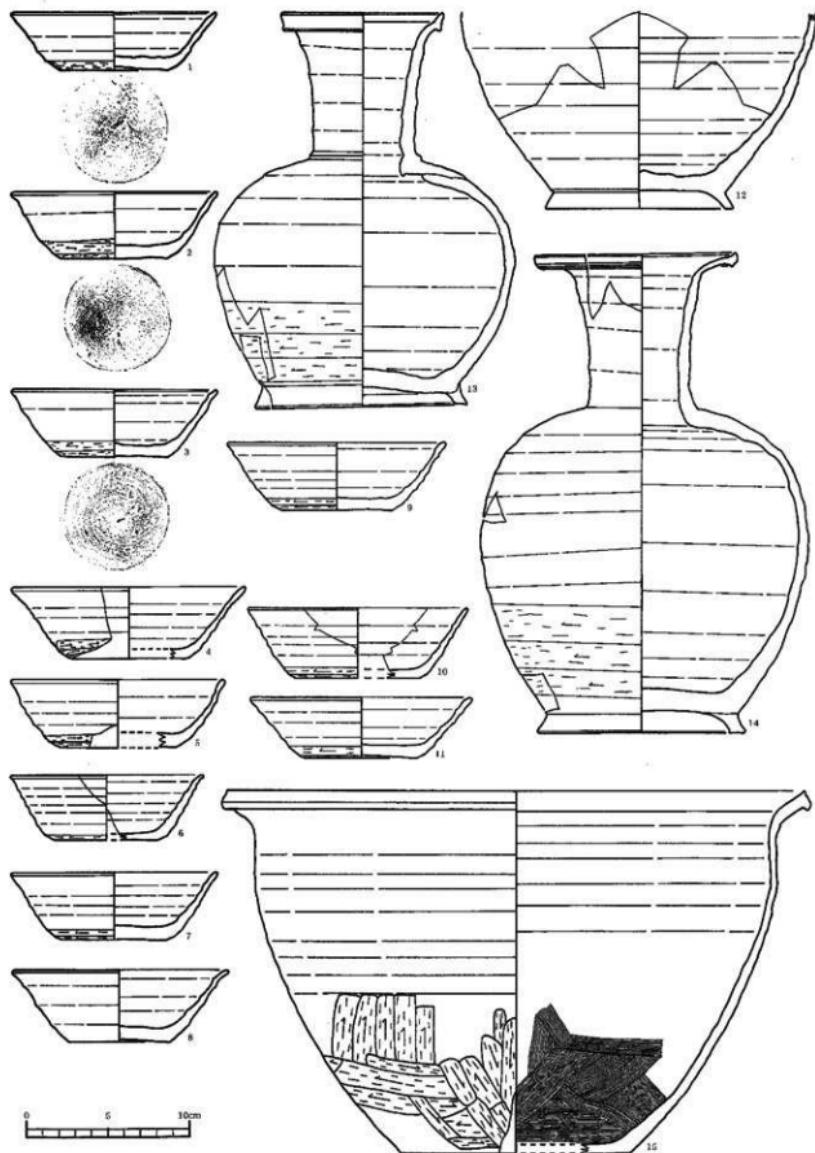
第34図 11号窯跡灰原2層出土遺物(3)



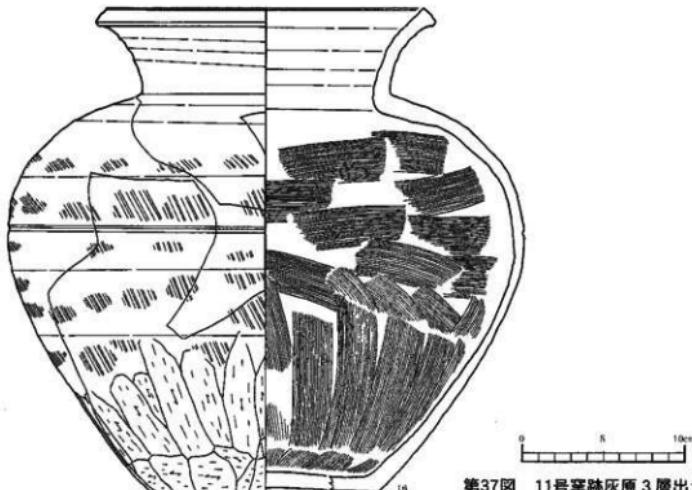
第35図 11号窯跡灰原2層出土遺物(4)

No.	種別	部位	外観	断面	内面	寸法・底径・高さ(cm)	備考
1	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	12.8・7.0・3.1	
2	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	—	四輪削り	ロクロナデ	13.0・8.0・4.4
3	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	12.6・5.3・2.8	
4	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	12.6・6.2・2.9	
5	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	12.2・6.4・3.2	
6	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	12.4・6.5・3.0	
7	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	13.1・6.8・3.7	
8	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	12.9・6.3・3.2	
9	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	13.8・7.0・3.9	
10	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	—	
11	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	13.2・7.4・3.7	
12	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	12.7・7.3・3.7	
13	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	12.5・6.3・3.5	
14	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	13.8・7.0・3.6	
15	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちりへく削り	ロクロナデ	13.2・6.8・3.7	
16	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちりへく削り	ロクロナデ	13.0・6.4・3.7	
17	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	12.8・6.4・4.0	
18	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	14.0・6.2・4.5	
19	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	14.0・7.2・4.2	
20	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちりへく削り	ロクロナデ	12.3・5.6・4.3	
21	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちりへく削り	ロクロナデ	13.7・7.2・4.3	
22	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	14.4・6.6・4.1	
23	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	13.8・7.8・4.0	
24	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	12.8・6.2・4.1	
25	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちりへく削り	ロクロナデ	12.1・6.7・4.1	
26	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちりへく削り	ロクロナデ	12.8・6.1・4.2	
27	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	13.7・6.3・4.9	
28	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちりへく削り	ロクロナデ	12.1・5.6・4.4	
29	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちりへく削り	ロクロナデ	12.1・5.6・4.3	
30	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちりへく削り	ロクロナデ	12.6・5.9・4.2	
31	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちりへく削り	ロクロナデ	12.6・6.2・4.5	
32	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちりへく削り	ロクロナデ	12.8・6.5・4.0	
33	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちりへく削り	ロクロナデ	13.0・6.1・4.6	
34	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちりへく削り	ロクロナデ	13.9・6.5・4.7	
35	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちりへく削り	ロクロナデ	—	
36	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪削り	ロクロナデ	—	
37	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり・四輪削り	ロクロナデ	13.0・7.0・4.6	
38	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	13.2・7.0・4.4	
39	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	12.2・6.0・4.5	
40	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	14.8・7.8・4.4	
41	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	14.5・6.9・5.2	
42	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪削り	ロクロナデ	15.6・7.5・7.4	
43	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	16.5・7.0・6.3	
44	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	15.6・8.2・6.7	
45	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	15.8・8.0・6.0	
46	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり・四輪へく削り	ロクロナデ	12.8・6.8・4.9	
47	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	15.7・6.8・3.3	
48	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	12.8・6.5・3.4	
49	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり・四輪へく削り	ロクロナデ	15.9・6.0・4.2	
50	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	12.9・7.1・3.1	
51	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり・四輪へく削り	ロクロナデ	12.9・7.2・3.7	
52	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	13.7・7.8・3.3	
53	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	14.2・7.7・3.3	
54	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	14.3・6.5・4.0	
55	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	15.5・8.2・8.9	
56	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	—	
57	陶器破片	灰原2層	ロクロナデ	四輪ぬちり	ロクロナデ	21.4・12.9・13.0	
58	陶器破片	灰原2層	ナグ	ナグ	ナグ	—	
59	陶器破片	灰原2層	ナグ	ナグ	ナグ	—	
60	陶器破片	灰原2層	タクナ・ナグ	ナグ	ロクロナデ	21.0・—・—	
61	陶器破片	灰原2層	タクナ・ロクロナデ	ナグ	ロクロナデ	—	
62	陶器破片	灰原2層	タクナ・ロクロナデ	ナグ	ロクロナデ	21.6・—・—	
63	陶器破片	灰原2層	タクナ・ロクロナデ	ナグ	ロクロナデ	15.1・—・—	
64	陶器破片	灰原2層	タクナ・ロクロナデ	ナグ	ロクロナデ	—	
65	陶器破片	灰原2層	タクナ・ロクロナデ	ナグ	ロクロナデ	—	
66	陶器破片	灰原2層	タクナ・ロクロナデ	ナグ	ロクロナデ	27.5・17.9・34.0	
67	陶器破片	灰原2層	タクナ・ロクロナデ	ナグ	ロクロナデ	20.8・—・—	
68	陶器破片	灰原2層	タクナ・ロクロナデ	ナグ	ロクロナデ	18.9・—・—	
69	陶器破片	灰原2層	タクナ・ロクロナデ	ナグ	ロクロナデ	26.2・13.8・23.1	図版5-2-2

第25図 11号窯跡(灰原2層)出土遺物



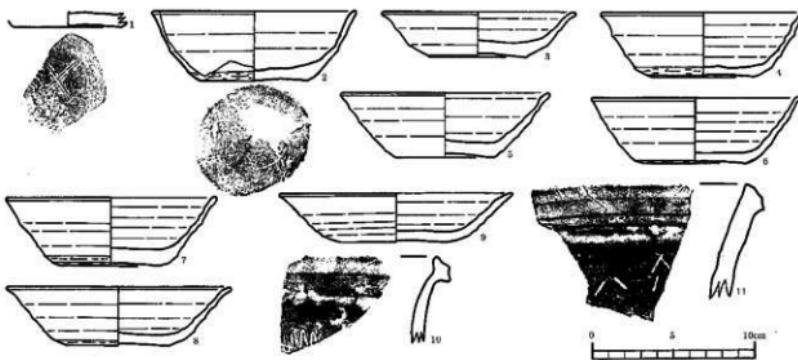
第36図 11号墓跡灰原3層出土遺物(1)



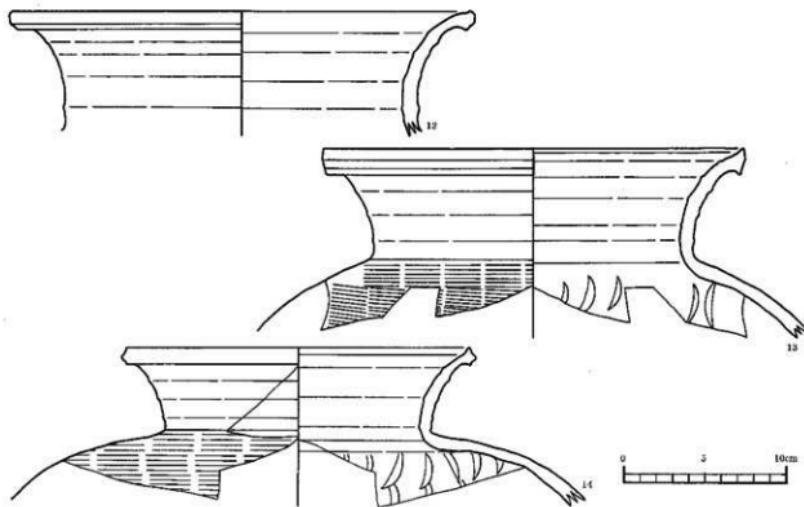
第37図 11号窯跡灰原3層出土遺物(2)

No.	種別	層位	外面	内部	内面	口径・底径・高さ(cm)	備考
1	窯底盤	灰原3層	ロクロナガ・回転削り	回転削り	コクロナガ	12.5・6.5・3.6	
2	窯底盤	灰原3層	ロクロナガ	回転へラ削り	コクロナガ	12.5・6.5・4.1	
3	窯底盤	灰原3層	ロクロナガ	西転削り	コクロナガ	12.5・6.0・4.2	
4	窯底盤	灰原3層	ロクロナガ・回転へラ削り	回転へラ切り	ロクロナガ	14.1・6.9・4.4	
5	窯底盤	灰原3層	ロクロナガ・回転削り	回転へラ削り	ロクロナガ	12.3・7.0・4.2	
6	窯底盤	灰原3層	ロクロナガ・回転削り	回転へラ削り	ロクロナガ	11.7・6.1・4.0	
7	窯底盤	灰原3層	ロクロナガ・回転へラ削り	回転へラ削り	ロクロナガ	12.7・6.4・4.1	
8	窯底盤	灰原3層	ロクロナガ	回転へラ削り	ロクロナガ	13.0・6.2・4.3	
9	窯底盤	灰原3層	ロクロナガ・回転へラ削り	回転へラ削り	ロクロナガ	13.2・6.5・4.2	
10	窯底盤	灰原3層	ロクロナガ・回転へラ削り	回転へラ削り	ロクロナガ	13.3・7.7・4.3	
11	窯底盤	灰原3層	ロクロナガ・回転へラ削り	回転へラ削り	ロクロナガ	13.3・6.8・3.8	
12	窯底盤合付品	灰原3層	ロクロナガ	ナガ	ロクロナガ	—・11.4・—	
13	窯底盤合付品	灰原3層	ロクロナガ・回転削り	回転削り	ロクロナガ	8.8・12.9・14.3	底部に凸脊あり・回転5-2-2
14	窯側壁瓦須皿	灰原3層	ロクロナガ・削り	—	ロクロナガ	12.3・12.9・29.4	回転5-2-3
15	窯側壁	灰原3層	ロクロナガ・へラ削り	へラ削り	ロクロナガ・ナガ	35.4・14.0・22.0	
16	窯側壁	灰原3層	ロクロナガ・タタキ・削り	タタキ・施調査	ロクロナガ・ヘラナガ	19.4・13.8・29.9	

第26表 11号窯跡灰原3層出土遺物観察表



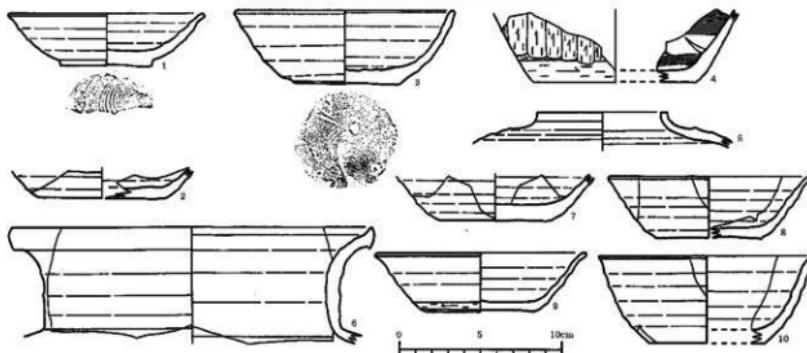
第38図 11号窯跡灰原4層出土遺物(1)



第39図 11号窯跡灰原4層出土遺物(2)

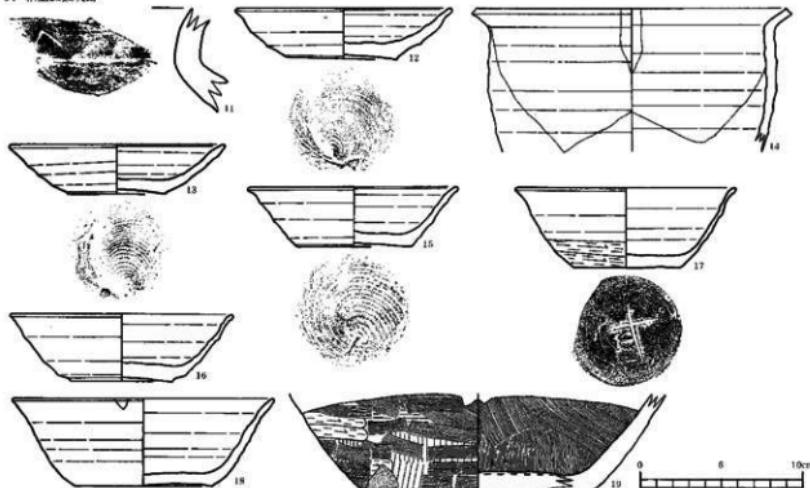
No.	種別	層位	外観	底部	内面	口径・底径・高さ(cm)	備考
1	須恵器片	灰原4層	—	圓軸へく削り	—	6.6	
2	須恵器片	灰原4層	ロクロナデ・へラ削り	圓軸へく削り	コクロナデ	124・6.6・43	
3	須恵器片	灰原4層	ロクロナデ	圓軸底削り	ロクロナデ	117・6.0・25	
4	須恵器片	灰原4層	ロクロナデ・回軸へく削り	圓軸へく削り	コクロナデ	125・6.3・40	
5	須恵器片	灰原4層	ロクロナデ	圓軸底削り	ロクロナデ	12.7・6.1・40	
6	須恵器片	灰原4層	ロクロナデ・回軸へく削り	圓軸へく削り	コクロナデ	127・6.3・40	
7	須恵器片	灰原4層	ロクロナデ・圓軸へく削り	四軸へく削り	ロクロナデ	129・6.0・42	
8	須恵器片	灰原4層	ロクロナデ・回軸へく削り	圓軸へく削り	コクロナデ	137・6.4・36	
9	須恵器片	灰原4層	ロクロナデ	圓軸底削り	コクロナデ	143・6.7・30	
10	須恵器片	灰原4層	ロクロナデ	—	コクロナデ	—	—
11	須恵器片	灰原4層	ロクロナデ・深部沈線	—	ロクロナデ	—	—
12	須恵器片	灰原4層	ロクロナデ	—	ロクロナデ	28.0	—
13	須恵器片	灰原4層	ロクロナデ・タキ	—	ロクロナデ	28.0	—
14	須恵器片	灰原4層	ロクロナデ・タキ	—	ロクロナデ	20.9	—

第27表 11号窯跡灰原4層出土遺物観察表



第40図 11号窯跡外周溝出土遺物(1)

3. 窯跡
4. 掘立柱建物跡
5. 粘土探掘坑跡



第41図 11号窯跡外周溝出土遺物(2)

No.	種別	部位	外面	生地	内面	口径・底径・高さ(cm)	備考
1	深窓跡	1層	ロクロナデ	四輪舟切り	ロクロナデ	12.0・5.7・3.3	
2	深窓跡	1層	ロクロナデ	四輪へら切り	ロクロナデ	—・7.6・	
3	深窓跡	1層	ロクロナデ	四輪舟切り	ロクロナデ	13.6・6.4・4.6	
4	土印跡	1層	ロクロナデ・田輪削り・削り・ナデ	アテ目・ナデ	—・10.0・—		
5	鉢底鋸歯形	1層	リクロナデ	—	リクロナデ	8.0・—・—	
6	深窓跡	1層	ロクロナデ	—	ロクロナデ	22.1・—・	
7	深窓跡	2層	ロクロナデ	四輪・舟切り	ロクロナデ	—・6.8・—	
8	深窓跡	2層	ロクロナデ	四輪舟切り	ロクロナデ	12.3・6.5・3.8	
9	深窓跡	2層	リクロナデ・削り	四輪削り	リクロナデ	12.8・6.5・3.6	
10	深窓跡	2層	ロクロナデ	四輪舟切り	ロクロナデ	13.1・7.0・5.4	
11	深窓跡	2層	ロクロナデ・表面洗削	—	ロクロナデ	—・—・—	
12	深窓跡	堆積土	ロクロナデ	四輪舟切り	ロクロナデ	13.2・6.0・3.0	
13	深窓跡	堆積土	ロクロナデ	四輪舟切り	ロクロナデ	13.4・6.7・3.2	
14	深窓跡	堆積上	ロクロナデ	—	ロクロナデ	19.8・—・—	
15	深窓跡	底面	ロクロナデ	四輪舟切り	ロクロナデ	13.0・7.0・3.7	
16	深窓跡	底面	ロクロナデ	四輪舟切り	ロクロナデ	13.5・6.3・4.2	
17	深窓跡	底面	リクロナデ・体トモ削り	四輪へら切り	ロクロナデ	13.3・6.6・4.9	
18	深窓跡	底面	ロクロナデ	四輪舟切り	ロクロナデ	15.9・8.4・5.4	
19	深窓跡	底面	タタキ・削り・ナデ	四輪舟切り	ロクロナデ	—・14.1・—	

第28表 11号窯跡外周溝出土遺物観察表

[出土遺物] 底面と堆積土及び灰原から土器の一括資料が出土した。

4. 掘立柱建物跡

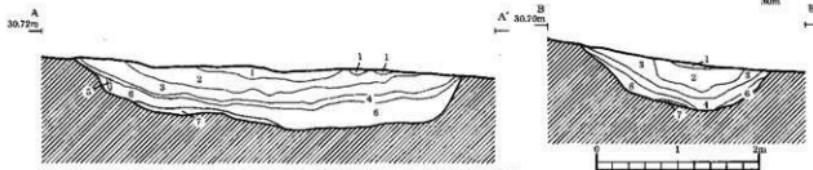
掘立柱建物跡は、C区、①区、③区から20棟検出された。1号掘立柱建物跡は、古代のものと推定されるが、ほかは時期不明である。③区から検出された掘立柱建物跡(掘立柱群)は、その柱の配列から古代の牧の可能性も考えられたが、掘り方から近世陶器が出土しており、牧の可能性は否定された。

5. 粘土探掘坑跡

粘土探掘坑跡は、C区・③区から26基検出された。今回は、③区から検出された20基の中から代表的なものを記載した。

(1) 7号粘土探査坑跡

③北向き丘陵斜面の基本層序IV層から確認された。重複は認められない。長軸4.80m、短軸2.33m、深さ0.89mの規模で、平面形は菱形である。底面は平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。堆積土は7層に細分され、いずれも自然堆積層である。



第42図 7号粘土探査坑跡

No.	土色	土性	構造	大別
1	にじく黄褐色10YR4/3	シルト	少量の地山土を粒状～塊状に含。	自然堆積層
2	黄褐色10YR5/6	粘土質シルト	しまりなし。少量の地山土を粒状～塊状に含。	
3	黒褐色10YR3/1	シルト	少量の炭化物を粒状、地山土を粒状～塊状に含。	
4	にじく黄褐色10YR4/3	シルト	少量の地山土を粒状に含。	
5	褐灰10YR4/1	シルト	少量の地山土を粒状に含。	
6	黄褐色10YR5/6	シルト質シルト	塊状。少量の炭化物を粒状に含。	
7	褐褐色10YR4/6	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含。	

第29表 7号粘土探査坑跡土層記表

No.	土色	土性	構造	大別
1	暗褐色10YR3/3	シルト	少量の炭化物を粒状に含。	堆積層
2	褐10YR4/4	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含。	
3	にじく黄褐色10YR4/2	シルト	少量の炭化物を粒状、地山土を粒状～塊状に含。	
4	オリーブ褐2.5Y4/4	粘土質シルト	多量の褐10YR4/4シルトを粒～塊状。	
5	灰褐色10YR4/1	シルト	少量の地山土を粒状～塊状に含。	
6	褐褐色10YR5/6	粘土質シルト	多量のオリーブ褐2.5Y4/1粘土質シルトを粒～塊状。	

第30表 11号粘土探査坑跡土層記表

(2) 11号粘土探査坑跡

③区南向き丘陵斜面の基本層序IV層から確認された。重複は認められない。長軸4.31m、短軸2.28m、深さ0.80mの規模で、平面形は不整長方形である。底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。堆積土は6層に細分され、いずれも自然堆積層である。



第43図 11号粘土探査坑跡

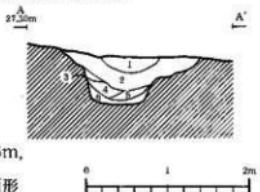
5. 粘土探掘坑跡
6. 土 壤

(3) 13号粘土探掘坑跡

No.	土色	土性	備考	大別
1	褐色10YR 3/3	シルト	多量の炭酸10YR 2/シルト・褐10YR 4/4シルトを塊状。少量の炭化物を粒状に含。	
2	褐色10YR 3/3	シルト	少量の炭化物・地山土を塊状に含。	
3	褐色10YR 3/3	シルト	少量の灰化物にびい青10YR 5/4砂質シルトを粒～塊状に含。	
4	灰褐色10YR 5/1	砂質シルト	少量の炭化物を粒状に含。	
5	褐色10YR 2/1	シルト	少量の炭化物を粒状。地山土を粒～塊状に含。	
6	灰褐色10YR 4/2	砂質シルト	少量の炭化物を粒状に含。	

第31表 13号粘土探掘坑跡層記表

③区南向き丘陵



斜面の基本層序IV

層から確認された。

重複は認められな

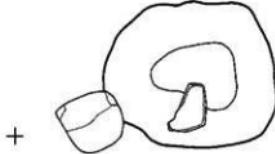
い。長軸2.10m、短軸1.76m、

深さ0.76mの規模で、平面形



自然堆積層

△ A-A'



第44図 13号粘土探掘坑跡

は隅丸長方形である。底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。堆積土は6層に細分され、いずれも自然堆積層である。

6. 土 壤

土壤は178基検出された。土壤として登録されたものの中には粘土探掘坑跡・水窓坑跡と推定されるものもある。今回は、④区から検出されたものの中から数基取り上げた。

(1) 155号土壤

④区頂部平坦面の基本層

序IV層から確認された。重

複は認められない。長軸2.11

m、短軸1.70m、深さ0.97

mの規模で、平面形は不整

方形である。底面は平坦で、

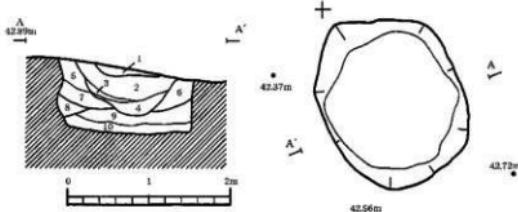
壁は急に立ち上がる。堆積

土は10層に細分され、いずれも自然

堆積層である。この中で、層No.3・4

は灰白色火山灰層である。遺物は、

堆積土中から須恵器窯を出土した。



第45図 155号土壤

No.	土色	土性	備考	大別
1	褐色10YR 4/1	シルト	多量の炭化物を粒状に含。	
2	灰褐色7/7	火山灰	少量の炭化物を粒状。地山土を粒～塊状に含。	自然堆積層
3	灰褐色7.5Y 7/1	火山灰	少量の地山土を粒～塊状に含。	
4	灰褐色7/1	火山灰	少量の地山土を粒～塊状に含。	
5	灰褐色7.5Y 7/1	シルト質粘土	多量の地山土を粒～塊状。少量の炭化物を粒状に含。酸化鉄多し。	
6	褐色10YR 6/1	シルト質粘土	多量の地山土を粒～塊状に含。酸化鉄多し。	
7	褐色2.5Y 5/1	粘土質シルト	粘土質。多量の地山土を粒～塊状に含。酸化鉄多し。	豊原土
8	褐色10YR 5/1	シルト質粘土	粘土質。多量の地山土を粒～塊状に含。酸化鉄多し。	
9	褐色5Y 6/1	シルト質粘土	多量の地山土を粒～塊状に含。酸化鉄多し。	
10	褐色10G Y 6/1	シルト質粘土	粘土質。多量の地山土を粒～塊状に含。酸化鉄多し。	人為的堆土

第32表 155号土壤層記表

(2) 158号土壤

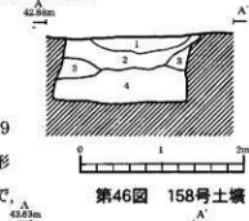
④区頂部平坦面の基本層序IV層から確認された。重複は認められない。長軸1.66m、短軸1.48m、深さ0.91mの規模で、平面形は楕円形である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は4層に細分され、いずれも自然堆積層である。遺物は、堆積土中から土師器窯・須恵器窯を出土した。

No.	土色	土性	備考	大別
1	暗赤鐵10YR3/3	シルト	少量の炭化物を粒状に含む。	自然堆積層
2	黄K2.5Y5/1	シルト	少量の炭化物を粒状に含む。	火山灰層
3	灰5Y5/1	シルト質砂	少量の炭化物を粒状・地山土を粒・塊状に含む。	火山灰層
4	黄灰2.5Y5/1	シルト質粘土	少量の灰5Y5/1シルト質砂を粒・塊状・炭化物を粒状・地山土を粒・塊状に含む。	火山灰層

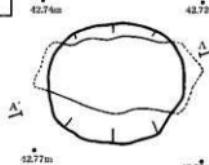
第33表 158号土壤土層記表

(3) 163号土壤

④区顶部平坦面の基本層序IV層から確認された。重複は認められない。長軸1.40m、短軸0.89m、深さ1.28mの規模で、平面形は不整方形である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は9層に細分され、いずれも自然堆積層である。この中で、層No.2・9は灰白色火山灰層である。遺物は、堆積土中と底面から須恵器甕を出土した。



第46図 158号土壤

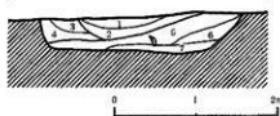


No.	土色	土性	備考	大別
1	暗赤鐵10YR5/2	シルト	少量の炭化物を粒状に含む。	自然堆積層
2	にぶい黄鐵10YR7/2	火山灰	少量の炭化物2.5Y5/2シルトを粒・塊状・炭化物を粒状に含む。	火山灰層
3	にぶい黄鐵10YR5/3	粘土質シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。しまり有。	自然堆積層
4	黄鐵10YR5/6	粘土質シルト	少量の炭化物を粒状に含む。しまり有。	自然堆積層
5	黄鐵10YR5/6	粘土質シルト	灰白7.5Y7/1シルト質粘土との混合層。少量の炭化物を粒・塊状に含む。	自然堆積層
6	黄鐵10YR5/6	粘土質シルト	灰白7.5Y7/1シルト質粘土との混合層。	自然堆積層
7	灰白10Y7/1	シルト質粘土	多量の地山土を粒・塊状・少量の炭化物を粒状に含む。しまり有。	自然堆積層
8	灰5Y5/1	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含む。	自然堆積層
9	灰白7.5Y7/1	火山灰	少量の炭化物を粒状に含む。	火山灰層

第34表 163号土壤土層記表

(4) 181号土壤

④区顶部平坦面の基本層序IV層から確認された。重複は認められない。長軸2.58m、短軸2.07m、深さ0.50mの規模で、平面形は不整方形である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は6層に細分され、いずれも自然堆積層である。この中で、層No.3は灰白色火山灰層を含む。遺物は、底面から須恵器甕を出土した。

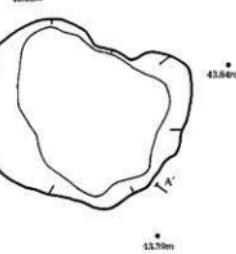


第48図 181号土壤

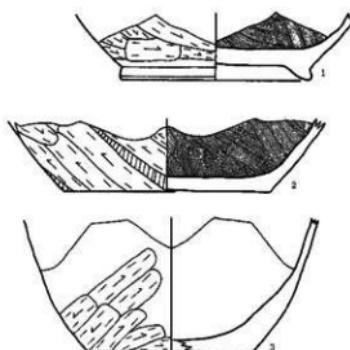
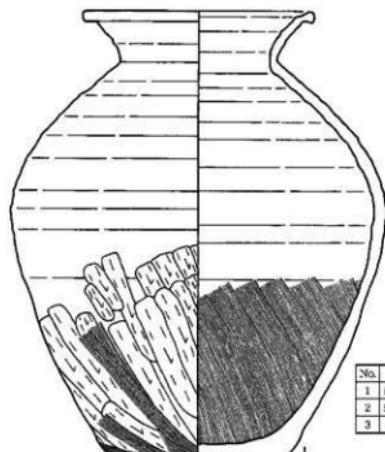
れ、いずれも自然堆積層である。この中で、層No.3は灰白色火山灰層を含む。遺物は、底面から須恵器甕を出土した。

No.	土色	土性	備考	大別
1	灰黃鐵10YR4/2	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	自然堆積層
2	青褐色5R5/6	粘土質シルト	少量の炭化物を粒状に含む。	自然堆積層
3	にぶい黃鐵10YR6/3	シルト	少量の灰白2.5Y7/1火山灰を粒・塊状・炭化物を粒状に含む。	自然堆積層
4	灰黃鐵10YR6/2	砂質シルト	少量少マングンを粒状・地山土を粒・塊状に含む。	自然堆積層
5	オリーブ灰2.5GY6/1	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含む。	自然堆積層
6	灰10Y4/1	シルト質粘土	少量の炭化物を粒状に含む。細砂含。	自然堆積層

第35表 181号土壤土層記表



6. 上 塙
7. 製鉄遺構

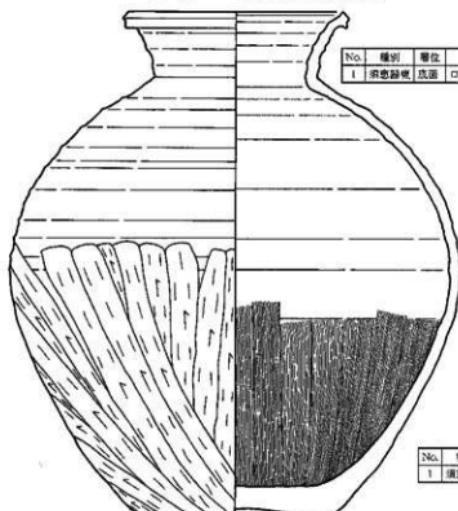


No.	種別	層位	外面	底部	内面	口径・底径・高さ(cm)	備考
1	須恵器	堆積土上	ロクロナデ・ハラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ・ナデ	13.6・6.6・5.6	
2	須恵器	堆積土中	タタキ・ハラ削り	タタキ	舟入口・ナデ	—・12.7・—	
3	須恵器	堆積土中	ハラ削り	無測定	マメツ	—・10.0・—	

第37表 155号土壇出土遺物観察表

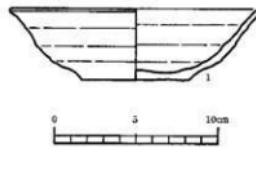
No.	種別	層位	外面	底部	内面	口径・底径・高さ(cm)	備考
1	須恵器	堆積土中	ロクロナデ・ハラ削り・ナデ	無測定	ロクロナデ・ナデ	13.8・10.5・27.5	

第36表 155号土壇出土遺物観察表



No.	種別	層位	外面	底部	内面	口径・底径・高さ(cm)	備考
1	須恵器	底面	ロクロナデ・ハラ削り・タタキ	網代底	ロクロナデ・ナデ	13.2・12.2・30.8	86版7-2

第38表 163号土壇出土遺物観察表



0 5 10cm

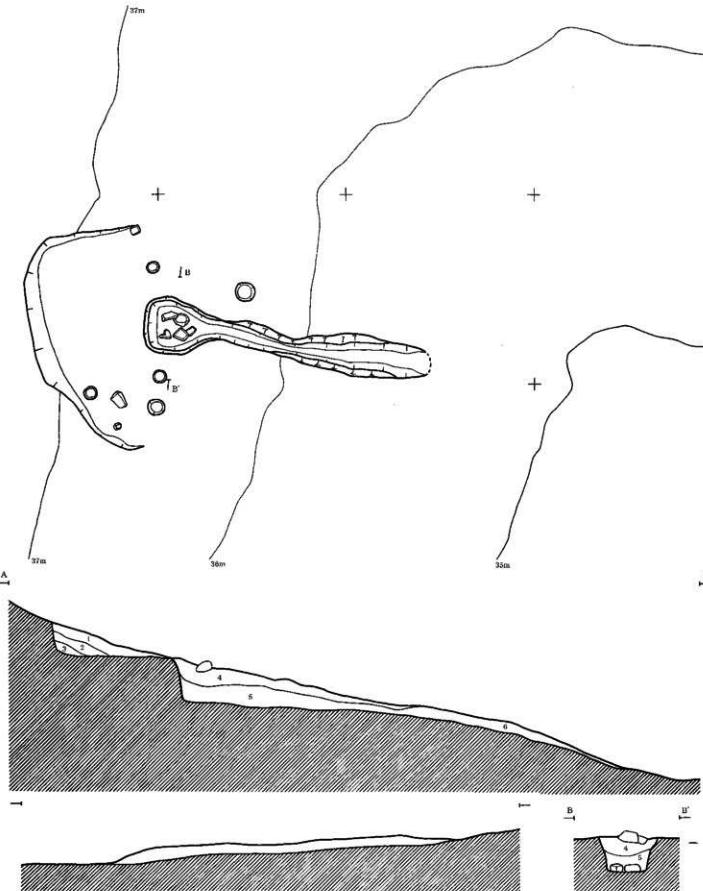
No.	種別	層位	外面	底部	内面	口径・底径・高さ(cm)	備考
1	須恵器	底面	ヒクロナデ	同輪孔削り	ロクロナデ	15.4・6.6・4.1	

第39表 181号土壇出土遺物観察表

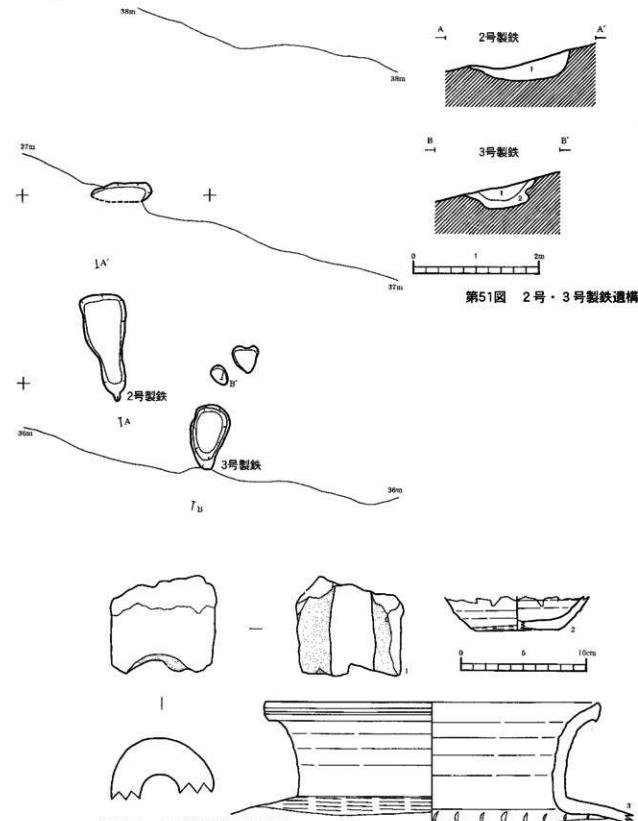
第49図 155号・158号・163号・181号土壇出土遺物

7. 製鉄遺構

製鉄遺構は、町道「関ノ入・茄子川線」沿いの中程にある西から東へ下る沢の西側斜面から3基検出された。



第50図 1号製鉄遺構



第51図 2号・3号製鉄遺構

No.	種別	層位	外観	軸部	内 観	口径・底径・高さ(cm)	備考
1	ふかご羽口	表床	—	—	—	外径：8.3内径：3.2	
2	楕円鋸歯	灰1層	1クロナゲハラ削り	油転ヘラ削り	ロクロナゲ	10.5・—・—	
3	楕円鋸歯	灰2層	ロクロナゲタタキ	—	ロクロナゲ鋸え刃	10.4・—・—	

第40表 1号製鉄遺構出土遺物観察表

(1) 1号製鉄遺構

【確認面】 基本層序IV層から確認された。

【重複・増改築】 確認されなかった。

【規模・平面形】 長軸4.60m、短軸0.88m、深さ0.77mの規模で、平面形は笠形である。下部の燃焼部の全部と、上部の溶鉱部の一部が検出された。また、廃滓場へ向かう溝状の掘り込みがあり、鉄滓を焼き出す際に使用したものと推測される。

【堆積土】 3層に大別される。自然堆積層、壁崩落土、焼土・鉄滓を含む層、炭化物層からなる。

【底面】 凹凸はなく、ほぼ平坦である。

【壁】 基本層序IV層からなる。底面から急な角度で立ち上がり、上部のほぼ全面が強い火熱により赤変している。底面に近づくにつれて火熱の受け方が弱くなる。

【その他の施設】 本遺構の西側に覆屋と推定される掘り込みと南北両側から3個のピットが検出された。ピット1・2は強い火熱を受けている。製鉄遺構への送風施設に関係したピットであろうと推定される。掘り込みの底面は凹凸がなくほぼ平坦である。各壁の幅は、西壁2.91m、北壁1.79m、南壁0.46m、高さ5~59cmの規模で残存している。東壁は存在しない。また、本遺構の東側には廃滓場があり、その堆積土の下から灰白色火山灰が検出された。

【出土遺物】 遺物は、廃滓場から須恵器が少量出土した。

No.	土色	土性	備考	大別
1	黒褐色7.5YR3/1	シルト	微量の炭化物を含。しまり有。	
2	黒褐色7.5YR2/2	シルト	微量の炭化物を含。しまり有。	自然堆積層
3	褐褐色10YR6/6	粘土	微量の炭化物・焼土を含。しまり有。	
4	黒褐色7.5YR2/1	シルト	多量の炭化物・焼土を含。しまり有。	内部埋積土
5	黒褐色7.5YR3/1	シルト	多量の炭化物・焼土を含。しまり有。	炭化物層

(2) 2号製鉄遺構

【確認面】 基本層序IV層から確認された。

【重複・増改築】 確認されなかった。

【規模・平面形】 長軸1.74m、短軸0.70m、深さ0.58mの規模で、平面形は笠形である。下部の燃焼部の一部が検出された。他は削平を受けており、検出されなかった。

【堆積土】 2層に大別される。焼土・鉄滓を含む層と炭化物層からなる。

【底面】 凹凸はなく、ほぼ平坦である。一部が強い火熱を受けて赤変していた。

【壁】 基本層序IV層からなる。底面から急な角度で立ち上がる。強い火熱を受けており、底面に近づくにつれて火熱の受け方が弱くなる。

【出土遺物】 遺物は、鉄滓が出土した。

No.	土色	土性	備考	大別
1	褐褐色7.5YR6/6	粘土	焼土・鉄滓を含。しまり有。	内部埋積土
2	黒褐色N15/	シルト	多量の炭化物を含。しまりなし。	炭化物層

第42表 2号製鉄遺構土層記表

(3) 3号製鉄遺構

【確認面】 基本層序IV層から確認された。

【重複・増改築】 確認されなかった。

【規模・平面形】 長軸1.05m、短軸0.67m、深さ0.60mの規模で、平面形は笠形である。下部の燃焼部の一部が検出された。他は削平を受けており、検出されなかった。

【堆積土】 単層で、多量の炭化物からなる。

【底面】 凹凸はなく、ほぼ平坦である。

No.	土色	土性	備考	大別
1	黒褐色N15/	シルト	多量の炭化物を含。しまりなし。	内部埋積土

第43表 3号製鉄遺構土層記表

【壁】基本層序IV層からなる。底面から急な角度で立ち上がる。

【出土遺物】遺物は、鉄滓が出土した。

8. 木炭窯跡

木炭窯跡は、6基検出された。A区・D区に単独で存在する7～9号窯跡、③区に並んで存在する21～23号窯跡からなる。今回は、21～23号窯跡を取り上げる。

(1) 21号窯跡

【確認面】③区東向き緩斜面の基本層序II層から確認された。

【重複・増改築】認められない。

【形態と規模】煙道部、炭化室、燃焼室からなる地下式窯である。総長13.70mの規模で、平面形は出目金形である。

【煙道部】先端に位置し、長軸50cm・短軸38cmの楕円形で、奥行き0.69m、高さ1.87mの規模である。平坦な底面から急な角度で立ち上がる。奥壁には、木炭窯を造る際の工具痕跡が残されていた。また吸煙口の一部を強化するように、折損された板碑が用いられていた。

【炭化室】長さ4.20m、幅1.72m(副室幅3.44m)、高さ1.70mの規模である。底面に凹凸はなく、燃焼室に向かってレベルを減じる。壁は上に向かうにつれて内湾することから、断面形は「匁」形を呈するものと推定される。側壁には、木炭窯を造る際の工具痕跡が残されていた。また、底面の一部には2～5cmの高さで炭化物が残存していた。

【燃焼室】長さ0.87m、幅0.81m、高さ1.03mの規模で、底面及び側壁の一部は強い火熱により赤変していた。底面に凹凸はなく、焚口部分に向かってレベルを減じる。側壁には、木炭窯を造る際の工具痕跡が残されていた。側壁の一部、焚口部分を強化するように、折損された板碑が用いられていた。

【堆積土】11層に大別される。天井崩落土、壁崩落土、自然堆積土からなる。

【その他の施設】前庭部の両側から楕円形の窪み、延長上に溝状の掘り込みが検出された。また、焚口部分につながる前庭部に焼面は検出されなかった。

【出土遺物】燃焼室の焚口部分から折損された板碑が出土した(第54図)。

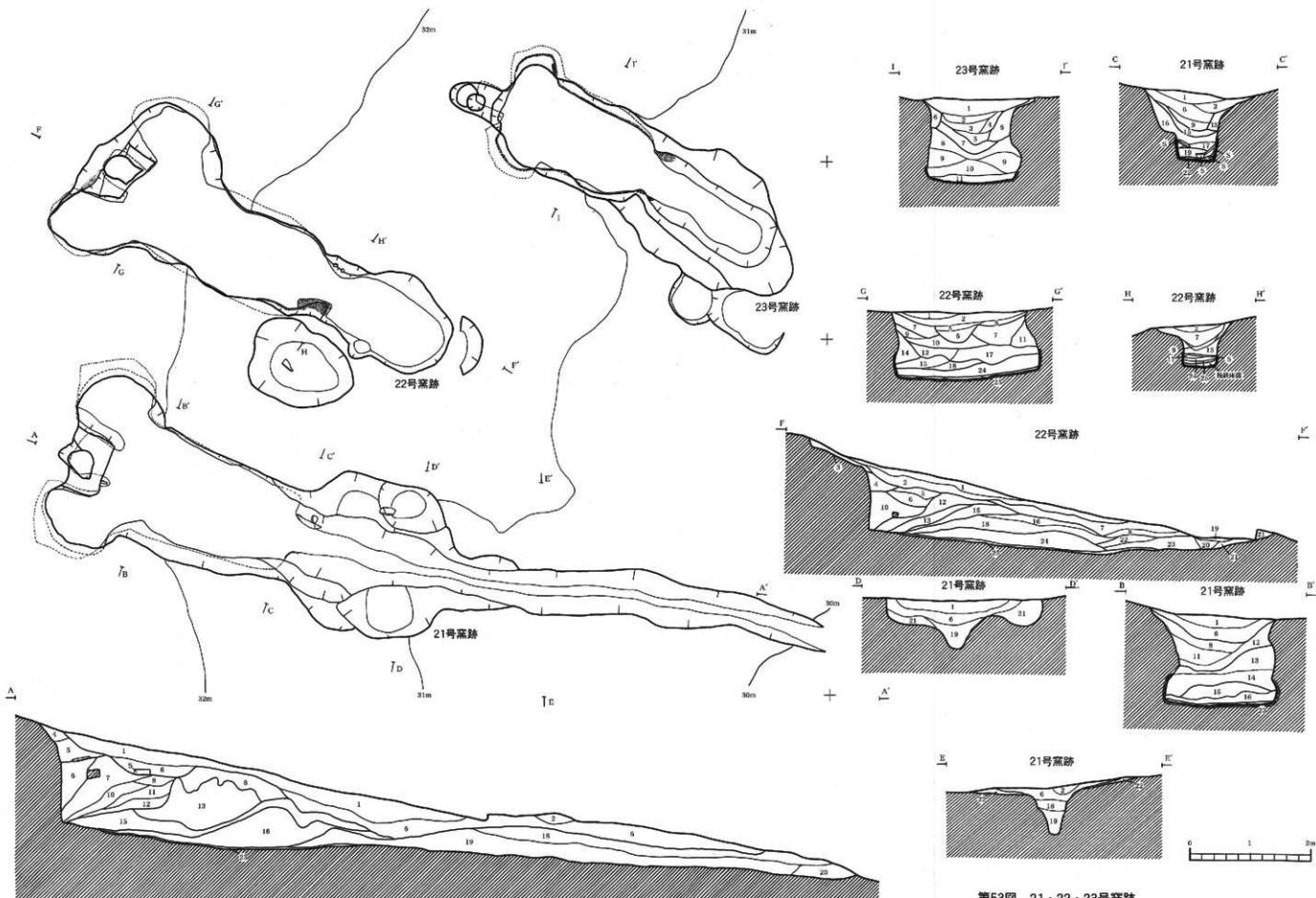
(2) 22号窯跡

【確認面】③区東向き緩斜面の基本層序II層から確認された。

【重複・増改築】認められない。

【形態と規模】煙道部、炭化室、燃焼室からなる地下式窯である。総長6.91mの規模で、平面形は出目金形である。

【煙道部】先端に位置し、長軸52cm・短軸40cmの楕円形で、奥行き0.66m、高さ1.19mの規模である。平坦な底面から急な角度で立ち上がる。奥壁には、木炭窯を造る際の工具痕跡が残されていた。また吸煙口の一部を強化するように、折損された板碑が用いられていた。



第53図 21・22・23号窯跡

【炭化室】長さ3.87m、幅1.60m(副室幅3.26m)、高さ1.17mの規模である。底面に凹凸はなく、燃焼室内に向かってレベルを減じる。壁は上に向かうにつれて内湾することから、断面形は「U」形を呈するものと推定される。側壁には、木炭窯を造る際の工具痕跡が残されていた。また、底面の一部には2~5cmの高さで炭化物が残存していた。

【燃焼室】長さ0.80m、幅0.80m、高さ0.66mの規模で、底面及び側壁の一部が強い火熱により赤変していた。底面に凹凸はなく、焚口部分に向かってレベルを減じる。側壁には、木炭窯を造る際の工具痕跡が残されていた。側壁の一部、焚口部分を強化するように、折損された板碑が用いられていた。

【堆積土】10層に大別される。天井崩落土、壁崩落土、自然堆積土からなる。

【その他の施設】前部の南側から横円形の窓みが検出された。また、焚口部分につながる前部に焼面は検出されなかった。

【出土遺物】燃焼室の焚口部分や煙道部から折損された板碑が出たした(第54図)。

(3) 23号窯跡

No.	土色	土性	備考	大別
1	にぶい黄褐色10YR4/3	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
2	海褐色10YR4/4	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
3	暗褐色10YR3/3	シルト	多量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
4	黄褐色10YR5/6	粘土質シルト		
5	黄褐色10YR5/6	粘土質シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	自然堆積土
6	黒褐色10YR3/2	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
7	褐褐色10YR4/3	粘土質シルト	多量の炭化物・地山土を粒状に含む。	天井及び壁崩落土
8	灰褐色10YR4/2	粘土質シルト	多量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
9	暗褐色10YR3/2	シルト	少量の炭化物・地山・地山土を粒状に含む。	
10	にぶい黄褐色7.5YR5/4	粘土質シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
11	暗褐色10YR3/3	シルト	多量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
12	暗褐色7.5YR2/3	シルト	多量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
13	黄褐色10YR5/6	粘土質シルト	多量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
14	にぶい黄褐色5YR4/4	粘土質シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	自然堆積土
15	褐褐色10YR4/4	シルト	少量の炭化物・地山・地山土を粒状に含む。	
16	黄褐色10YR5/6	粘土質シルト	多量の炭化物・地山土を粒状に含む。	天井及び壁崩落土
17	黄褐色10YR5/6	粘土質粘土	多量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
18	基褐色10YR3/1	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
19	灰褐色10YR4/2	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
20	明褐色10YR4/2	砂質シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
21	にぶい黄褐色10YR4/3	シルト	多量の炭化物・地山土を粒状に含む。	前庭部堆積土
22	黄褐色10YR5/6	粘土質シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
23	黒褐色15/5	---	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	炭化物層

第44表 21号窯跡土層記表

No.	土色	土性	備考	大別
1	褐10YR4/4	シルト	少量の炭化物を粒状に含む。	
2	暗褐色10YR3/3	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	自然堆積層
3	黄褐色10YR5/6	粘土質シルト	少量の炭化物を粒状に含む。	
4	暗褐色10YR3/3	粘土質シルト	多量の炭化物を粒状に含む。	天井及び壁崩落土
5	灰褐色10YR4/2	シルト	多量の炭化物を粒状に含む。	
6	暗褐色10YR4/2	シルト	少量の炭化物を粒状に含む。	
7	典10YR2/1	シルト	多量の炭化物を粒状に含む。	自然堆積層
8	褐褐色10YR4/4	砂質シルト	少量の炭化物・地山・地山土を粒状に含む。	
9	灰褐色10YR4/2	シルト	多量の炭化物を粒状に含む。	
10	にぶい黄褐色5YR4/4	粘土質粘土	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	天井崩落土
11	灰褐色10YR4/2	シルト	多量の炭化物を粒状に含む。	天井及び壁崩落土
12	暗褐色10YR1.7/1	シルト	少量の炭化物を粒状に含む。	
13	暗褐色10YR3/3	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	自然堆積層
14	にぶい黄褐色5YR4/4	粘土質粘土	多量の炭化物を粒状に含む。	天井又は壁崩落土
15	褐褐色2/1	シルト	多量の炭化物を粒状に含む。	
16	黑褐色10YR3/1	シルト	多量の炭化物を粒状に含む。	
17	黑褐色10YR3/2	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
18	黑褐色2Y3/1	砂質シルト	天井崩落土を含む。	自然堆積層
19	褐褐色4/4	シルト	少量の炭化物・地山・地山土を粒状に含む。	
20	黑褐色10YR3/2	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
21	黑褐色2Y2/1	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
22	黑褐色10YR3/2	シルト	多量の炭化物を粒状に含む。	
23	黑褐色2Y2/1	シルト	多量の炭化物を粒状に含む。	
24	明褐色5YR5/6	シルト	多量の炭化物を粒状に含む。	天井崩落土
25	暗褐色15/5	---	炭化物層。	炭化物層

第45表 22号窯跡土層記表

No.	土色	土性	備考	大別
1	にぶい黄褐色10YR4/3	シルト	少量の炭化物・地山・地山土を粒状に含む。	
2	暗褐色10YR3/1	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
3	黑褐色10YR1.7/1	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
4	暗褐色10YR3/3	シルト	少量の炭化物・地山土を粒状に含む。	
5	黑褐色10YR1.5/	シルト	多量の炭化物を粒状に含む。	天井及び壁崩落土
6	暗褐色10YR5/6	粘土質シルト	少量の炭化物を粒状に含む。	地山崩落土
7	灰褐色10YR4/2	砂質シルト	多量の炭化物10YR5/6粘土質シルトを複数・少量の炭化物を粒状に含む。	自然堆積層
8	褐褐色10YR6/6	粘土質シルト	少量のにぶい黄褐色10YR5/6粘土質シルトを複数に含む。	
9	にぶい黄褐色5YR4/4	シルト	多量の炭化物を粒状に含む。	
10	暗褐色10YR5/6	粘土質シルト	少量の炭化物を粒状に含む。	
11	にぶい黄褐色5YR4/4	シルト	少量の炭化物を粒状に含む。	

第46表 23号窯跡土層記表



嘉元 3 年(1305)銘板碑

至徳 4 年(北朝・1387)銘板碑

第54図 21・22・23号窯跡出土遺物

[確認面] ③区東向き緩斜面の基本層序Ⅱ層から確認された。

[重複・増改築] 認められない。

[形態と規模] 煙道部、炭化室、燃焼室からなる地下式窯である。総長6.45mの規模で、平面形は出目金形である。

[煙道部] 先端に位置し、突出している。径31cmの円形で、奥行き0.56m、高さ1.70mの規模である。平坦な底面から急な角度で立ち上がる。奥壁には、木炭窯を造る際の工具痕跡が残されていた。また吸煙口の一部を強化するように、折損された板碑が用いられていた。

[炭化室] 長さ3.04m、幅1.43m(副室幅2.30m)、高さ1.48mの規模である。底面に凹凸はなく、燃焼室に向かってレベルを減じる。壁は上に向かうにつれて内湾することから、断面形は「匁」形を呈するものと推定される。側壁には、木炭窯を造る際の工具痕跡が残されていた。また、底面の一部には2~5cmの高さで炭化物が残存していた。

[燃焼室] 長さ0.81m、幅0.80m、高さ0.91mの規模で、底面及び側壁の一部が強い火熱により赤変していた。底面に凹凸はなく、焚口部分に向かってレベルを減じる。側壁には、木炭窯を造る際の工具痕跡が残されていた。側壁の一部、焚口部分を強化するように、折損された板碑が用いられていた。

[堆積土] 4層に大別される。天井崩落土、壁崩落土、自然堆積土からなる。

[その他の施設] 前庭部の南側から楕円形の窓みが検出された。また、焚口部分につながる前庭部に焼面は検出されなかった。

[出土遺物] 燃焼室の焚口部分から折損された板碑が出土した(第54図)。

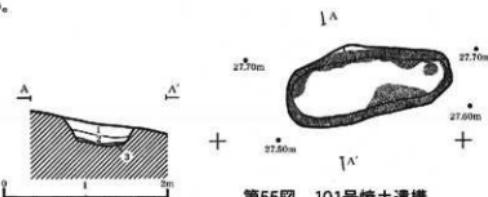
9. 焼土遺構

焼土遺構は調査区全域に分布し、計104基検出された。隅丸長方形、円形などの平面形を呈しており、基本層序IV層から確認されたものが多い。

(1) 101号焼土遺構

③区北側斜面の基本層序IV層から検出された。重複は認められない。長軸2.04m、短軸0.94m、深さ0.33mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。底面

は凹凸なくほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は3層に細分される。自然堆積層と炭化物層からなる。底面と壁の一部が強い火熱により赤変していた。



第55図 101号焼土遺構

No.	土色	土性	被覆	大別
1	黄10YR4/4	シルト	少量の炭化物、焼土を粒状に含。 非常によくしきっている。	入済の埋土
2	にぶい黄褐色10YR4/3	シルト	少量の炭化物、焼土を粒状に含。 非常によくしきっている。	入済の埋土
3	黒10YR2/1	—	少量の焼土を粒状に含。	炭化物質

第47表 101号焼土遺構土層記表

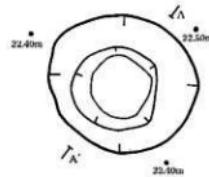
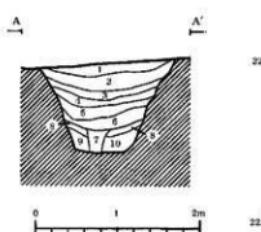
10. 井戸跡

井戸跡はC区の基本層序IV層から1基、①区の基本層序III層から2基の合計3基検出された。いずれも素掘りの井戸である。今回は、①区から検出された2号井戸跡を記載する。

10. 井戸跡 11. 溝状遺構 12. 塚跡
 13. 遺物包含層 14. その他の出土遺物
 V. 考察とまとめ

(1) 2号井戸跡

①調査区の基本層序Ⅲ層から検出された。重複は認められない。長軸2.90m、短軸2.71m、深さ1.22mの規模で、平面形は円形である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は2層に大別され、自然堆積層、壁崩落土からなる。遺物は、堆積土中から須恵器が出土した。



第56図 2号井戸跡

No.	土色	土性	備考	大別
1	黒褐色10YR2/3	シルト	少量の炭化物・礫土・マンガン・地山土を粒状に含。	自然堆積層
2	灰褐色10YR4/2	シルト	少量の炭化物・礫土・マンガンを粒状に含。	
3	灰褐色10YR4/2	粘土質シルト	少量の炭化物・マンガン・地山土を粒状に含。	
4	褐色10YR4/1	粘土質シルト	多量の地山土を塊状・少量の礫土・マンガンを粒状に含。	
5	黒褐色10YR3/1	粘土質シルト		
6	褐色10YR5/1	シルト	少量の地山土を塊状・炭化物・マンガンを粒状に含。	
7	黒褐色10YR3/1	粘土質シルト	少量のマンガン・地山土を粒状に含。	
8	褐色10YR4/1	シルト	少量の地山土を塊状・炭化物・マンガンを粒状に含。	
9	褐色10YR4/1	シルト	少量の地山土を塊状・マンガンを粒状に含。	
10	灰褐色10YR4/2	砂質シルト	多量の地山土を塊状・少量の炭化物・礫土・マンガンを粒状に含。壁崩落土	

第42表
2号井戸跡土層記表

11. 溝状遺構

溝状遺構は34条検出された。大半は地境溝のような何らかの空間を区画するものと推測される。また、3号窯跡灰原堆積土除去後に確認された5~9号溝状遺構のように、烟跡と推測される小溝も検出した。

12. 塚跡

塚跡は②区頂部平坦面の基本層序IV層から1基検出された。主体部の上部構造は不明であり、下部構造は存在しない。主体部を取り巻く溝の規模は、幅60~93cm、深さ26~36cmで、断面形は「U」形を呈する。

No.	土色	土性	備考	大別
1	黒褐色10YR2/2	シルト	しまり有。	自然堆積層
2	「」に赤い黄褐色10YR4/3	シルト質粘土	少量の明黄褐色10YR6/6粘土を細かく塊状に含。	

第49表 1号塚跡土層記表

跡の北西側に所在する熊野神社の社殿直上部に位置し、何らかの関係が考えられる。

13. 遺物包含層

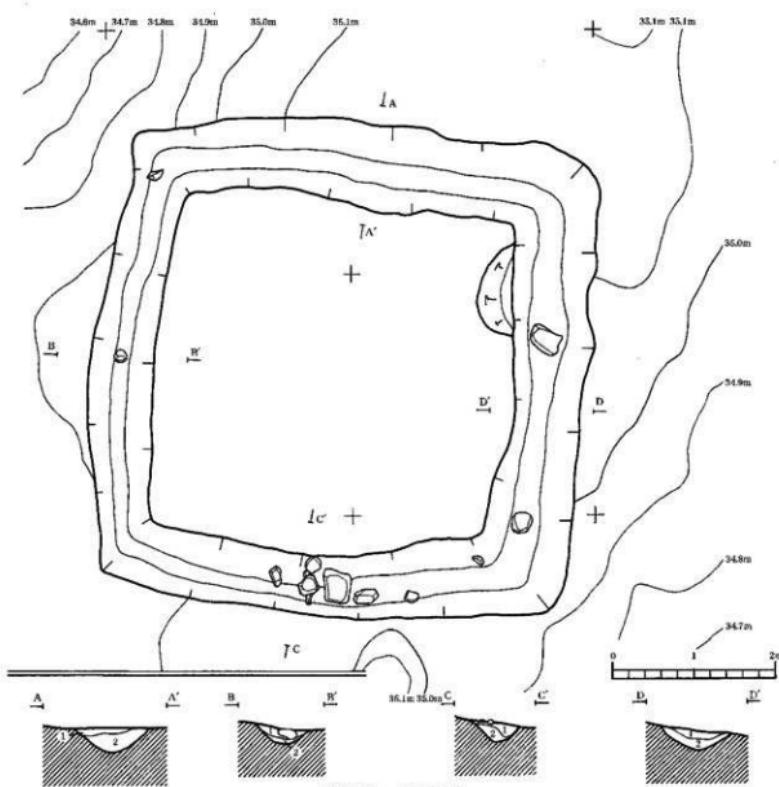
遺物包含層はC区から2枚検出された。いずれも土師器・須恵器の包含層で、9世紀代と考えられる。

14. その他の出土遺物

これらの遺構に伴う遺物の他に、土師器・須恵器・石器等が遺構に伴わず出土した。

V. 考察とまとめ

今回の調査では、窯跡・粘土採掘坑跡などの須恵器生産関連遺構、古墳時代前期と奈良・平安時代の住



第57図 1号塚跡

居跡、平安時代の製鉄遺構、他に掘立柱建物跡、土壌、木炭窯跡、井戸跡、焼土造構、塚跡、溝状遺構を検出した。

今回は、『河南町文化財調査報告書』第4集・第7集・第10集に記されている内容を除いた住居跡・竪穴造構・土壌・製鉄遺構・木炭窯跡についての考察を行う。

住居跡

今回は、35号・50~52号住居跡を取り上げた。35号住居跡は、②区の頂部平坦面からやや下がった斜面から検出されている。遺物は、土師器壺・甕が出土している。土師器壺は栗圓式から国分寺下層式にかけての時期と推定される。土師器甕は住社式から栗圓式の時期と推定される。

50号住居跡は、③区の南向き斜面から検出されている。遺物は、底部回転糸切りの須恵器壺が出土している。口径・底径比から見て、SEK 2号黒段階のものと推定される。

51号住居跡は、③区の頂部平坦面からやや下がった緩斜面から検出されている。遺物は、底部回転糸切

り・内面黒色処理の土師器壺が出土しており、表衫ノ入式期と推定される。

52号住居跡は、④区の頂部平坦面から検出されている。遺物は、土師器壺・高壺・壇・甕が出土している。閑ノ入遺跡46号住居跡、石巻市田道町遺跡A地点3号住居跡、出土の資料と同様の形状を示しており、塙釜式II B～Ⅲ段階のものと推定される。

土壤

今回は4基の土壤を取り上げた。いずれも須恵器甕が出土している。163号土壤からはほぼ完形の須恵器甕が出土しているが、体部の最も張り出した位置が上半部にあり、9世紀前半から中頃の年代と考えられる。SEK2号窓段階墳のものと推定されるため、土壤そのものの年代はSEK2号窓あるいは3号窓段階墳と推定される。また、他の3基の土壤についても9世紀代の年代が与えられる。これら4基の土壤は、④区の土壤集中地点の代表的なものである。④区は、焼き物に適した2種類の粘土層(白色粘土・赤色粘土)が地下の浅い位置にある。土壤の形態は多様であるが、同一地点に集中していることから、大半は同じ目的で地面を掘り込んだものと推定される。これらの土壤は、前記の粘土層を追うようにして掘り込んであることから、粘土の採掘を目的としたものと推定される。

このような土壤群としては、昭和63年度の閑ノ入遺跡発掘調査の際に検出された55～70号土壤が相当する。この土壤群の近くからは水簸坑と推定される土壤や6基の粘土探掘坑跡が検出されており、粘土探掘から精製までの一連の作業領域となっている。この土壤群も粘土探掘を目的としたものであった可能性がある。また、水簸坑と推定される土壤の中には単に水簸のために掘られたものと考えるより、粘土を探掘した後に水簸用に転用したと捉えたほうが合理的に説明できるものがあった。

製鉄遺構

製鉄遺構は3基が近接して検出された。この中で、最も遺存状態の良い1号製鉄遺構の廃滓場の堆積土直下より十和田a火山灰と推定される火山灰が検出されたことから、10世紀半ば以降のものであろうと考えられる。2号・3号製鉄遺構についても、検出状況からみて1号製鉄遺構に近い年代が推測される。

1号製鉄遺構は、検出状況からみて覆屋が付属したものと推定される。また、南北に対に並ぶ強い火熱によって赤変したピットは、送風設備の一部と考えられる。同様な検出例としては、多賀城市柏木遺跡、福島県新地町相馬製鉄関連遺跡がある。

木炭窯跡

木炭窯跡は6基検出した。単独で存在する7～9号窯跡と並んで存在する21～23号窯跡があり、9号窯跡を除いて、いずれも礫混じりの粘質土またはシルトの地山斜面に横穴を掘った地下式窯を設置している。また、炭化室の形態としては、①煙道部の両脇に副室を伴うもの(9・21～23号窯跡)と、②副室がなく長方形または長方形に近い橢円形や逆三角形を呈するもの(7・8号窯跡)に分けられる。いずれの形態も燃焼室に近い部分の幅が狭く、奥へ向かうにつれて広くなる。これは良質の木炭が炭化室の奥の方でより多く作られるためである。近代以降の木炭窯で①の形態に近いものとして、和歌山県の三輪形吉本窯がある。

以上6基の木炭窯跡は、いずれも前庭部に焼け面がなく焼土層も発達していない。白炭生産の場合、窯外に炭材を括き出してから消火するため前庭部に焼け面が生じ、焼土層も発達しやすい。しかし、このような特徴が見受けられないため、黒炭を生産するための木炭窯跡と推定される。

県内の検出例としては、多賀城市柏木遺跡、石巻市水沼窯跡、利府町大貝窯跡などがあり、いずれも副室を伴うものと伴わないものの双方がある。

これらの木炭窯跡の中で21~23号窯跡はII層上面から確認されており、住居跡や窯跡がIV層上面から確認されていることを考えると、時代的にはより新しいものであることが想定される。

また、6基の中で、4基(8・21~23号窯)からは折損された板碑が出土した。これらの板碑は、燃焼室の焚口部分や煙道部の吸煙口部分から出土し、強い火熱により赤変したものやタールの付着したものが大半を占めた。この中で紀年銘の判る板碑は、23号窯跡から出土した嘉元3年(1305)銘の1基である。他の板碑は年代不明だが、種子や願文の彫り方より鎌倉時代から南北朝時代の頃にかけてのものと推定される。

板碑は、当時から存在した板塔婆と同様の形状を示し、供養のために造立したものである。そして、素材が石であることから、造立者が半永久的に当地に碑を残すことを意図したものと推定される。それは、河南町北村字高寺に所在する弘安元年(1278)建立の「鎌倉権五郎五代後葉」板碑に、「留不朽文傳未來之修覧」と刻んであるとおりである。また、この板碑は元禄期の墓碑に転用されている。

かかる性格をもつ板碑が折損されるということは、供養碑を単に石材と見做すということであり、墓碑への転用と同様に転用の一種といえる。石巻地域では天正・文禄年間まで板碑を造立するという行為が見受けられるため、板碑が折損されて木炭窯に用いられた時期はそれ以降と考えた方がよいものと思われる。

そこで、8・21~23号窯跡の4基は、近世初期の年代が推定される。7号・9号窯跡は、年代不明であるが、前記4基の窯跡と近い年代を想定したい。

まとめ

今回の発掘調査で、以下のことがわかった。

1. 関ノ入遺跡は須江丘陵南部に立地し、縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世までの複合遺跡である。
2. 古墳時代前期の堅穴住居跡は2軒目になるが、いずれも小型住居で単独で立地する。大型住居が複数で立地するとの好対照をなす。
3. 平成6年度に調査した9世紀代の土壙群は、不整方形を呈したものが多く、その大半は粘土採掘を目的としたものと考えられること。また、粘土採掘坑跡としたものは13基しかないが、上記土壙群のようなものもあり、実質的な粘土採掘坑跡は、100基を越すものと考えられる。
4. 関ノ入遺跡における須恵器焼成の窯跡は、11号窯跡の9世紀初頭を最古とし4号窯跡の10世紀半ばを最新とする。
5. 製鉄遺構は3基検出され、1号製鉄遺構は磨津場直下から灰白色火山灰が検出されていることから、10世紀半ば頃のものと推定されること。
6. 木炭窯跡は合計6基検出され、いずれも黒炭窯である。また、折損された板碑を燃焼室の焚口部分や煙道部の吸煙口部分から出土した8・21~23号窯跡があるが、近世初期の年代が推定される。

7. 塚跡は熊野神社社殿の直上部にあることから、熊野神社との関連が考えられる。

引用・参考文献(五十音順)

- 石井武政・柳沢幸夫ほか(1982.2) :「松島城地盤の地質」『地域地質研究報告』秋田県第89号 通商産業省工業技術院地質調査所
- 石川俊英・相澤清利(1987.3) :「高崎遺跡—都市計画街路高崎大代線外」『線建設工事関連発掘調査報告書』II-1
- 『多賀城市文化財調査報告書』第12集 多賀城市教育委員会・多賀城市都市計画課
- 石川俊英・相澤清利(1992.3) :「柏木遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』第17集 多賀城市教育委員会
- 石巻市教育委員会(1984.3) :「水沼窯跡発掘調査報告」『石巻市文化財調査報告書』第1集 石巻市教育委員会
- 石巻市史編さん委員会(1992.3) :「石巻の歴史」第8巻 資料編2 古代・中世編 石巻市
- 伊東信雄(1957.3) :「古代史」『宮城県史』第1巻 宮城県
- 小山正忠・竹原秀雄(1990.6) :「新版標準土色軒」10版 日本色研事業株式会社
- 河南町(1971.3) :「風土記録用書上」「河南町誌」下 河南町
- 佐藤敏幸(1991.3) :「御塙廻跡—発掘調査報告書」『河南町文化財調査報告書』第5集 河南町教育委員会・建設省東北地方建設局
- 佐藤敏幸(1993.3) :「須江窯跡群 代官山遺跡」『河南町文化財調査報告書』第6集 河南町教育委員会
- 佐藤敏幸(1993.3) :「須江窯跡群 畠ノ入遺跡・奥美海道地方最大の須恵器生産地」『河南町文化財調査報告書』第7集 河南町教育委員会
- 佐藤敏幸(1999.3) :「赤井遺跡—牡鹿櫛・郡家擬定地—」『矢本町文化財調査報告書』第10集 矢本町教育委員会
- 佐藤敏幸(1999.3) :「須江窯跡群の窯業生産開始について—瓦山窯跡出土の瓦をめぐって—」
『石巻文化センター調査研究報告』第5号 石巻文化センター
- 佐藤雄一(1986.11) :「6板碑」『わがまち河南の文化財』 河南町教育委員会
- 佐藤雄一(1997.8) :「河南町の板碑」『平成9年度河南町歴史大学』レジメ 河南町教育委員会
- 志間泰治・桑月鮮(1991.11) :「宝ヶ峯」 廉藤報恩会
- 清水東四郎(1924.12) :「中山橋跡(住景山) (桃生郡史跡)」『宮城県史跡名勝天然記念物調査報告書』2
- 鈴木省三(1924.12) :「中山橋」『宮城県史跡名勝天然記念物調査報告書』1
- 高橋義行・古野久美子(2002.1) :「大員窯跡(第2次調査)」『平成13年度 宮城県遺跡調査成果発表会要旨』 宮城県考古学会
- 高橋守克・阿部恵(1987.3) :「須江窯跡遺跡」『河南町文化財調査報告書』第1集 河南町教育委員会
- 中野裕平(1988.3) :「須江開ノ入遺跡詳細分布調査報告書」『河南町文化財調査報告書』第2集 河南町教育委員会
- 中野裕平・佐藤敏幸(1990.3) :「須江開ノ入遺跡—工業地帯造成に伴う充填調査報告書」『河南町文化財調査報告書』第4集河南町教育委員会
- 中野裕平(1993.3) :「畠田遺跡」『河南町文化財調査報告書』第8集 河南町教育委員会
- 中野裕平(1994.6) :「折損された板碑」『六軒丁中史研究』第2号 東北学院大学中史研究会
- 中野裕平・市川洋一(2000.3) :「閑ノ入遺跡・長者跡—須江山淨水場配水池建設(増設)工事に伴う事前調査」
『河南町文化財調査報告書』第10集 河南町教育委員会・右巻地方広域水道企業団
- 中野裕平(2000.11) :「御塙廻跡—三陸縦貫自動車道「矢本・石巻道路」施工に伴う事前調査」
『河南町文化財調査報告書』第11集 河南町教育委員会・建設省東北地方建設局
- 中野裕平・市川洋一(2002.12) :「細田遺跡—細田接石工事に伴う事前調査」『河南町文化財調査報告書』第12集 河南町教育委員会
- 中野裕平(2004.5) :「河南町の遺跡から検出された木炭灰について」『宮城考古学』第6号 宮城県考古学会
- 芳賀英実(1995.3) :「田道町遺跡」『石巻市文化財調査報告書』第7集 石巻市教育委員会
- 早坂春一・阿部恵(1980.3) :「東北自動車道遺跡調査報告書II(西手取・手取遺跡)」『宮城県文化財調査報告書』第63集
宮城県教育委員会・日本道路公團
- 樋口清之(1960.3) :「日本木炭史」 社團法人全国燃料会館
- 福島県教育委員会(1990.3) :「相馬地方製鉄遺跡調査報告書」『福島県文化財調査報告書』第215集 福島県教育委員会
- 松本彦七郎(1919.5) :「陸前国宝ヶ峯遺跡の分層の小発掘成績」『人類学雑誌』34の5 日本人類学会
- 松本彦七郎(1919.9) :「宝ヶ峯遺跡について」『考古学雑誌』第9巻第9号 日本考古学協会
- 三浦伊八郎(1933.10) :「木炭講話—炭窯之部炭窯百態—」 三浦書店
- 宮城県教育委員会(1998.3) :「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第176集 宮城県教育委員会
- 三宅宗緝・進藤秋輝ほか(1987.3) :「赤井遺跡第1次発掘調査報告」『矢本町文化財調査報告書』第1集 矢本町教育委員会
- 森賀喜(1983.3) :「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ(佐内屋敷遺跡)」『宮城県文化財調査報告書』第93集
宮城県教育委員会・日本道路公團
- (1971) :「仙台領内古城書上」「仙台叢書」別巻
- (註) 編著者名の記載については、日本国内の図書館における一般的な図書目録の記載方法に従い、同一図書における編著者(または個人)が2人までの場合は氏名(または団体名)全て3人以上の場合はその図書を代表する2人の氏名のみの記載とし、3人以上からは「ほか」の扱いとした。

写 真 図 版



圖版 1 - 1 35號住居跡完掘狀況



圖版 1 - 2 35號住居跡出土遺物



图版 2-1 50号住居跡完掘状況



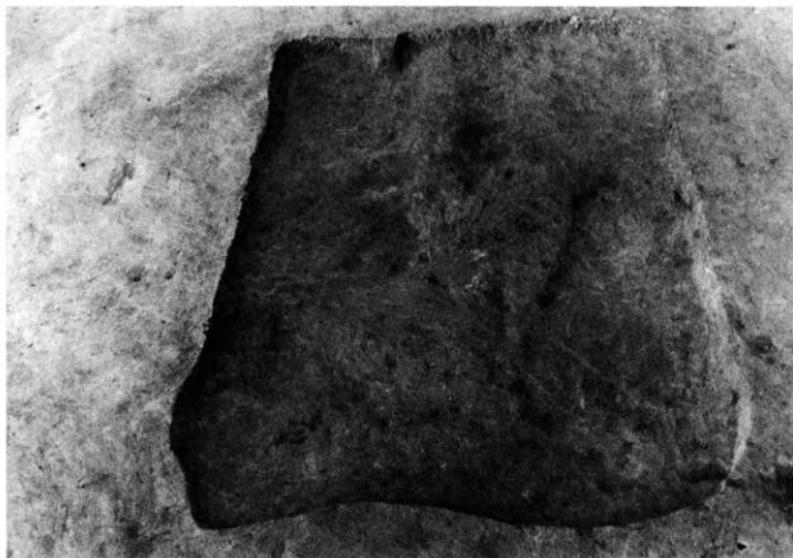
图版 2-2 50号住居跡出土遺物



图版 3-1 51号住居跡完掘状況



图版 3-2 51号住居跡出土遺物



图版 4-1 52号住居跡完掘状況



图版 4-2 52号住居跡出土遺物



圖版 5-1
11号窯跡完掘状况



圖版 5-2 11号窯跡出土遺物

圖版 6-1
9號豎穴遺構
完掘狀況

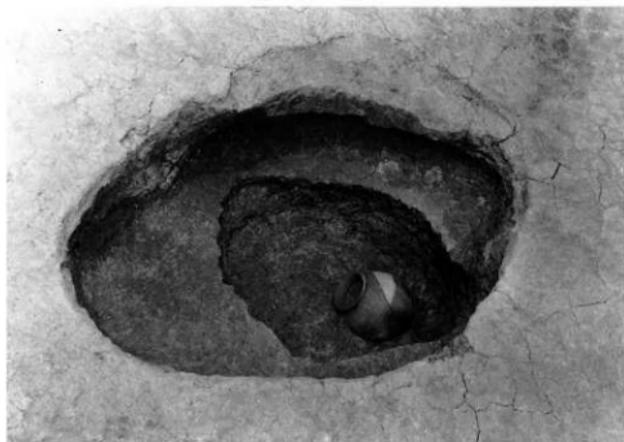


圖版 6-2
7號粘土探掘坑跡
完掘狀況



圖版 6-3
13號粘土探掘坑跡
完掘狀況





圖版 7-1
163号土壤完掘状况



圖版 7-2
163号土壤出土遺物



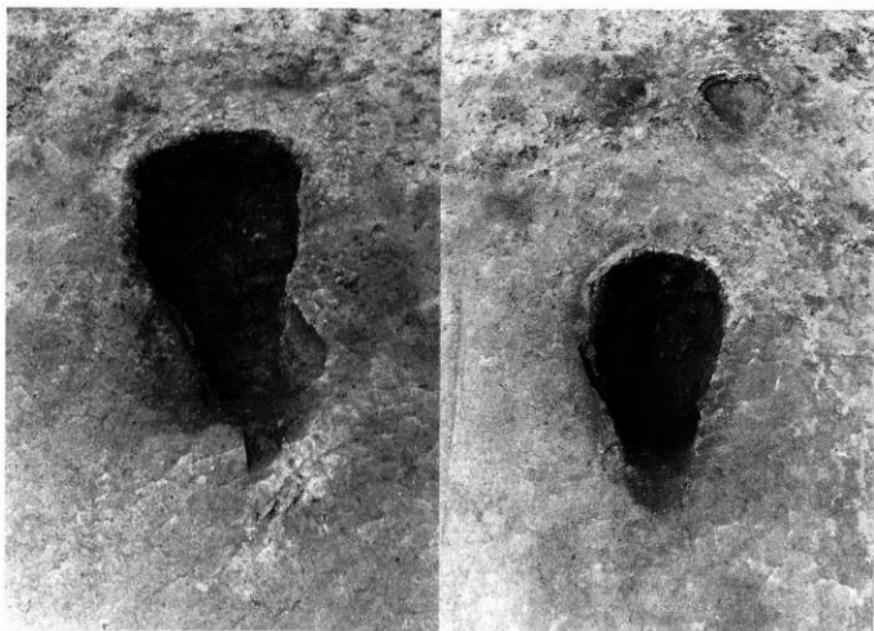
圖版 7-3
181号土壤完掘状况



図版 8-1
1号製鉄遺構完掘状況

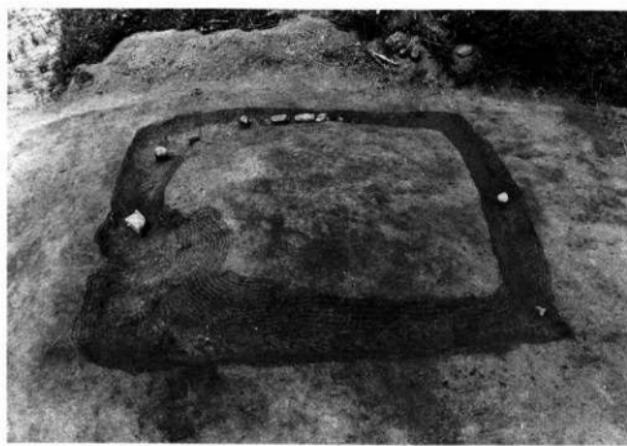


図版 8-2
1号製鉄遺構完掘状況
(炉本体部)



图版 9-1 2号製鉄遺構完掘状況

图版 9-2 3号製鉄遺構完掘状況



图版 9-3 1号塚跡完掘状況



(上) 圖版10-1 21号窯跡完掘状况
(下) 圖版10-3 22号窯跡検出状况

(上) 圖版10-2 22号窯跡完掘状况
(下) 圖版10-4 21号・22号・23号窯跡検出状况

報告書抄録

ふりがな	せきのいりいせき						
書名	関ノ入遺跡						
副書名	工業用地・住宅団地用地造成に伴う発掘調査概報						
卷次							
シリーズ名	河南町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第13集						
編著者名	中野裕平						
編集機関	河南町教育委員会						
所在地	宮城県桃生郡河南町前谷地字黒沢前7番地						
発行年月日	平成16年12月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	緯度	経度	調査期間	調査面積m ²	調査原因
関ノ入遺跡 長者館跡	宮城県桃生郡 河南町桑江字 関ノ入地内	69 041	38° 28' 04"	141° 15' 15"	昭和62年8月19日 半成8年12月12日	約 240,000m ²	河南町による 工業用地用地 造成関ノ入七 地区画整理事業 による住宅 団地用地造成 に伴う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記	事項	
関ノ入遺跡	集落跡 生産遺跡	奥文・古墳・ 奈良・平安	竪穴住居跡、 窓跡、粘土探 掘坑跡、製鉄 遺構、木炭窯 跡、土壙（水 盆地、粘土探 掘坑他）	土師器、須恵 器	粘土探掘から水窓、焼成まで一連 の須恵器製作工程に関わる遺構が 検出された。		

河南町教育委員会文化財関係出版物

- 『わがまち河南の文化財』昭和61年11月 P.1~201(残部僅少) …… 河南町内の主要文化財一覧
- 『河南町文化財調査報告書』第1集「須江鍊塚遺跡」昭和62年3月 P.1~110(在庫なし)
- 『河南町文化財調査報告書』第2集「須江開ノ入遺跡詳細分布調査報告書」昭和63年3月 P.1~27(在庫なし)
- 『河南町文化財調査報告書』第3集「須江開ノ入遺跡詳細分布調査Ⅱ」平成元年3月 P.1~25(在庫なし)
- 『河南町文化財調査報告書』第4集「須江開ノ入遺跡—工業団地造成に伴う発掘調査概報」平成2年3月 P.1~67(在庫なし)
- 『河南町文化財調査報告書』第5集「御塙藏場跡 発掘調査報告書」平成3年3月 P.1~21(残部僅少)
……近世の御塙藏とその関連文書(抜粋)
- 『河南町文化財調査報告書』第6集「須江麻跡 代官山遺跡—奈良、平安時代の須恵器生産遺跡」平成5年3月 P.1~108(残部僅少)
……9世紀初頭の住居跡、8世紀後半と9世紀後半の窯跡
- 『河南町文化財調査報告書』第7集「須江麻跡 岩ノ入遺跡—陸奥海道地方最大の須恵器生産地」平成5年3月 P.1~230(残部僅少)
……古墳(前)・奈良・平安の住居跡、9世紀後半の窯跡、土師器多口瓶、鉄鉢形須恵器鉢
- 『河南町文化財調査報告書』第8集「群田遺跡」平成5年3月 P.1~72(残部僅少)
……平安の住居跡、堅穴造構・土壙、近世の整地面、「手保拾七子」線刻鏡の出土した井戸跡
- 『河南町文化財調査報告書』第9集「群田遺跡Ⅱ」平成10年3月 P.1~18(残部僅少)……時期不明の土壙
- 『河南町文化財調査報告書』第10集「岩ノ入遺跡・長者館跡—須江山淨水場配水池建設(増設)に伴う事前調査一」
- 『河南町文化財調査報告書』第11集「御塙藏場跡—三陸縦貫自動車道「矢本・右巻道路」施工に伴う事前調査一」
平成12年11月 P.1~26(残部僅少)……近世の御塙藏(推定地)と陶器・磁器
- 『河南町文化財調査報告書』第12集「細田遺跡—細田採石工事に伴う事前調査一」平成14年12月 P.1~44(残部僅少)
……9世紀中葉～10世紀初頭の住居跡、ロクロピット・精製粘土・作業台と推定される加工石を伴うものあり
- 『河南町文化財調査報告書』第13集「岩ノ入遺跡—工業用地・住宅用地造成工事に伴う発掘調査概報一」平成16年12月
P.1~80……占墳(前)・平安の住居跡、9世紀初頭～9世紀後半の窯跡、平安の粘土採掘坑跡・上壙・製鉄遺構、近世初期の木炭窯跡

河南町文化財調査報告書 第13集

閑ノ入遺跡

平成16年12月24日 発刊

発行 河南町教育委員会

〒967-1101
宮城県仙台市河原町西野字北山17号
TEL 0225-721-2092

印刷 株式会社 鈴木印刷所

〒968-0862
宮城県仙台市泉区下若林字若林17号
TEL 0225-721-4101/FAX

